叢A
201

14.5-563
1200600797821

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料　第三十六編

カムチヤツカ州要覽

滿鐵産業部

立憲民政黨政務調査館

12.3.29

始

露文翻譯 ソ聯極東及外蒙調査資料 第三十六編

カムチヤツカ州要覽

滿鐵産業部

露文翻譯

ソ聯極東及外蒙調査資料發刊の辭

ソ聯極東地方及外蒙の地は日滿兩國の隣接地として、之れが眞相を究明するの必要なのは言を俟たない。嘗て當會の前身たる調査課が十餘年の日子を費し、露西亞諸官廳の各方面に對する調査研究の結果たる權威ある文獻を網羅し、之を翻譯して露亞經濟調査叢書全九十卷、約三萬頁の浩瀚なる資料を江湖に發表した所以も茲にある。

同叢書は其後益々我國の關心を要するに至つたソ聯極東、西比利亞、滿蒙に關して精密な知識を與ふる唯一の資料として、現に尙ほ我國各方面に多大の便宜を提供しつゝあるは周知の事實である。而も世界各地の狀勢は日に月に變化して底止する所を知らず、前著露亞經濟調査叢書の提供する知識が如何に詳細且豐富なるものにせよ、發刊以來十餘年其自然地理的部分を除き現狀と多大の懸隔を見るに至つたこと亦た已むを得ないところである。抑々露亞經濟調査叢書の原本となつた資料は主として露西亞革命前、即ち帝政露西亞時代に刊行せられたものであつたから、其純然たる自然地理的部分に於てこそ今日に於ても變化する所はないが、其文化的方面、政治經濟に關する分野に於ては根本的な改革變遷を見、最早舊日の俤を留めない狀態に在る。又自然資源の方面に於てすら近年ソ聯政府の積極的な探査事業の成果として幾多の新發見があり、從來未調査の爲めに無きものと推定せられたものにして今日全然認識を改むるを要するに至つたもの一にして足らぬ。

何れの意味に於てもソ聯極東、西比利亞、蒙古は新たに見直さねばならぬことゝなつた。此必要に應ずるため當

I種
W
1200600797821

會は曩に『ソ聯極東及び西比利亞總攬』發刊の計畫を立て自然、社會各方面に亙る資料を周到に網羅し且檢討を加へて之が整備に努めつゝあるのであるが、時局は益々此地方の實情を一日も速かに一般に知らしめることを要求してやまぬので飽迄巧遲主義に膠著するを容されない。乃ち時勢の要求に順應し、ソ聯極東、蒙古、新疆各方面に亙る最新の資料の略揃つたことを機會とし之を翻譯し單純な素材の儘急速之を刊行することゝした。本資料が江湖の急需に應じ國家國民の進運に貢献せむことを庶幾ふ。

昭和九年八月

滿鐵經濟調査會委員長

河本大作

例言

一、本書は、一九三四年刊ミハイル・ポリシャコフ並びにウラヂミル・ルビンスキー著『カムチャツカ州』(Камчатская Область) 全部と一九三四年刊エム・ア・セルゲーエフ著『カムチャツカ地方』(Камчатский Край) 中沿革　部分とを翻譯したものである。

一、元來、カムチャツカ地方は亞露の極北東部に位し中央を離るゝこと遠く、その經濟調査は或ひは植民政策的なるか個々の探險隊による早卒なる觀察に過ぎなかつた。完全なる調査が試みられた最初は、一九二六年乃至二七年の沿極地々方國勢調査であつた。併し該資料も多くの缺陷を有し、カムチャツカの特殊諸條件により諸矛盾を來し、而も既に陳腐となつた。何となれば該時期よりカムチャツカ地方の事態は一變して、荒廢せる本地方は著々建設の歩を進めたのである。從つてカムチャツカに關する過去の全資料を蒐集綜合し且つその最近事情を紹介し以つてその將來の經濟的、文化的發展の見透しをなすべきは當然のことであつたが、本書に至つて該課題を果したと云へよう。換言すれば本書は再建の途についたカムチャツカに關する最近の資料と云はなければならない。

一、カムチャツカに關する滿鐵調査課刊行の翻譯書に、尨大なる『勘察加調査書』六卷がある。該六冊はリャプシンスキー勘察加調査隊の調査報告にして氣象班並びに植物班の作業にかゝるものである。尚同じく『露領極東の魚

類及毛皮資源』下卷中に、カムチャツカに關する記述が見え、その第三章は『一九二三年のコマンドルスキー群島』を詳說しあり。

一、本書の翻譯は當班々員林慶二之れを擔當した。

昭和十一年九月

滿鐵產業部資料室北方班

要旨

一、沿革

帝政露西亞のカムチャツカ地方侵略史は、遠く十七世紀中葉に溯り、哥薩克デジネフの名と結びついてゐる。次いでアトラーソフ、ベーリングを經て幾多の征服者がカムチャツカを開拓していつた。當時カムチャツカは、豐富なる毛皮並びに海獸の資源を無限に存する樣に思はれた。又事實巨大なる資源が存在してゐたのだが、十八世紀半頃より米人がその捕獲に參加し始めて以來、該地方資源は著しく減少し急速に衰退した。その間激烈なる米露二資本の鬪爭が行はれ、露國資本は漸次蠶食されていつた。米露商會が米國資本に屈服せざるを得なかつた如き、その一例である。

二十世紀に入つて、新しく魚族資源が前面に押出された。該資源の利用は、日本人を主とした。殊に所謂『國內戰及び外國武力干涉』時代に於ては、露人は全面的に退却し、魚類加工業に於ては全然一掃されて了ふ狀態であつた。莫遮、カムチャツカは二百年に亙る植民政策の結果、殊の外荒廢し、加之一九一七年乃至二二年の混亂時代に於て疲弊の最頂點に達した。

一九二二年十一月十日、カムチャツカには始めてソウヴェート政權が樹立された。ソウヴェート政權は所謂レーニンの民族政策に基き區劃せる各民族管區より獨立してカムチャツカ州を創つた。茲にカムチャツカ州とは、北緯五〇度四九分と五八度との間のカムチャツカ半島南部の大半を稱するのである。

ソウヴェート政權は、カムチャツカの復興、再建を目的とし、既に若干の基礎は設定されたと見るべきも、尙その發展は將來に俟つべきであり、現在に於ては舊來の殘滓を未だ克服し得ない。

二、自然的諸條件

本州は面積二一萬平方粁にして、三方をベーリング海、日本海、オホーツク海に圍まれ、僅かに北境をコリャクスキイ民族管區に接壤してゐる。元來カムチャツカ半島は島嶼を成してゐたのであるが、現在は地峽を距てゝ大陸と接續してゐる。本州の著しき特徴は、火山の噴火力並びに活動の廣汎性に於て、瓜哇島に次いで世界第二位を占める點にある。從つて到る處に溫泉が豐富である。中央部を縱走する山脈が自然を兩分し且つ河川を二河系に分つ河川は、カムチャツカ河を除けば殆んど水運の便がない。唯その水力の開發の將來に期待するところ大きい。

氣候帶は三つに分たれる。比較的溫暖なる東海岸地方、それと逆の西海岸地方及び大陸的傾向を帶びるカムチャツカ河谷之れである。該河谷内ミリコウォの平均氣溫は一月―(一)二五度、八月―一四・一度（七月―一五度）である。降水量の最大量（ペトロパウロフスク）と最小量（オゼールナヤ）の差違は七八九粍に達する。曇天及び霧の日並びに暴風は本州につきものである。

本州の代表植物は楊柳、エルマン樺及び落葉松である。動物界は多樣性にして豐富である。

三、住民

本州人口は、一九二七年に於て九、六七七人、その内ペトロパウロフスク市は主として露人居住しその總數一、六九一人で、他は農村人口である。カムチャツカ土民中最多數を占めるはカムチャダールで、之れは既に露人と混淆して了つた。人口動態は、一八九七年乃至一九〇八年間に一三%を減少し、一九〇八年乃至一九二六年間に八二%の增加を見た。一九二六年以降は更に增加して五年間に倍加した。加之、季節勞働人口は二萬五千人で日本漁業部門に働く者を合すると五萬を算する。最も稠密なる人口密度はペトロパウロフスキイ區で一平方粁當り〇・二五人、最小なるはブイストリンスキイ民族區で〇・〇二人である。住民中男は五六%、女は四四%、勞働人口は五一%を占める。住民の經濟は原則として一部門に限らず、多くの部門を含む。基本的經濟部門は漁業である。

ラムート人はブイストリンスキイ特別民族區を占め、三七世帶、總數四六九人で、八〇%は養鹿業を主生業とする。アレウト人はコマンドルスキイ群島に住み、その主生業は賃勞働である。

住民經濟に於ける分化、從つて又階級構成に於ける分化の過程は、革命前既に加速度的に進行してゐた。即ち巨大なる商業資本が自己の内に富農を存して貧農に二重の壓迫を加へ、之れに依つて經濟的分化を尙一層强めた。然

るにソヴェート政權が樹立されてから斯かる社會構成は根本的に變化を來し、現在に於ては、ソヴェート化の支柱としてのプロレタリアの中核が組織され、階級としての富農の清算が急テンポで行はれてゐる。

四、漁　業

カムチャツカ産の魚類中、産業價値上第一位を占めるものは鮭屬である。一九三一年以來極東に於ては奇數年度に、その破局的減收が見られ始めたが、之れは量から云へば何等特別の現象ではない。鱈並びに鰐に關しては、その何れも巨大なる資源を有してゐる。特に後者の『ヤウィンスキイ鰐場』は世界第二位を占めてゐる。爾餘の海棲魚に至つては、將來を有すれども未だ發達不充分である。主要魚類の捕獲高は西海岸地方、特にその南半が壓倒的優勢を示してゐる。

一般的漁撈は、之れ迄のところ主として河川に於て行はれ居るも漸次海面漁撈に移行しつゝある。本部門に於て日本人の進出しあるは蟹業で、日本の蟹罐製造業は、既に十二年に亙る歴史を持つてゐる。而してソヴェート漁業將來の發展を期せんが爲には、先づ日本との漁業條約を問題とせねばならない。その主要課題は、第一にソヴェート國營機關に屬する漁區の標準高を高め且つその數を增加すること、第二に地方民の積極的なる漁區の利用、第三に新移住民に因る巨大なる漁撈コルホーズの組織等に歸する事が出來よう。

魚類加工業に關しては、ソヴェート側の該部門は內亂及び外國武力干渉の時代に全く破壞されて了つた爲、ソヴェート・カムチヤツカは之れを再建しなければならぬ狀態であつた。

五、海獸捕獲業

海獸は、主として高價なる鯨及び海象の如き最大なるものに殆んど限られ、該部門に從事する者は人口の一九・七%を占めるに過ぎない。將來の見透しとしては、巨大にして今日迄殆んど利用されなかつた鰭脚動物資源の開發は充分餘地を存するが、これは加工業を再建し且つ最大限度に發展せしむべき諸施設を實行してのみ可能なことに屬する。

六、毛　皮　業

毛皮資源は實に豐富であつたが、著しき濫獲を蒙つた。

獵虎の捕獲は、極東に於ては唯コマンドルスキイ群島並びにロバトカ岬にのみ限られる。膃肭獸は、十九世紀初頭に於てその毛皮を燒却、放棄したり、又は燃料としたりしたものであつた。尤も禁獵區の適用は、一八〇五年に既に行はれた。一九三二年に於ける膃肭獸頭數は約二〇、〇〇〇頭である。一九三二年に於けるカムチャツカ黑貂業の全ソ聯に對する比重は三〇%、全極東に對する比重は約六〇%であつた。ソヴェート時代に入つてからの黑貂の平均年捕獲高は、約二、〇〇〇頭である。

本州唯一の畜産業根據地たるコマンドルスキイ群島は、青色北極狐、膃肭獸及び獵虎の集團的飼養地であるが、その發展は將來良好なる諸條件下に於て爲されねばならない。

七、農業

カムチャツカ農業は、地方的生産に依る食料品補給問題の解決を意味し、移民奬勸の現在、殊に最重要な問題である。然るにカムチャツカに於ける農業發展の可能性に關しては、調査者各自の結論を異にする。併し何れも偶然的な觀察に過ぎず、潤澤なる草地に據る畜産業と共に菜園業の發展は望み得るが、穀粒農作物の收穫は不安定である。今のところ、住民は殆んど、より有利にして安易なる漁撈並びに狩獵を行つてゐる。

農業發展の二形態は、ソフホーズ並びにコルホーズである。最初のソフホーズがカムチャツカに組織されたのは、一九三〇年のことであつた。一九三一年に於ける總經營數一、一五七中、ソフホーズ—三、コルホーズ—五七、試驗農場—八を算した。第一次五ヶ年計畫に於ける播種面積は著しく增大したが、收穫高は甚だ立後れを示してゐる畜産業に於けるソフホーズ部門に至つては更に著しい立後れを未だ克服し得ない。

八、林業

カムチャツカに於ては、一九二九年まで林業は存在しなかつた。從つて何等か根據ある調査統計すら該部門には

見るを得ない。木材調達計畫は、一九三二年—一〇萬立方米、一九三三年—七萬五千立方米で、その內用材は一九三二年—七一%、一九三三年—七三%を占める豫定である。カムチャツカに於ける木材加工業は一九三三年竣工の唯一のカムチャツカ木材綜合工場に集中される。その年加工量は、丸太一一四、〇〇〇立方米と豫定されてゐる。

九、運輸並に通信

カムチャツカは、アジア大陸の一部を構成し乍ら大陸方面との陸路連絡を缺き專ら水路に依る。而も重大なる連絡機關としての自己の船舶を有しない。該水路の衝に當るものは、外國傭船、ソ聯商船並びに若干のカムチャツカ株式會社の船舶である。

加之、外國傭船はソ聯商船を著しく凌駕してゐる。カムチャツカへの仕向貨物の過半はペンジンよりロパトカ岬に到る西海岸に向けられる。貨物主要發着地は、西海岸に於てはキフチク、ウスチ・ボリシェレツク、オゼールナヤ東海岸に於てはペトロパウロフスク、ウスチ・カムチャツカ等とする。將來の東海岸地方の貨物取扱數の比重は、一九三三年五—四・二%、一九三七年—五七・一%と豫定されてゐる。貨物搬出入量の比重は、一九三二年に於て搬出三〇%に比し搬入七〇%であつたが、第二次五ヶ年計畫の豫定に依れば、一九三三年度は三三・七%及至六六・三%、一九三七年度には三九%及至六一%の割合となる筈である。

カムチャツカ內水路はカムチャツカ河に限られる。鐵道は全く缺如する。從來貨物運輸は冬季犬橇に依り、夏季馱

馬及び獨木舟に依り行はれてゐた。加之、カムチャツカは自然港灣を缺き、築港不便なるを以つて、鐵道敷設を緊急事とする。その他航空路網は略ほ實現にちかい。

通信に關しては何れも將來の發展が待たれてゐる。

十、配　給

革命前カムチャツカ住民に對する商品配給は、主として外國商會より成る個人商會に依つて行はれてゐた。一九二五年に至りオホーツク・カムチャツカ株式會社、次いで國營貿易廳極東支部が該權利を獲得し、一九二八年に至りカムチャツカ株式會社がその衝に當り、爾後一九三一年に至るまで同會社と協同組合聯合とが二重に配給を行つてゐたが、其後同會社は唯商品の搬入のみを行ひ、協同組合聯合並びにその支部網の發展に從ひ、專ら之れに全配給活動を移讓しつゝある。

十一、基幹部員

カムチャツカ地方民は少數にして而も自己の經濟に從事するを以つて勞働力の餘剩を漁業部門に注ぎ得ず、從つて該部門は外部より勞働力を移入さざるを得なかつた。先づ最初は近接せる日本の熟練せる勞働者を利用した。一九三〇年に於ける全ソヴェート側の勞働力の不足は二萬五千人であつたが、同年の日本人の利用率は既に四・四％に低

下した（一九二八年は五三・三％を示した）。次に問題は季節勞働者に關してゐる。即ち季節勞働者は、凡ゆる點より見て不利であるのに、最近に於ては寧ろ增加してゐる。之れが對策は、產業的移民の奬勵にある。

熟練勞働の基幹部員を養成する爲に、諸種の生產に附屬する學校が創設された。之れと同時に、諸企業に於ける勞働力の組織化並びに合理化が開始され、作業標準が著しく高まつた。無制限の出來高拂制と共に、勞働の突擊隊運動並びに社會主義的競爭は此處でも行はれてゐる。

十二、社會、文化施設

カムチャツカ住民の社會、文化施設は、革命までは著しく低い階段にあつた。一九〇九年、人口七、二九六人を數へるペトロパウロフスキイ郡（全カムチャツカ半島）の小學校就學生徒數は總數四六四名に過ぎず、紙、鉛筆その他參考書を缺く爲に屢々授業が出來なかつた程である。更に、醫療施設に關しては、醫師六名を算するに過ぎなかつた。斯かる事態は、ソヴェート政權樹立後に入つて一變した。即ち、生徒數は二、七七六人に激增し、加之生產に附屬する學校が創設され、學習率は一九〇九年の五・四％から一九三一年の一六・四％に高められた。醫療施設も飛躍を遂げた。乍併此方面に於ても尙將來多くの努力が爲されねばならない。

十三、結　論

既に建設期に入り、計畫經濟實施のためその資源に關する具體的資料を必要としてゐる現在に於て、カムチャツカ程に貧弱且つ不正確なる調査資料しか有しない地方はない。一九二三年に於ても、未調査地域は八一%を占めてゐた。一九二七年以降カムチャツカ探險隊は强化されたにも拘はらず、調査不充分にして將來の經濟發展に何等かの量的指標を與へることは出來ない。

第二次五ヶ年計畫に於ても依然、諸施設並びに投資の重心は最有利且つ最重要なる漁業部門に置かれねばならない。漁業が中心となつてこそ、運輸、動力、家屋建築、配給、基幹部員等の一聯の問題が、より意義あるものとなるであらう。動力資源は價値大なるにも拘はらず、未だ有望視すべきものを見ない。西海岸に於て發見された炭層は、地方的需要に限られる。石油資源は現在まで不明である。唯代用燃料となる泥炭資源は巨大にして、需要地方に接するを以つて甚だ好都合である。水力利用も將來のことに屬する。

第一次五ヶ年計畫を經驗したカムチャツカを概觀すれば、カムチャツカは決定的な變化を蒙つた。カムチャツカは、巨大なる國營企業並びに一般生業を基礎とする地方經濟の社會主義的建設、豐農階級の清算、住民の文化、政治的立後れの克服を目指して進んでゐると云へやう。唯、經濟部門に於けるより精細なる諸成果は今後に俟たなければならない。

原著序（一）

本書は、ソ聯國家計畫委員會幹部會附屬北方委員會の委託に基き編纂せられたるものであつて、ソ聯北部地方の諸民族管區及び區に於ける經濟的並びに文化的建設を叙述せる叢書中の第二編を成すものである。

本書著者エム・ア・ポリシャコフ並にウ・イ・ルビンスキイは、本著述の爲廣く文獻並に官廳資料を利用したに止まらず、亦カムチャツカ地方を踏査し以て該地方を自ら見聞したのである。

元來カムチャツカ地方の經濟は未だ調査不充分なれば、本書に引用せる統計資料は絶對に正確であり完全であると斷言出來ないことは卷頭に於て著者も述べてゐる如くである。

本書の主要課題は、即ちカムチャツカの生產力の研究資料を蒐集、體系化し、且つ本地方將來の經濟的文化的發展の最も重要なる諸課題を決定する事に在る。

カムチャツカは、著しく帝政政府の植民政策の重壓を蒙つた地方の一つである。該政策は土民の死滅、天然資源の掠奪、地方經濟の中心地の荒廢等、幾多の頽廢的現象を惹起せしめた。

カムチャツカに於けるソウヱート政府の出現は、その廣汎なる經濟的、文化的建設を促進し、以つて同地方經濟をしてソ聯極東に於ける工業地方の一に轉ぜしめた。

カムチャツカは廣汎なる諸可能性に惠まれてゐる。第一にはその魚類資源、即ち鮭、鱈、鱈等が存在する。該部門に於て、カムチャツカは極東地方並びに全ソ聯の經濟に於て確固たる地位を占め、且つ將來その意義を尙一層强化するに違ひない。

最近のカムチャツカ踏査に依れば、石油、石炭、泥炭の動力資源及び木材、鐵、粘土等々の建築材料の存在が明らかになつた。農業の廣汎なる發展の可能性は、菜園業及び牧畜業の部門に於て認められる。この事はカムチャツカに、それ自身の動力、原料並びに食糧根據地を建設せしめ、且つ同地方生產力發展の將來性を保障するものである。

第二次五ヶ年計畫は、第十七回黨大會の指令に基くカムチャツカ將來の文化的、政治的及び經濟的發展並に鞏固化の時代であらねばならぬ。かゝる目的の達成に當つてカムチャツカは、二つの未解決問題即ち運輸問題と勞働力の問題に遭遇する。

鐵道及び馬車輸送等の內部的運輸機關を完全に缺如してゐる上に、大陸との水上並に空中連絡が極めて不充分なること、及び地方勞働者が不足し、大陸方面より年々季節勞働者を誘致せねばならぬ事等は、カムチャツカの發展にとつて障碍をなすものである。斯かる事情の克服こそは、近き將來に於けるソウヱート諸機關の任務でなければならない。

本書は、その從事する業務の性質上カムチャツカと關係ある地方及び中央の勤務員並にソ聯北部地方の經濟及び文化建設の諸問題に關心を有する一般讀者を目標に編纂せられたものである。

北方委員會は讀者に對して、本書に關する注意並に批評をモスクワ市カルウニンスカヤ廣場、第一號、ソ聯國家計畫委員會內北方委員會宛送らるゝ事をお願ひする次第である。

ソ聯國家計畫委員會幹部會附屬北方委員會

原著序（二）

本書編纂に際し著者等は多大の困難に逢著せざるを得なかつたが、それは主として統計並に事實に關する諸資料の不備に基くものであつた。

カムチャツカに於ける經濟生活の正確にして且體系的な記錄は一般には行はれなかつた。革命前の統計資料と言へば警察の手に成る所謂官製報告か、然らざれば短期間に限られたる探險隊及び個々の踏査者の觀察に基礎を置くものであつた。カムチャツカ經濟に關する完全なる記述の最初の試みは、一九二六年乃至一九二七年の沿極地地方國勢調査に於て行はれた。乍併同調査資料が著しく陳腐となつたことは別問題としても、該調査それ自體が既にカムチャツカの特殊的な諸條件（交通路の缺如、調査が始めての試みなりしこと經濟諸形態の特異性等々）に禍せられて幾多の缺如を持つものであつた。

近年の文獻的並びに官廳的資料に關して云へば、それ等は量的に廣汎であるが、偶然的性質を有し、種々の期目に關するものであり、幾多のブランクを殘してゐる。而も肝心なことは、それが多種多樣の方法に依つて集成されたものであることである。

從つて、資料の對照の不可能なること並びにその全き矛盾すら惹起されるのである。

資料の方法論は、官廳毎に之れを異にする。

資料の大部分は、最近一九三二年度の行政區劃により決定された區域のカムチャツカ州に非ずして、種々の更に廣大なる行政區域、即ち全カムチャツカ半島、時としてはチュコツキイ、アナドゥイルスキイ地方、更にオホーツク海沿岸地方をすら含めた地方に關するものである。更に小區域の行政單位に關する資料は、各地方に存在してゐるに相違なきも、之れを中央に於て纏めることは不可能であつた。斯くの如き事態は、カムチャツカ州の種々の經濟的契機に統計的表現を與へることを不可能ならしめ且つ多くの場合、著者等は當該狀況に一定の條件を附せざるを得なかつた。

斯から資料の狀態は、著者等をしてその著述を放棄し且つ向後も斯くの如き情況の下に置くことの不可能てふ問題を鋭く且つ斷乎として提起することを餘儀なくせしめる。各官廳及び各經濟組織の統計は秩序立てねばならぬし資料の蒐集及び統一に一定の方法及び單一性が注入されねばならない。それと同時に、最近發生し且つ著しく該地方を變形せしめた、カムチャツカに於ける經濟的並びに文化的生活の著しき進歩が、實に一九二六年乃至一九二七年の沿極地々方國勢調査に類似する新しき全般的調査の實行問題を緊急なる議事日程として上提せしめたのである。

著者識

度量衡換算表

區分	ソ聯單位	日本尺貫法	「メートル」法
距離	一露里 一「サーヂエン」	〇・二七一六里 七・〇四〇九尺	一・〇六六八粁 二・一三三六米
面積	一「ヘクタール」 一「デシヤチン」	一・〇〇八三町 一・一〇一六町	一〇、〇〇〇平方米 一〇、九二五平方米
重量	一「ツェントネル」 一「布度」 一「フント」	二六・六〇〇貫 四貫・三六八一 〇・一〇九二貫	一〇〇瓩 一六・三八一瓩 〇・四〇九五
容積	一「ウェドロ」 一「ブッセル」	〇・〇六八二石 〇・一九五三石	一二・二九九立 三五・二五二立
材積（木材）	一立方米	三・五九三七石 一・九九四八尺締	一立方米

カムチヤツカ州要覽

目次

要旨

原著序

第一章　緒論……一

第二章　沿革……一五

第一節　侵略時代……一五

第二節　革命前の情勢……二三

第三節　外國武力干渉及びソウェート政權樹立鬪爭時代……二七

第四節　ソウェート建設……三四

第三章　自然的諸條件及び天然資源……四五
第四章　住民、その經濟及び階級構成……七四
第一節　住民の構成及び人口……七四
第二節　民族區……八一
第三節　經濟的分化……八八
第五章　漁業……一〇一
第一節　原料根據地とその利用……一〇一
第二節　魚類加工業……一二四
第六章　海獸捕獲業……一三〇
第七章　毛皮業……一三三

第八章　農業……一四二
第九章　ソフホーズ・コルホーズの建設……一五四
第十章　林業……一六八
第十一章　運輸及び通信……一七五
第十二章　物資配給……一九三
第十三章　基幹部員……一九九
第十四章　社會的＝文化的施設……二一二
第十五章　科學的調査作業……二一六
第十六章　結論……二二五

カムチャツカ州要覽

第一章　緒論

カムチャツカの歴史は、専制的帝政露西亞が遠隔の邊境に於て自己の植民政策を遂行するに用ゐた方策の明瞭なる一雛型を成す。

カムチャツカ地方侵略の端緒は、十七世紀中葉に溯り、コルイマ川より北方海路を、ベーリング海峡を經て該地方に侵入した哥薩克デジネフの名に結びついてゐる。暴風のため海岸に投げ出されたデジネフは、アナドゥイリ地方を奥深く進入し、現在のマルコウ村にアナドゥイルスキー城砦を構築して、此處を爾後の探險の主根據地とした。初期に於ける探險は、チュコツキイ、アナドゥイルスキイ地方の外に出でず、唯々十七世紀の九十年代に至つて、始めて、五十人長アトラーソフが一二〇人より成る一隊を引率して更に南方、カムチャツカの地に進入した。

此時を以つて、露人のカムチャツカ侵略の端緒と看做すべきである。

アトラーソフ及びピーター一世の時代に至る其後の幾多の侵略者の全活動は、カムチャツカの組織的掠奪となつて表れ、常に土民の大量的剿滅を伴つた、土民も亦斯くの如き凌辱に對し侵略的の個々の部隊を襲撃し、又は組織

的な暴動を以つて之に答へた。

モスクワ朝時代が終ると、カムチャツカ史にピーター一世の帝國主義的志向に制約せられた新時代が始まつた。十八世紀の二十年代に、これより八十年前既にデジネフが通過した亞細亞と亞米利加との間の海峽を探險すべく、ベーリング探險隊がカムチャツカに向ひ、同じく三十年代の終りには、第二ベーリング探險隊がカムチャツカに向つた。本探險隊は海岸線の描寫をなし、陸地、諸海峽、諸島を探求し、且つカムチャツカ半島とその自然、經濟、住民の生活狀態を研究した。本探險隊の一員であつた大學生ステパン・クラシェニンニコフは――後年科學院教授となつた――當時のカムチャツカの古典的な記述を行つた。

併し同時に、他の過程も進行してゐた。ピーター大帝以後、宮廷内に於て行はれた果てしなき陰謀の結果、カムチャツカは、ベテルブルグより追放された官吏及び一獲千金を夢みる冒險家及び山師の輩で充滿した。カムチャツカは、從來の直接的壓制の外に、更に苛歛誅求及び賄賂の『魅力』を認識した。學術的探險と同時に、無責任なる爲政者の野蠻極まる蹂躙、掠奪及び壓迫が行はれ、之に對し『忠良なる臣民』たる土民は新らたなる蜂起を以て答へた。

カムチャツカ征服の露人にとつて、最も好餌となつたのは豐富なる毛皮獸及び海獸の捕獲であつた。初めて露人がカムチャツカに足跡を印した當時には、北極狐、黑貂、狐の如き貴重なる獸類は無盡藏に棲息してゐた。コマンドルスキイ群島に關するベルグの記述に依れば、ベーリング當時には、同群島に於ては北極狐が恰も犬の如く人間に追躡してゐた。『海と云はず、海岸と云はず、獵虎、海驢、膃肭獸、海豹……の如き獸類が多數棲息してゐた。ベーリング島では、獵虎が大群をなして海岸に密集し、人間を恐れないのみならず、焚火の側にやつて來る。其内の數匹を撲殺すると始めて人間の側を離れるのであつた。』(註)

(註)ベルグ著。カムチャツカの發見とベーリング探險隊。

初め、特別の注目を惹いたのは黑貂で、モスクワ朝に於ける之れが需要は莫大であつた。その毛皮はモスクワの帝室倉庫に送附され、帝政々府の官史の富貴及び買收の源泉となり、國外に出でては貨幣商品となつた。海獸中、特に注意を惹いたのは膃肭獸であつた。

一七一六年、オホーツクより(オホーツク海を經て)カムチャツカ西海岸に到る水路が開設された。この時以降、北部地方よりアナドゥイルスキイ城砦を經由する舊道は荒廢に歸した。カムチャツカに至る海路の發見は、幾多の海上旅行を促す刺戟となつたが、その基底には依然として毛皮資源の追究が存在してゐた。

初期の探險は成功であつた。之れが人々の慾望を煽つた。十八世紀の四十年代より始めて、殆んど六十年間に亙り、此の亞細亞の北東地方は、掠奪を目的とする盜賊團の活動舞臺に化した。商人及び企業家は、オホーツクを根據地とし、自己の資本と責任とを以つて競爭で船舶を艤裝し、幸福と成功を求めて、カムチャツカ、千島列島及びアリューシャン竝びに爾餘の群島に向つて出立した。此等の冒險家の或者は海中の藻屑と消え、或者は大洋の彼方に流され、或る人達は新しき島々を發見し、又は亞米利加沿岸に達し莫大なる獲物を携へて歸國した。

太平洋、ベーリング海及びオホーツク海の富源は、露人と共に諸外國の企業家も亦之れを利用した。其の内主要な役割を演じたのは亞米利加人で、彼等は該地方へ巨大なる産業調査隊を派遣した。露國及び外國の掠奪者の合一せる努力の結果、カムチャツカは急速に、その豐富なる天然資源を喪失して行つた。

十八世紀の八十年代に、商人シェレーホフは、『米國領と稱せられるアラスカ地方並に既知及び未知の諸島を對象とする、毛皮業の遂行及び凡ゆる探險並びに土民との自由貿易を行ふ目的で個人會社』を組織した。之れが、新開發地に對する個々の强奪的侵略より組織的掠奪への移行の第一歩であつた。一七九九年には、北方地方に自己の商船隊を派遣したオスチンド商會との鬪爭を、その一部の目的としたる露國企業家の凡ゆる個人商會が合一して巨大なる米露商會が構成された。

同商會は、太平洋、アラスカ及び北米沿岸より成る廣大なる領域を統轄し、その全資源の無制限の開發、新地方の發見、その植民、堡壘の裝備等々の權利を保持した。乍併十九世紀初頭、政府は同商會に對しカムチャツカをも自己の管轄下に併合する樣申出でたにも拘はらず、同商會はその構成領域中にカムチャツカを含めなかつた。拒絶の原因は、同商會の見解に依れば、强化せる掠奪の結果カムチャツカは北東地方の爾餘の領域に比較して既に大なる物質的利害の對象でなかつたと云ふにありと思はれる。他方、カムチャツカ讓渡の代償として政府に依り同商會に課せられた、カムチャツカへの食料配給の義務は商會にとり過分の負擔に思はれたからである。

此の商會の拒絶に依り、カムチャツカは何物をも失はなかつた。何となれば、當該資源の掠奪的利用を目的とす

アワチンスカヤ(左方)及びコリャツカヤ(右方)火山。下方はエリゾヴォ村。

る同商會の活動は、決して同地方の經濟的發展を促進するものではなかつたから。一八五一年より一八五五年に至るまで、カムチャツカを調査したカルル・フォン・ディトマールは左の如く記載してゐる。『殆んど一世紀の間存續してゐる米露商會は、非常なる特權と巨大なる財源を有し乍ら、國家に對して些少の利益を與へず、反つてその放漫なる政策に因り國家に何百萬と云ふ損失をかけてゐる。』（註）

（註）カルル・フォン・ディトマール著。　一八五一年――一八五五年に於けるカムチャツカ見聞記　聖彼得堡　一九〇一年刊

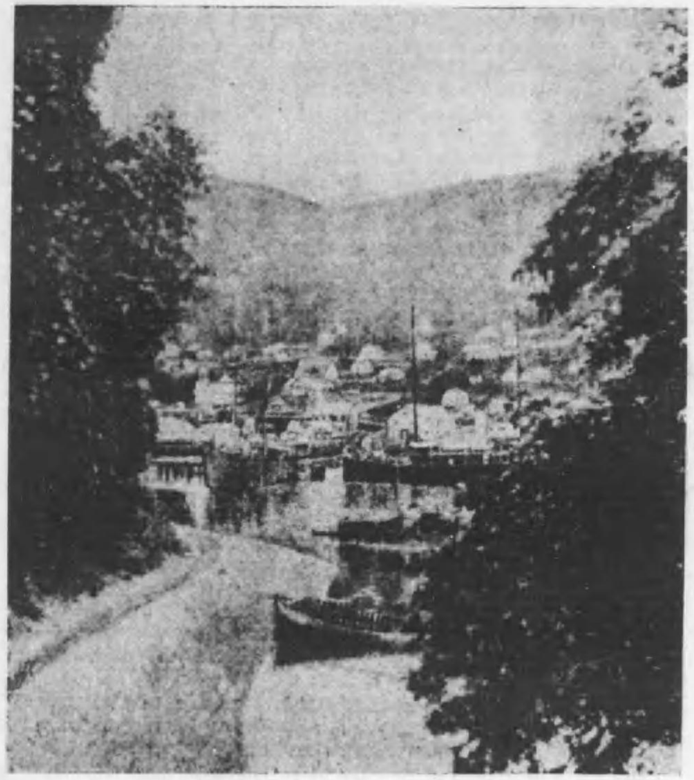
既に十九世紀の四十年代に、同商會は若く精力的な米國資本にその陣營を明渡し始めた。一八四〇年、米露商會はハドソンベイ商會と契約を結び、向後十年間を限り、北米に於ける露國植民領域中全沿岸地帶を賃貸すべく餘儀なくされた。この契約は、後更に十年間の期限を更新した。自己の凡ゆる行動、非創意性及非經濟的な經營に因り同商會は北米に於ける露領の喪失の素地を作りつつあつた。一八六七年、僅か七五〇萬弗にてアラスカを合衆國に賣却したのは、米露商會の活動の論理的歸結であつた。

十九世紀の十年代より始まり二十世紀初頭に到る間は、カムチャツカには、多數の露國及び外國の掠奪者が跳梁し、個人的に、又會社として當地方の天然資源を奪取し續けてゐた。その内最大なのは、一八九一年に創立された『露西亞臘納獸捕獲業會社』であつた。

二十世紀の最初の十年間に、カムチャツカは新らたなる自己の發展段階に進んだ。それは、それ迄全く開發されてゐなかつた該地方の巨大なる魚族資源の利用に關聯してゐる。此の期間に於て最も積極的役割を果したのは、日本資本であつた。日本の漁業企業家の活動は、一九一九年――一九二二年間に著しく強化された。中央との聯絡杜絶、内亂及び外國武力干渉は、クレヂット設定、產業設備及び生產物販賣に際して極東に於ける露國の漁業企業家を苦境に陷れた。この事態を利用したのは日本人であつて、該期間、彼等は露人にとつて『唯一の銀行家、供給者にして且つ諸生業に於ける配給、漁撈貨物の運輸及び國外市場への生產物の賣捌きに際しての仲買人』となつたのである之れが爲該期間に於ける極東漁業は、殆んど完全に日本人の手中に移り、彼等は該地に於て無制限、無競爭の雇傭主となりおほせた。日本の漁業企業家は、自己の活動に甚だしき掠奪的形態を附與し、從つて若しも十月革命が事態を變化しなかつたならば、カムチャツカの魚族資源、主として該產業活動の主要對象を成す鮭屬は、毛皮業と同じ運命に陷つたであらうことは疑ひない。

（註）『極東に於ける魚族並びに毛皮資源』

カムチャツカ天然資源の掠奪體系は、帝政政府の側よりする地方經濟の發展並びに強化に資する何等か積極的なる方策に伴はなかつたし又伴ひ得なかつた。事實、帝政政府はカムチャツカに農業を組織せんと試み、該地に固有の食料根據地を設置し、以つて勤務員及び地方民の食料を年々カムチャツカに輸送すべき煩を避けんと考へた。この目的の爲、政府はカムチャツカへ向けシベリアより農民を移住せしめたが、地方當局の監督下に於ては、この試みは失敗に終らざるを得なかつた。カムチャツカは、依然廣漠たる植民地として止まり、絕えず自己の資源を失ひ而して之れに代はるべき何物をも受取ることが出來なかつた。



ペトロパウロフスク港側より見たる

露人出現の當初よりソウェート政權樹立に到るまで、カムチャツカ開發の全過程は、露骨なる掠奪的傾向中に終始した。啻に強大なる資本家、企業家及び買占人のみならず、住民自身も亦地方經濟の組織及び改良に關して配慮せず、只管自然資源の絶滅に努力した。

斯かる植民政策は、カムチャツカの原住民に關して致命的結果を招來した。土民は肉體的に廢滅し、爛醉し、墮落した。彼等の間に廣汎に傳播した傳染病は、出産率を低め死亡率を高めた。土民は死滅していつた。カムチャツカの經濟的領有に最も適應せる人々は、急速に消滅してゐつた。

斯かるカムチャツカの歴史は、一聯の複雜且つ責任ある問題を、ソウェート政權の前に提起した。二百年間に亘る植民政策の全成果を最短期間に清算し、レーニンの民族政策の基底より出發する、急速にして全面的な經濟的並びに社會的、文化的建設を以つてカムチャツカを保障せねばならなかつた。

二十世紀初頭より亞細亞沿岸は原料の新源泉、産業開發の新對象、生産物販賣の新市場を追究する産業資本の最重要なる注視の的の一であつた。從つて、それを繞つて複雜極まる且つ相互に矛盾せる利害關係が相錯綜した、特にそれは資本主義國家を蔽つた經濟危機の結果著しく激化した。

カムチャツカが僻遠の地に存し、それに接近することの困難なる事情は、該地方のソウェート化直後、相當廣汎なる範圍に於て、その經濟進展を不可能ならしめた。その計畫的發展は、第一次五ヶ年計畫の第一年度、即ち一九二八年に至つて初めて着手せられたに過ぎぬ。此の時以後、カムチャツカに於けるソウェート政權の活動は、幾多の政府策を採用した。その性質及び意義は後述する。その内特殊の意義を有するは、革命前最も殘虐なる壓迫を蒙つた諸民族區に對して採用された對策である。從來の掠奪的買占人に代はる協同組合機關の發展、食糧品及び農具、日用必需品の計畫的補給、民族的管區及び同じく地區の區分を伴ふ行政區劃の實施、文化的根據地の組織、學校網及び醫療衛生施設の發展等々——是等の施設は、過去と現在との間に鋭き境界を設定し、且つ土着諸民族に對して、經濟並びに文化、政治的發展の洋々たる將來を開拓した。

ソウェート政府は、カムチャツカに於ける經濟活動の進展に當るため、カムチャツカ株式會社（AKO）と呼ばれる特殊な機關を組織した。

カムチャツカ株式會社は、第一次五ケ年計畫の最後的に是認された計畫を有しない。併し現有の基本的計畫に從へば、カムチャツカは、第一次五ケ年計畫年度内に於て既に産業地方として意味づけられたる筈である。本計畫案に據れば、産業及び運輸は、全投資額の八三・一％を占め、投資の壓倒的部分は、基本的經濟部門として識別される漁業に投資される豫定である。之に狩獵業及び主として漁業及び狩獵業の生産物加工を專門とする産業結合工場を加ふると、本産業に對する投資總額は、全投資の九三・三％を占める。續く計畫の變成は一聯の變更を齎し、沃土、泥炭及び輕石採掘等の如き新部門を提起せしめたが、産業投資の一般的構成は依然同一であつた。

カムチャツカ株式會社の資料に依れば五ケ年間に實際投資せられたる金額は五〇、七一四、〇〇〇留に上る。内譯左の如し。

	單位千留	%		單位千留	%		單位千留	%
産業	三七、五八〇・九	七四・一	配給	三七八・三	〇・七			
農業	一、九一五・一	三・八	調査	二、〇三九・七	四・〇			
運輸	五、六五五・七	一一・二	其他	三、一四四・五	六・二			

産業各部門に於ける投資額は左の如し。

	單位千留	%		單位千留	%		單位千留	%
漁業	二六、五三三・三	七〇・六	養獵業	八一八・九	二・一			
産業綜合工場	二、八七四・二	七・七	林業	五、〇六〇・二	一三・六			
鑛山業	六七〇・〇	一・七	其他	一、六二四・六	四・三			

投資の成果は、カムチャツカ株式會社の全經濟部門の生産規模に鋭く影響してゐる。工場原價に依り計算せる、五ケ年計畫間の生産總額は、一二一、六五二、二〇〇留である。第一次五ケ年計畫の漸年的生産增加は左表によつて知られる。

年次	單位千留	年次	單位千留
一九二八年	六、六七一・七	一九三一年	二五、四〇二・七（註一）
一九二九年	一〇、〇八八・二	一九三二年	五八、一二八・八（註二）
一九三〇年	二一、三八一・五		

（註一）カムチャツカ株式會社の資料に依れば、簿記計算に算入されない、毛皮部内の一六四萬留が含まれてゐる。

（註二）カムチャツカ株式會社の他の資料は、之れを四六二九八千留と記載してゐるが、之れに依れば各部門總計に一致しない。

生産物價格は年々增大し、殊に前年の投資が完全に奏功した一九三二年度に於て高騰した。五ケ年間に於ける平均を見れば、投資額一留に對して二留四〇哥の生産物が得られた。併し該價格は、各部門により著しく異る。（註）

（註）當該資料の爾餘の部門はカムチャツカ株式會社の資料中になかつた。

	留		留
漁業	四・〇〇	林業	〇・六〇
鱗山業	二・三〇	農業	一・六三

勿論、以上の數字を根據として投資に有利なる部門を決定するは誤つてゐるが、上記統計は確かに表示的である。之れを一見すれば漁業に對する投資が如何に收益性に富んでゐるか一目瞭然である。

各經濟部門の五ケ年間の生産總額は次の如し。

	單位千留		單位千留
漁業	一〇六、一九五・七	林業	三、八五二・一
毛皮業	六、九六九・二	農業	三、〇九二・五
鱗山業	一、五四三・七		

漁業の壓倒的意義は、上記の統計に極めて銳く表現されてゐる。之れ即ち、カムチャツカが過ぎ去つた五ケ年計畫に於て、主要漁業地區であつたことを物語る。

年次別のカムチャツカよりの輸出生産品價格は左の如し。

年次	單位千留	一九二八年に對する%	年次	單位千留	一九二八年に對する%
一九二八年	一、五三五・五	一〇〇	一九三一年	一九、〇八七・七	一二四三・一
一九二九年	四、九八三・〇	三二四	一九三二年	三六、八〇二・五	二三九六・八
一九三〇年	一三、九四五・〇	九〇八・二			

しかも輸出額は絶えず增大し、五ケ年計畫年度末には、その第一年度の二四倍に達した。輸出品の壓倒的部分は漁業に屬す。

ソ聯一般並びにカムチャツカ地方の經濟發展の著しい結果として、カムチャツカへの輸入の激減を考慮せぬばならない。即ち左表の如し。

年次	單位千留	年次	單位千留
一九二八年	三、八〇二・一	一九三〇年	九、五七六・八
一九二九年	五、九〇六・〇	一九三一年	四、七〇五・九

上記の統計の如く、最初の三年間の移入增加は一九三一度に於いて停滯し後激減した。（註）

（註）以上の總べての統計は、一九三二年の行政區劃により成立せるカムチャツカ州に關するものでなく、カムチャツカ株式會社の全活動區域即ちカムチャツカ、チュコッキイ、アナドゥイルスキイ、オホーツクの諸地方を含む。その内カムチャツカ州の部分を分離することは不可能である。併し何れにせよその全經濟部門に於ける總額は八〇%を下らない。何となれば、最近に至る迄カムチャツカ株式會社の、殊に漁業に於ける活動は、主としてカムチャツカ州に含まれたカムチャツカ半島南部に集中してゐたのであるから。

上記の統計は、ソウヴィート政權によつて當地方經濟の復興及び將來に於ける發展に對する巨大なる事業が、カムチャツカに於て爲されたことを示すものである。

革命前は言ふに及ばず、今日に於てさへ、カムチャツカの有する自然資源は枯渴し、既に現在では何等の利益をも齎さないと云ふが如き指摘が、屢々行はれることに鑑みる時、上記の數字は尙ほ一層意義深いものとなる。

勿論カムチャツカがソウヴィート政權樹立以前に於ける略取並びに强奪によつて損害を受けることなく、その自然資源に對して配慮する要なしと考へるならば、これは間違つてゐる。

カムチャツカは、損害、それも極めて著しき損害を蒙つたのである。供しソウヴィート政權の諸條件下にあつては、カムチャツカは年々その現有經濟部門を擴大し、幾多の新規の生產を組織せしめる可能性を多分に具へる地方として存在してゐるのである。全き根據を以つて次の如く云ひ得る。即ちカムチャツカは現在僅かに是等の可能性の開發に著手したに過ぎず、漸く自己の經濟の組織化並びに發展の第一歩を印したばかりである。

第二章　沿　革

第一節　侵略時代

モスクワ朝露西亞の商業資本の最盛期は、極東への露人の强力なる進擊を招來した。當局並びに商人階級の求利性は、收入の新源泉、商品販賣の新市場、貴重なる原料獲得の爲の新根據地を要求した。既に十五世紀には、若干のシベリア地方民族はモスクワ大公と從臣關係にあつた。十六世紀中葉の頃、植民地としてのシベリアに對するモスクワ商業資本の關心が更に著しく强化した。露西亞工業家、植民企業家たるストロガノフ家は、この政策の最强力なる表現者であつた。中央政府の代理者としての同家には、封候の諸權利――微稅權及び防禦軍の組織權が――附與されてゐた。このそれ自身の土地に於ける『異民族防禦』軍こそ露骨なる植民侵略政策の表れであつた。

一聯の複雜なる社會、經濟的原因が、當時武力即ち侵略の必須前提によるモスクワ王國の侵略的意向を保障した。十六世紀に於ける露西亞農民の著しき貧窮化、諸種の課稅の强化せる壓迫、苦難なる結果を伴ふ不斷の戰爭、農民により占められた官有地の大量的收用及びその武士階級への讓渡、農民の漸次的束縛、不斷の內亂の恐怖、頻繁なる不作及び其他の天災（疾病其他）は、中央ロシヤより農民大衆の急速なる逃避及びその東部邊境地方への集中を

招致した。この解放され逃亡せる農奴に加ふるに、自由なコサック、凡ゆる『アマチュア』、官吏及び軍人、多種多樣の冒險家、多數の商業資本の『先驅者』即ち商人及び企業家があつた。彼等の中から、亞細亞露西亞侵略の武器となつた軍隊が生れた。この凡ゆる脫走者を『新天地』にひきつけたものは、利潤の渴望、無盡藏の富源及び『著大なる利潤』の風聞、『毛皮』――歐露に於て既に消滅せる毛皮獸の探索及び露帝の恩寵を得んとする希望などであつた。

自由移民の移動は、十六世紀に始まつた。彼等は土民を征服しつゝ、新征服地方に侵略者の權利を强固にした露帝の將軍達の爲に道路を開拓した。既に一五八三年（シベリア侵略の公的日附）に、モスクワ朝露西亞の版圖はボリシェイ・カーメニ（ウラル山脈）を越えて遙かに東部露西亞に延びて行つた。十七世紀初頭、全西部シベリア併合後、征服者はエニセイ河岸に達し、新たなる地方に侵入し、新らしいシベリアの大河レナ河岸に達した。此時代はシベリア諸民族が最後迄征服者に敵對した爲、最も激しき植民地戰爭の時代であつた。軍隊の掩護下に、シベリアの產業植民が始つた。『企業家』『出稼人』『農業家族』が『勅命に依り』又、『自發的に』シベリアへ移住した。『異民族』と戰ふ爲、幾多の防禦線、向後の征服の爲の支撐點――シベリヤ式冬營所、大小の城砦が設置された。

爾後モスクワ公國の版圖は漸次ユカギール人及びチュクチ人の住む北東地方に延びて行つた。一六四三年乃至同四六年に、『名譽隊長』ワシーリイ・ポヤールコフの率ゐる探險隊は、黑龍江及びオホーツク海岸に達した。ヤクーツクの北部及び南東部一帶の包圍過程が開始された。一六四三年乃至同四四年に亙り、スタドウヒンを隊長とするコザックは、『王國に對する朝貢及び新天地探險の爲』にシベリアに於ける最後の河川たるコルイマ河に到り、侵略は該地方より更にチュクチ人の居住地方及びアナドゥイリ川流域即ちカムチャツカ地方の北部に擴大した。太平洋に到り、征服者は隣接せる南北兩地方に進擊した。

一六四八年、コザックの一隊はコルイマ河口を發して大洋の沿岸を東向し『未だ朝貢せざる新民族の探索の爲爾餘の傍系河川』に向つた。この一隊の『隊長』はスタドウヒン遠征の參加者たるセミヨン・デジネフ及び商人フエドット・アレクセーエフであつた。デジネフ探險隊は、途上船舶及び人員の大部分を失ひ、亞細亞の北東部を迂回し、之れと北米とを分つ海峽を通過した。即ちベーリング氏に先立つこと實に百年の昔、ベーリング海峽を發見し、長途の難航を征服してオリュトルスキイ沿岸に到著した。デジネフは同所より北向し、初めアナドゥイリ河口に出で後同河岸を遡り、一六四九年同河口より八百露里の地點に、アナドゥイルスキイ城砦を構築したのであるが、之れがアジア北東邊境征服の爲の新根據地となつた。十八世紀に至り、該地點を通過してカムチャツカ半島に向ふ唯一の道路が開かれ、該地點よりコザックの移動が始まり、北チュコトカ、南カムチャツカ半島奥深く進入するに至つたのである。

カムチャツカの最初の『開拓者』は、アナドゥイルスキー城砦の代官ウラヂーミル・アトラーソフであつた。既に一六九五年即ち彼のアナドゥイリ滯在第一年に、ルカ・モローズコを隊長にコザックの一隊を、カムチャツカ民族『調査』派遣し、一六九七年乃至九九年には、自ら大遠征隊を組織し以つて半島を征服しおほせた。該遠征當時アトラ

ーソフは、ペンジンスカヤ灣に到り、半島を數回横斷し、ウェルフネ・カムチャツカ城砦を設定した。モスクワ宮廷にあつては、新たに征服せる土地に關心を持つこと甚だしく、アトラソフを激賞し褒賞を厚くして之を招いた。

爾後カムチャツカ地方の漸進的侵略が始まつた。ボリシェレツキイ、ニジネカムチャツキイ及びオリュトルスキイ城砦が築城された。住民の積極的な反抗は、版圖の擴大と同時に既征服地の鞏固化に意を注がしめた。原始的な統治方法が組織され、最初の貢稅簿が創始され、征服された全民は『長官』に依り支配されるカムチャツカの三城砦に分轄された。

カムチャツカ半島より始まる露人の進擊は爾後南と東の西方面に向つた。一七一一年、最も近接せる千島列島(占守島及び幌筵島島)、後膃肭獸及び海獺虎に富むオホーツク海並びにベーリング海の諸島を占據した。一七四五年乃至六一年に亙り北米攻略が始つた。アリューシャシ群島及びアラスカ沿岸の一部が併合せられ、一七八〇年乃至同九〇年間に所謂『露領亞米利加』の領有が完成した。

形式的には十八世紀初頭既に、廣大なるカムチャツカ地方の全體が征服されたと考へられたが、事實は之れと趣きを異にする。カムチャツカ半島へ至る唯一の既設道路は、アナドゥイリ及びオリュトルスキー地方を通過してゐた。然るにモスクワへの幾多の『報告』が立證せし如く、住民の抵抗は益々强大に赴き、オリュトルカ地方は最も危險の地點となつた。歸順せざる地方土民は、順次該地方に駐在するコサックを粉碎し、十人長を殺害し、モスクワへ送附する貢稅を奪取した。オリュトルスキイ城砦の構築も之の情勢を緩和するところとならなかつた。從つてカムチャツカ半島へ至る他の更に確實にして安全且つ近距離の道路を必要とした。況んや半島の彼方には唾涎措く能はざる新天地、即ち千島列島及び『アポンスコエ王國』(現在の日本)が存在するに於ておや。如上の目的の爲、モスクワ王國は代官に對してアナドゥイリを經由する貢稅の送附を禁止し、ヤクート知事に對して、ラムスコエ湖を經由するカムチャツカ道を調査すべき員數を派遣する樣命令を發した(一七一三年、ピーター一世の勅令)。一七一六年乃至同一七年に亙りて、此の道路が發見せられ、オホーツクよりボリシェイ河口、即ち半島の西岸に達する最初の航行が實行された爾後オホーツクの價値は、急激に增大し、十八世紀三十年初頭には、北東亞細亞地方統治の海港並びに中心地となつた。

モスクワ政府並びに同じく商人階級は、極東征略に著大なる關心を有してゐた。該地方からは貴重なる新商品、即ち毛皮類、海象の骨が移入され、該地方は無盡藏と思惟された貢稅の新源泉であり、モスクワ商品の新市場が開拓され、之れと同時に國家は犯罪者から免れる事になつたのである。

『遠隔の諸河岸に在る官吏に』發せられた數多の訓令——『命令』、『覺書』は、絕えず激化しゆく政府の攻略的意向及び東方の新天地占據の志向を暴露するものである。攻略は如何なる方法に依つて行はれたか?前記數多の覺書は『愛撫を以つて新しき人民を朝貢せしめんとすべく』勸告してゐるが、と同時に、『土民なるもの、畏くも尊き陛下の御恩寵に浴せんことを願はず、且つ我が公國に朝貢することを慾せず抵抗する場合には、武力を用ふべし』と附言してゐる。

この『武力を用ふる』ことにより征服者の進路は到る處血にまみれた。シベリア土民の朝貢化は、未曾有の殘虐を恣にし、若干の種族の成人を殆んど一人殘らず虐殺し、女子を追放し、人質制度を廣汎に適用した。征服後と雖も貢稅の徵發に當つては、最も殘虐なる形で行はれた。

新天地の征服者並びに開拓者は、主として私利を貪る强盜であることは一般である。掠奪は極めて廣範圍に亙り、無制限の暴行を伴つた。カムチャツカ代官たる五十人長アトラーソフ、アンツィフェーロフ、ペトリロフスキイ、バウルッキイ等々の名前は長く土民の記憶に止まり呪の的となつた。彼等は住民を絶望の淵に突落し、從つてカムチャツカ地方の統治者の大部分は暗殺に依つて自己の生涯を終つた。代官は、或ひは相互に辯護しあひ、或ひは獲物の分配を爭ひ乍ら、極度に掠奪を行つた。モスクワへの幾多の嘆願、密告、『回答』は、代官が『經驗に乏しく』、『おかまひなしに土民を虐殺し』、『自己の懶惰なる私慾や强暴性の爲に善良なる土民を殺害する』と報告してゐる。隷屬せるコサックも亦掠奪を行ひ、その廢頽は極限に達した。コサックの叛亂、上官の暗殺、その財產の廢絶は不斷に行はれた。人民を野蠻化して罰せられざるコサックの間に充滿したのは完全なる恣意であつた。

植民地的搾取の最主要なる對象は、貢稅即ち『異民族』より物納形態——毛皮——により徵發する納稅であつた。十六世紀末に於て、シベリア毛皮はモスクワ政府の全收入の三〇%以上を占めてゐた。併し强慾なるシベリア行政官は、合法的徵稅の外に巨額による專斷的な復稅を實行した。被征服住民から、露帝並びに地方官憲に對する所謂『供物料』即ち賄物又は自發的な進物が搾取され、官吏及び僧侶に對しては、『贈賄的』黑貂が提供された。邊境から莫大なる財寶が搬出されていつた。

住民は、過重なる賦役主として犬を使用する輸送、僞瞞と獵附的商品を伴ふ商業的搾取の爲に疲弊した。斯くの如きが全シベリアに特徵的であるとすれば、斯かる搾取は、シベリアに於て最も遠方且つ最も近接し難い邊境に在るカムチャツカ、オホーツク地方に於て殊に甚だしかつた。

是等の地方民族は、絶望的抵抗に力盡きて後始めて征服者の權力に服したので、機會ある毎にその覊絆を脫して露人を驅逐しようと試みたのであつた。カムチャツカ地方『併合』の全期間は、征服者に對するユカギール人、イテリメン人、コリャーク人及びチュクチ人の鬪爭期であつた。激しき抵抗を試みたのは、半島に於けるイテリメン人及び北方のコリャーク人並びにチュクチ人であつた。カムチヤダール人及びチュクチ人は、十九世紀に於ても抵抗を續けた。土人の著大且つ屢々なる『動搖』（蜂起）は殘虐なる討伐隊を招來した。

コサックに次いで進出したのは、住民を『ちよろまかし』且つ亂醉せしめて私腹を肥す商人及び之れを搾取する僧侶であつた。是等の三植民勢力即ち義勇兵、商人及び之れを搾取する僧侶は、後れたる地方民族の搾取といふ共通の同一目的の追究に際して友誼的に統一したのであつた。

十八世紀の二十年代——ピーター大帝の『改革』期——は北東亞細亞の新版圖に對する關心を强化した。カムチャツカ地方史の新時代即ち踏査及び探險の時代が始つたが、舊來の露西亞臣民への併合及び貢稅徵發が、主要課題として存續してゐたのであつた。

一七二七年に、最初のベーリング探險隊、一七三三年乃至四三年に第二探險隊が組織された。膃肭獸、獵虎及び青色北極狐の如き、就中巨大なる資源を目的としたる同探險隊の成果は、唯々高價なる毛皮類への引力を強化したに過ぎない。

新らたなる征略の出發點となつたのは、今やカムチャツカ半島並びに十八世紀末より十九世紀初葉にかけてオホーツクに代り行政中心地となつた半島の海港ペトロパウロフスクであつた。一八〇三年、該地に地方廳が創設され、郡警察署長、裁判官、陪審員及び書記が之れに附屬した。

亞細亞の極北東地方及び北米への露人の熱狂は、壯大なる政治的並びに商業的企圖たる、著名の商人シェレホフ及びゴリコフによる『米露商會』(一七九八年)の創立に導き、該企圖は、その商會及び構成を變化しつゝ二十世紀に至るまで存續した。『皇帝の被護』の下に同商會は、カムチャツカ地方資源の主たる掠奪者となつた。何百萬の收益を獲得せる同商會の利害關係は、一聯の焦眉且つ複雜なる諸問題——遠隔せる邊境の統制的にして更に安易なる配給、シベリア並にオホーツクを經由する該地方との至難なる交通の廢止等の解決を要求した。此の目的の爲數多の探險隊が組織された。最初はカムチャツカ沿岸に向ふ世界一週水路を開拓せん爲のクルゼンシテルン探險隊(一八〇三年乃至六年)にして、之れに次いで、ゴローウィン(一八〇九年乃至一一年並びに一八一六年乃至一九年)、コツェブー(一八一五年乃至一八年)、ラザリョーフ(一八二二年乃至二四年)、リトケ(一八二六年乃至二九年)諸探險隊があつた。その結果オホーツク港の價値は零となり、ペトロパウロフスク並びに同港の役割が增大した。

カムチャツカ半島は、政治的並びに商業的に極めて重大地點なることが政府により確認された。十九世紀の五十年代は、半島の移民及び該地方農業並びに捕鯨其他の產業の發展、交通路の組織化に關するムラウィヨフの廣汎なる黑龍地方計畫によつて特徵づけられる。乍併ネウェーリスキイによる黑龍江河口の航行可能區間の開設及び樺太島の露領への併合(一八五二年)は、政府の凡ての關心及び注意を黑龍並びに烏蘇里地方に移行せしめた。爾後カムチャツカは忘却せられた。行政官廳及び艦隊は總べて黑龍江岸ニコラエフスクに移され、カムチャツカ地方は、郡警察署長及び小役人の統轄するところとなつた。彼等に對して何等の統制の行はるゝことなく、何人としてカムチャツカを訪れる者なく、從つて該地方の經濟及び住民は漸次貧困に陷つたのであるが、にも拘はらず地方の暴政者の報告に依れば萬事平穩にして『住民は鼓腹してゐた』のであつた。

第二節　革命前の情勢

十八世紀末に到り流血の『併合』が終結して、カムチャツカの經濟的隸屬の時代が始つた。貧慾なる露西亞の植民政策は、此の邊疆地方に於て殊に强暴なるものがあつた。此の點に於ては『文化統治』期である二十世紀に於ても何等の變更を見なかつた。

植民政策の極めて特徵的であつたのは、カムチャツカ地方に農業を『附植』せんとする二百年に亘る試みであつた。當局及びに征服者の關心は、該地方に於ける一聯の產業——畜產業、菜園業、農業の發達を要求し、斯くして

十八世紀以降の數多の統治者の精力は此の方向に向つてゐたのである。農事試驗場が創設され、農事『會社』が組織され、住民は殆んど一人殘らず『農業に從事』せねばならなかつた。

斯くの如き活動が最高調に達したるは、十九世紀の五十年代、名知事ザウ゛イコの統治下のことに屬す。家畜の繁殖、穀物の播種等々に亙る許多の對策竝びに規定は、その本質に於て、住民をして舊來の生業を廢し、新生業に從事せしめんとするにあつた。乍併凡ゆる行政的手段に訴へ、一聯の統治政策の果ては農業を『强制』する爲コサックを派遣まで行つたが、遂に農業を移植し得ず、二十世紀初頭に於て、最も悲慘なる狀態に陷つた。

行政命令そのものは何等の現實的配慮、實際的助力、必須なる勸農工作を齎しはしなかつた。住民は家畜の世話も出來ず、而も當局よりは種子も農具も配給されなかつた。それでなくても負擔の重壓下に喘いで居る住民に又一つの新らしい重荷が加はつた分である。住民は農業から何等の利益をも得られなかつた。反つて農業は住民の福祉に有害であつた。何故なら極度に不足せる勞働力を主要産業から剝奪したからである。一九〇八年乃至九年にカムチャツカを訪れた學士院會員コマロフは、左の如き特徴的な土着民の回想を引用してゐる。『我々は地獄に在る如く苦しんだ。常に飢餓に惱み、魚類を貯へる暇なく、收穫は甚だ些少なる爲全く用をなさなかつた』と。

農業進展を計らんとする叙上の行政的對策が何等積極的なものを齎さなかつたとせば、如何に他の經濟部門即ち土民の主要なる生業が惡條件下にあつたかは推して知ることが出來る。征服者を當地方へ惹きつけた主要資源たるカムチャツカ毛皮は、最も著しく荒廢に歸した。十八世紀の勇敢なる掠奪者たる商人は、十九世紀に到つて、露國及び外人の大商會に依つて代られ、而して最も貴重なる黑貂、狐、獺、臘鼬獸、臘虎、コマンドルスキイ産北極狐の濫獲が始つた。之に加ふるに、外來の密獵者——即ち南方に於ては、日本人、北方に於ては米人も盛んに濫獲を行つた。

此の結果、既に二十世紀初頭には、貴重動物は涸渇し、或種のものは全滅の危機にさへ瀕し、狩獵業は衰微し始めた。

貢稅徵集の形に依り此の資源掠奪に直接參加しつゝ、政府は同時に凡ゆる手段を通じて、土民荒廢に大なる役割を演じたる個人商業を支援した。凡ての商業は、毛皮買占めに集中し、直接物々交換の形態を取り、低廉なる買付値段と當地方への移入商品の法外な高價に依つて巨大なる利潤を齎した。住民にとつて必要にして有用なる補給品及び裝備品に代り、甚だ辻褄に合はぬ品種を搬入し、凡ゆる見切品を販賣し、酒精を用ひて土人を欺く事は日常茶飯事であつた。

漁業も亦著しく衰微した。漁業は原始的狀態にあつた。住民に對して漁具は配給されず、稍々良質の生産物を少量も貯藏出來なかつた。大害を與へたのは、二十世紀に現れた漁撈企業者であつた。彼等の活動は、魚類資源の掠奪的絶滅に導き、以つて住民の生業に損害を與へた爲住民は屢々飢餓狀態に陷つた。最も貴重なる鮭屬の主要資源が被害を蒙り、該漁業は衰微した。爾餘の産業部門即ち海獸捕獲業及び養鹿業は極めて悲觀すべき狀況にあつた。海獸は外國の掠奪者により驅逐されて北方に逃れ、養鹿業は全く放棄されてしまつた。

政府は、住民の基本産業部門を全く放任し、之れが監督或は保護又は必要なる用具の配給を蔑にした。

爾餘の地方資源即ち鑛物資源に關しては、全く無關心の狀態にあつた。その內唯オホーツク及びチュコトカの金鑛が興味を惹いた。一聯の泡沫的投機事業が形成された。チュコトカは、黃金狂時代を現出した。

本地方に對しても亦その住民に對しても何等認識を持たなかつた蒙昧なる當局の凡ゆる活動は、駐屯軍の强化、宗教事業の組織、貢稅及び其他の租稅徵發に向けられた。住民の福祉增進に就いては一顧も與へず、シチュドリンの筆に相當する如き、土民にとつて有害なる全然狂氣としか考へられない命令を頻發した。或ひは、犬を殲滅し之れに代ふるに鹿を以つてする命令を布告し、又は（一九〇五年の革命後）住民より全狩獵具を剝奪し、又穀物播種を强制したり、住居樣式の變更を決定したりした。斯くの如き命令の或るものは、乾草を干草場に於て燒却すること云ふのだつたが、之れは大山火事を惹起した。魚類の週期的な『不漁』は、屢々飢餓狀態を惹起したが、長官は之を土民の怠惰及び不注意に歸し、漁業監察の爲にコサックを派遣した。唯行政的なものに過ぎない馬鹿げた空想に因つて强制的に住民を移動せしめ、現實的必要の場合には之れを禁止した。

住民は益々疲弊した。諸生業の衰微の結果その收入は減少し、多種多樣の附課金即ち貢稅、人頭稅、地代、保險料、其他の支拂金は增大した。之れに加ふるに當局の必要により徵發する無數の物納課稅即ち薪材及び魚類の調達、建築事業、犬橇輸送の義務があつた。是等は生業より住民を引離し尙更その經濟を荒廢せしめた。最も困難なる義務は、官憲或ひは『廻文』（全村落に回覽される命令）と共に該地方中を犬橇を追廻はし續ける義務であつた。

帝政政權により最も『馴化』されたカムチャツカ半島には、植民につきものゝ同伴者である病氣（痘瘡、壞血病、癩病、黴毒）及び酒精中毒が齎された。傳染病は數千の犧牲者を出し、住民は減少した。

住民の假藉なき搾取に參加したるは、總べての新來者即ち、長官、次官、一般のコサック及び兵卒、商人、公然又隱然たる毛皮買占人であつた。巨大なる毛皮納貢を徵發し且つ數多の物納課稅を要求する僧侶も亦住民にとつて甚だ高價に値した。

帝政政權より發せられた一聯の公文に依れば、强制、僞瞞、壓迫並びに毛皮の掠奪が、住民をして貧窮に驅ひやつたのだつた。

カムチャツカ史に於ける此の『文化』時代即ち十九世紀及び二十世紀は、之れに先行する侵略並びに地方諸民族の直接なる肉體的破壞の時代と住民の抵抗の殆んど全き缺如の一點に於て異つてゐた。住民は服從し、重壓を擔ひ貧困化に陷る者が漸次益々多くなつて行つた。

第三節　外國武力干涉及びソウヱート政權樹立鬪爭時代

以上の如き二百年に亙るカムチャツカ地方の荒廢は、一九一七年即ち極東に於ける外國武力干涉の最も破壞的なる諸結果を蒙つた時期にその最高點に達した。該時期に於けるカムチャツカ地方史は、極東に於ける革命鬪爭の一般的經過を反映した。カムチャツカ地方に最も直接的な影響を與へたのは、許多の極東『政府』殊に、沿海州『政

府』であつた。

カムチャツカに於ける一九一七年は、ケレンスキー政權の下に經過し、之れが固有の凡ての典型的特徴並びに結果を齎した。同政權は、『民主的な』合議機關である州委員會に依據し一九一七年三月に任命された州委員に依つて打ち建てられ、而してその構成分子中には、札つきの極右反動主義者と並んで赤大根組の商人、官吏、漁業家が參加した。

地方資源の保護及び著しく衰微したる諸産業の再興を要求する露人及びカムチャツカ土人の勤勞階級の增大せる不滿に壓されて、事實第一回カムチャツカ州大會に於いて地方産業再興の廣汎なる計畫が採用され、州委員會には勞働機關及びペトロパウロフスク『地方部隊』よりの代議員が參加した。乍併幹部の席は、浦潮勞働者代議員ソウェートの前に自己の僞裝革命性を巧みに粉飾せる舊知事及び官吏が依然として占めてゐた。

當地方に於ける十月革命は、一九一八年三月即ち州委員會が解散せられソウェートが組織された時に始めて起つた。さりながら既に一九一八年六月には極東に突發した諸事件及び組織的に聚化する暇のなかつた各地方ソウェートの無力を利用して、舊『委員會派』がソウェートを打倒し、州委員會及び委員制の政權を復興した。

一九一八年夏、再びその大部分が官吏、商人、僧侶及び警察官より成る『第二回州大會』が召集された。新に任命された州長官及びその他の當局者は、事實コルチャック及びホルワットフの手先であつて、從つてカムチャツカは、長い間コルチャック一派の跳梁を堪えなければならなかつた。

一年後の一九一九年夏には、反革命的分子は、看板のみの民主的な州委員會の解散に成就した。反革命は、完全にその力を發揮した。徵兵、苛稅及び逮捕が頻々として行はれた。ソウェートの同情者と嫌疑された者は、地方外に追放され、世襲の役權を土民から剝奪した。毛皮類、酒精、食料、通貨の狂暴なる投機行爲、直接的な强奪並びに暴行、住民の搾取に參加したのは、政權把握者の全部即ち地方官憲、大陸より輸送された欺僞師及び稀れなる例外を除いたカムチャツカの全インテリゲンツィアであつた。之れと同時に、一部の住民を他の部分に對し、ラムート人をカムチャツカ土人に對し（並びにその逆に）使嗾すると云ふ經驗濟の方策を廣く適用し、ボリシェヴィーキに關する惡風說を傳播し、猛烈なる反ソウェート宣傳を實行し、凡ゆる壓迫にも拘はらず、不滿且つ不平なる住民を、日本の武力干涉を以つて脅し、必要なる宣告を與へんが爲に、故意に之れを酷酊せしめた。

斯かる反動的情勢の下に、經濟の完全なる崩壞、運輸、配給及び糧食の亂脈の諸條件の下にあつて、ソウェート政權の味方並びにカムチャツカ共産黨員の小團體の影響は急速に增大して行つた。一九一九年十月、白軍政權倒壞を目的とする秘密軍事、革命委員會が形成された。併し突擊の前夜に殆んどその全員が逮捕された。にも拘はらず、一九二〇年一月十日夜、少數のペトロパーウロフスキイ勞働者及び兵士は蜂起し地方農民の援助を得て白軍を破り、而して殆んど二年間に亘りカムチャツカにソウェート政權を確固たらしめた。

一九二〇年三月乃至四月に成立したるカムチャツカに於けるペトロパウロフスキイ郡特別大會は、事實上州大會の意義を獲得したが、同會上に於て、崩壞せる州産業の再興並びに新らたなる天然資源開發の諸問題を詳細に研究

し、全決議に勞働者擁護並びに搾取者との決定的鬪爭の立場を嚴格に適用し、以つて文化、社會的建設の廣汎なる綱領を採擇した。

然るにカムチャツカ勞働者間に於けるソウヴィート政權の非常なる普及化及び彼等の積極性を著しき增大にも拘はらず、カムチャツカ史に於ける此の最初のソウヴィート政權時代を薄弱且つ未完成のものたらしめた一聯の原因があり、且つ又政權機關自體もその目標とする綱領の貫徹並びに革命的征服の最後的固定化の爲に充分强力なものでなかつた。

州革命委員會は組織されてはゐるが、極めて少數のペトロパウロフスク及び隣接する諸村落の勞働民衆に依據してゐた。各地方のソウヴィート機關は、斯かる根據をすら持ち得なかつた。之れを支持したるは、個々の勞働者、漁夫、勞働インテリゲンツイアの代表者であつた。各地方間の連絡及び情報は殆んど缺けてゐた。文化程度の極めて低い、脅されて疑ひ深くなつた遊牧民は、不關心であつた。內部の反革命分子及び外部の敵即ち外國（南部に於ける日本、北部に於ける合衆國）の掠奪者達及び極東より來襲せる白軍との鬪爭に要する武力を、ソウヴィートは有してゐるなかつた。不斷の內亂及び外國の干涉との鬪爭が行はれてゐたザバイカル及び極東の廣大なる領域を經てた、ロシヤ社會主義聯邦共和國は、自らその最も遠隔せる邊境に援助の手を伸べることが出來なかつた。

此の期間（一九二〇年一月十日――一九二一年十月二十八日）に於けるカムチャツカ、ソウヴィート機關の活動は、結局唯ペトロパウロフスク市に於ける諸施設、即ち協同組合の强化及びその發達、分散した革命力の集中並びに文化、啓蒙的勞働の政が實施されたのである。

此の時大陸內部に於ては、東部シベリア及び極東の凡ゆる白系『政府』に依つて順次ロシヤの安寧が行はれてゐた。殊に破壞的なる影響をカムチャツカ州に與へたのは、セミヨーノフ軍及び日本軍の直接支援に依つて政權を獲得したる『メルクーロフ兄弟及び子弟』を首班とする著名なる浦潮政府であつた。メルクーロフ一族は、露西亞を幸福にせんとし『沿海州の國王にして全露西亞の玉座の守護者であるツァーを歐羅巴に於て搜索することに努め、』先づ手初めに大規模なる强奪行爲を行つた。ニコライ・メルクーロフは、戰費調達に百萬金留以上を强奪し、『政府員』は家屋を買占め、當局は遊廓及び阿片吸引所を開設し、民警隊は寶石商を掠奪した。メルクーロフ派に對して全沿海州は、絕對反對の態度を表明した。從つて同政府の威令は、事實上、單に浦潮のみに限られ、其所の凡ゆる物資は强奪され、反對者は虐殺された。斯くしてメルクーロフは、カムチャツカ毛皮に依つて、巨利を得んと計畫し一九二一年九月、セミヨーノフ軍のコサック大尉ボチカリョーフを隊長とする探險隊をカムチャツカに派遣した。

一九二一年十月二十八日、ボチカリョーフの一味が到著した時、カムチャツカに於けるソウヴィート政權は倒壞した。ペトロパウロフスクの黨細胞及び民警隊全員は、山岳及び密林に逃れ、パルチザンとなつた。彼等は大規模なるパルチザン運動の中核となつたのである。

ボチカリョーフの到來と共に、掠奪行爲はカムチャツカに移動された。官有倉庫及び協同組合は掠奪され、住民は到る所に於て毛皮並びに家具を無代で剝奪され或ひは沒收された。數千頭の馴鹿は糧食用及び運輸用として徵發さ

れた。一年以上も續いた地方資源の强盜的掠奪が始まつた。

此の際殊に著しい被害を蒙つたのは漁業であつた。漁業家は河川漁區に於ける大量漁獲を計畫し、勝手に河口前方の水域を擴大し、封鎖漁區及び土人專用漁區を略取し、酒精を商ひ、創立早々の協同組合と激甚なる競走を開始した。彼等は全商業を自己の手中におさめ、住民より買入れる魚類價格を低下し、魚類の義務的購入を拒否し、殆んど無代で魚類を買入れた。他に生活源泉を有せざる住民は、勢ひ全く漁業家に服從せざるを得なかつた。住民は當に彼等の爲殆んど無報酬にて魚撈に從事するのみならず、自己の漁獲した魚類及び毛皮の全部を引渡さねばならなかつたし、又木材調達に、木材搬出に、建築作業に從事すべく强制された。

漁類資源濫獲の主要參加者は、日本の巨大なる漁業家で、彼等は一九二二年頃には、カムチャツカに於ける現業漁區總體の九三％（五二六區の中四九〇區）を占めてゐた。

カムチャツカに於ける爾餘の經濟部門即ち養鹿業、農業及び林業も極めて悲觀すべき狀態にあつた。鑛產物の無統制盜掘も盛んに行はれた。チュコトカ地方の金鑛は一九二〇年に、白軍に依り技師コルズヒン及び日本人福田某に採掘を委ねられた。最も豐富なる產金地方の一たるボルチヤ川流域は、『ビャトニツキー商會』に委任された。アナドイルスキイ地方及びチュコトカに於ても亦著名なる毛皮調達者たる米人スゥウンセンが掠奪を擅にした。オホーツスキイ產金地（クフトウイ川及オホータ川流域）に於ける產金高は巨大なる額に達した。該地方に於ては、アメリカ人、日本人、フランス人、イギリス人が掠奪を行つた。スウェンセン自身は、一九二二年にメルクーロフの許許を得て、該地に砂金洗鑛機を搬入した。アメリカ人はチュコトカから石墨を、日本人は西海岸から輕石を輸出した。

自然資源の絕滅及び掠奪に當り著大なる役割を演じたのは外國人强奪者殊に日本人であつた。數十の合業國及び日本のスクナー船は、酒精及びストリキニーネを商ひ毛皮その他の原料を輸出し毛皮獸を屠殺した。輸出入は全く無統制下に置かれた。殊に窮迫したのは遠隔の諸地方、即ちアナドゥイルスキイ及びチュコツキイ地方、コマンドルスキイ及びカラギンスキイ群島であつた。カナダ人は、ウランゲリ島をも占領せんと試みた。

地方經濟の一般的崩壞と主要天然資源の涸渴に關聯して、住民の貧窮はその極點に達した。年々增大なる諸產業の衰退、魚族の組織的減收、移入物資の不足は、該地方の勞働經濟を完全に破壞した。白系匪賊によつて齎された傳染病及び飢餓狀態の結果、蔓延したる病患——黴毒、疥癬、壞血病、結核其他——は、革命前の醫療救護の水準の大縮少並びに藥劑の完全なる缺除の爲、死亡率の强化を招來した。外國武力干涉者及び白軍に依る極東の殆んど全般的の窮盜は、全く切離された地方の一般情勢を益々尖銳化した。

以上が、カムチャツカ地方に於ける內亂及び外國武力干涉の總計である。

一九二二年にボチカリョフ一味の白軍に對する抵抗が强まつた。之れに對する鬪爭は、諸地方に行動せる白系匪賊に對するバルチザン的封鎖の形態をとつた。州內到る處にバルチザン部隊が發生し、秩序ある鬪爭が始つた。白軍を憎惡し之れに『アクタン』（嫌忌すべき醜惡なる敵）と綽名せる北方諸民族中の勤勞者も之れに合流した。

激烈なる階級戰の結果、カムチャツカは自己の軍隊に依つて白軍一味を掃蕩した。一九二二年十一月十日にソウヱート政權が再興され、同年十二月半島に到來せる赤軍部隊は唯白軍の殘部を清算すればよかつた。ボチカリョーフはバルチザンに依り逮捕銃殺された。

稍降つて半島のソウヱート化以後、もう一人の極東の『征服者』にしてオホーツク沿岸及びヤクート地方を荒れ狂つた將軍ペペリャーエフも清掃された。

爾後、カムチャツカ州にはソウヱート政權が決定的に再興された。

第四節　ソウヱート建設

ソウヱート政權は、十七世記に於ける初期の征服者が遭遇したのに比べて比較にならぬ程不良なる條件下にあるカムチャツカ地方に逢着した。先づ第一に、原住民たる北方小數民族に關してであるが、彼等の物質狀態は二百年に亘る搾取の結果、惡化し、その社會的文化の發展は一歩も前進してゐなかつた。

土民は、最も原始的なる陋屋、夏舍に住居してゐた。土著のコリャーク人の木造建物は、本當を云へば丸太或ひは背板により組立てられた掘立小屋であつた。最南端地方の『家屋』ですら草葺であり、『窓』と云へば熊の腸を鉄入するか、良くて鹿の皮に硝子の破片を縫付けた物を當てゝあるに過ぎなかつた。或る種の作業小舍――家畜小屋(屋根のある圍地)、倉庫――も同じく極めて貧弱なものであつた。況んや遊牧民の原始的住居――天幕及び小屋――に就いては語るに及ぶまい。獸脂に依る照明、海獸、熊、鹿の半ば濕り屋々酸い肉、野生の植物並びに雜草の球根に依る食料、裸體につけた最も原始的なる毛皮の衣服、原始的な家具――之れがカムチャツカ土民の生活狀態の特質であつた。

主要生產手段――漁撈並びに狩獵の用具――は、同じく著しく原始的であつた。唯天性の叡智と生業の諸條件に對する長期間に亘る適應性が、先祖傳來の魚池、イラクサの網、石製並びに骨製の道具を有する狩獵家の身を助けてゐた。若干の馬を有する住民にあつては鞍が木で作られてゐた。生業の原始的技術、生產品の加工及びその合目的々なる利用の全然不能なることは生產に著しく有害なる許多の偏見並びに迷信を伴つた。その結果北方諸民族の經濟は、最も悲慘なる狀態にあり、その一般收入は絕無にして、唯毛皮のみが商品となつた。

家族關係に於ても原始的な道德が支配してゐた。即ち妻の勞働、一夫多妻制、賓客歡待の爲妻を提供すること、老人の殺害が之れである。基督敎は、住民の低い文化水準を高めるのに助力しなかつた。異敎の殘滓に加ふるに、宣敎師が威嚇した新しい迷信と恐怖があつた。家族、家庭、生產に於ける凡ての生活は、不斷の經濟的、政治的並びに宗敎的壓迫との鬪爭に於て住民の孤立無援を強化する許多の偏見に包まれてゐた。

長官、露西亞商人、民族自身の富農、僧侶及びシャマン敎僧に搾取される貧困狀態は、全く重壓的なものであつた。住民人口は、十九世紀に於ても二十世紀に於ても增加しなかつた。征服時に伴ふ住民の大衆的殲滅後と雖も、出生率は死亡率を超えたのだが、頻發する傳染病は巨大なる犧牲者を引攫つてゐた。住民は何等の醫療救護を知ら

なかつた。全半島に亘つて唯一つ、五つの寢臺を有する病院があつたが、それはペトロパーウロフスクの官吏に役立つたのである。癘疹とか流行性感冒とか云つた病患ですら屢々全般的な死亡率を齎した。

教育部門に於ても類似の現象が見られた。帝政々府の植民政策は何時もの方法により進捗し、教育は全く僧侶の手に委ねられてあつた。本地方には一の非宗教學校なく、その代り半島部だけで九つの教會並びに約十の教區學校及び宗教學校があつた。是等の學校の主要使命としては、その學習者を自己の民族より分離させ、之れをロシヤ化し、同族の壓迫者と爲すことであつた。教會學校卒業者にして役人若しくは教會役員となる時は貢稅を免ぜられその他の特權を享受した。讀み書きは、スラブ語にて書かれた宗務院の版本に依つた。

本地方の露西亞人住民すら嘗に土民の文化水準を高めなかつたのみならず、彼等自身も下落して『カムチャツカ土人化し』、唯その土人に對する横柄なる態度と土人の組織的掠奪のみが、露人を土人から區別したに過ぎなかつた。何等の改良も住民の生活に齎らされなかつた。住民の生活狀態は依然變らず、既に十八世紀にクラーシェニンニコフが特徴づけた如く、『醜惡にして不安なる』ものであり、文化的征服者はこの中に唯貧困と病氣と酒精中毒を齎したに過ぎなかつた。

多數のカムチャツカ地方踏査者は、絶えず地方民の窮狀及び完全なる放置に注意を向けた。ディトマール（十九世紀五十年代）、醫師チューシェフ（二十世紀初頭）及び學士院會員ウェー・エル・コマロフ（一九一〇年）の諸著作中に、住民の物質的並びに文化的狀態の昂揚に必要なる諸對策に對する多くの貴重なる指示を發見し得る。併し凡て目的を達しなかつた。政府は自己の統治の斯かる悲慘なる結果に關心を持たなかつた。稀れに、殊に大飢饉、壞血病、強化せる貧困化及び死亡率の發生時に罪人を探求すると、無論それは住民自身であるのだつた。地方官憲は、土民の怠惰、不注意、無智及び勞働に對する無能力を口實にして、上長官に釋明した。帝政々府の植民政策の論理を完成する、不可避的なる北方諸民族の生物學的死滅てふ公式理論が創造された。

斯かる狀態の地方民に遭遇したのが、一九二二年來カムチャツカに到來したソウヴェート政權であつた。

カムチャツカ地方に於けるソウヴェート政權の前には、極めて著大なる困難且つ重大なる問題があつた。印ち完全に一世紀後れた住民の間に政權を組織すること及びレーニンの民族政策に基いて廣汎なる文化、社會的建設をなすことであつた。住民殊に著しき程度に帝政並びに最近の白系匪賊の思想の影響を受けて、凡ての『白人』新來者に對し敵對的傾向を有する遊牧民の間に、合議制並びに選擧制の權力機關を創設するのが先決問題でなければならなかつた。シャマン教及び富農階級の影響この重大なる闘爭が眼前に控へてゐた。

最初に、種族的原則による所謂土民ソウヴェートの組織化に着手した。一定の經濟、生産地方に住居する土著種族は、自己種族のソウヴェートを選んだ。民族的積極性の覺醒、階級的分化並びに闘爭の理念の强化に從つて、種族的聯闘の薄弱化に從つて、土民ソウヴェートは地域的に組織された常態的なソウヴェートに變つた。

緊張せる十年（一九二二年――一九三二年）間の活動は、住民の政治的意識に大なる變化を惹起した。ソウヴェート政權は、大衆的にして權威ある自己の政權となり、土民は自己を以つて政權の保持者、原始林及び凍土帶の眞實の

主人なりと感じた。大衆は獨立的政治生活に目醒め、著しく積極的になつた。選擧制諸機關の多くの決議及び議事錄は、住民意識の著しき急變を立證してゐる。自己批判はソウヴェートの仕事、住民の生活及生活狀態の凡ゆる方面――學校並びに病院の仕事、協同組合の活動、婦人の地位、シヤマン教團、上部機關の仕事――を包含した。

現在、ソウヴェート數は一二二に達し、その内一〇五はソウヴェートにして一七は區執行委員會である。この内には亦ベーリング島を區中心地とするコマンドルスキイ群島に於ける二島嶼ソウヴェートも包含されてゐる。

北方諸民族間に於けるソヴェート建設の成功、住民の急速なる政治的成長及び本地方の强化せられたる經濟的領有は著しく政治的重要性を有する方策――一九三〇年十二月十日附にて全露中央執行委員會幹部會の規定に依り制定された極北東亞細亞の民族的區劃――の基底を準備した。

此の民族的區分に關聯して、カムチャツカ地方の地圖は甚だしき變改を受けた。舊カムチャツカ管區並びに之れに併合せる近隣の領域に基いて、四つの新行政單位――エヴェンスキイ、コリャツキイ、チュコツキイ民族管區並びにカムチャツカ州――が形成された。

エヴェンスキイ民族管區は、エヴェン（ラムート）人の移住地である。その區域は、チュグチュールスキー及びコルイムスキー山脈とオホーツク海との間に南方より北方及び北東方に延び、狹き地帶（二〇――三五〇粁）を成すオホーツク海岸並びにギジガ川に到る迄のペンジンスキイ區南西部を含む。その面積は五十五萬平方粁、その人口は一二九〇〇人にして、その内エヴェン人は七〇％を占め、北方諸小民族は合せて七二％である。同管區は五區に分たる。管區の中心地は、最近、オホーツク海南東部に於ける唯一の良灣たるアヤンに移された。アヤンは、オホーツク、ネリカン（マヤ川上流地帶）及びチュミカン（ウドウスカヤ灣）と冬季道路（馴鹿道）に依り連絡する。

コリヤツキイ民族管區は、舊カムチャツカ管區中ペンジンスキイ、ティギリスキイ及びカラギンスキイ區を併せたものである。該管區は北にチュコツキイ管區と、南西に於てエヴェンスキイ管區と接する。その南境は、カムチャツカ半島イーチャ河（西岸地方）及びウカ河（東岸地方）に達してゐる。管區面積は三十萬平方粁、人口は一五〇〇人にして、その内コリヤーク人は六一％、北方諸小民族を合すれば八五・七％である。管區中心地は、ペンジン河口より六〇粁を遡るペンジン文化根據地である。管區は四區に分たる。

チュコツキイ民族管區は、ヤクート自治ソウヴェート社會主義共和國舊コルイムスキイ管區内オモロンスキイ區の一部及び舊カムチャツカ管區内アナドヴェイルスキイ並びにチュコツキイ區より成る。ヤクート地方より本管區に移讓せらるゝは、コルイマ川上流及び河口を除きたるオモロン川及びアニュイ川の流域である。管區面積は七五萬平方粁、人口は一四五〇人にして、その内チュクチ人は七六・三％、北地諸小民族を合すれば九六・二％を占む。管區中心地は、ラウレンチヤ灣に臨むチュコトカ文化根據地に定められた。

以上三民族管區の含む廣大なる地域は、オホーツク海南西端より北氷洋並びにベーリング海に迄延び、その面積約一六〇平方粁、即ち日本の面積の五倍にして、イギリス、フランス、ドイツ、ベルギー及びスウェーデンを合せた領域に等しい。

舊カムチャツカ管區から分離された半島南部は、三區より成る新カムチャツカ管區に編入され、最近カムチャツカ州に改變された。カムチャツカ州は北境に於てコリャツキイ管區と接壤する。カムチャツカ州は、全極東地方に於て最も開拓せられたる部分にして、巨大なる魚類並びに蟹罐製造業を有し、發達せる農業及び林業を存する。本州住民は大部分露西亞人の土著民である。人口二三〇〇〇人にして、その内遊牧する僅かに約五〇〇人のエウェン（ラムート）人は、半島の中部地方ブイストラヤ河岸に住み、自己の民族區に組織されてゐる。

斯くの如く建設の十年間は、土著民の種族ソウェートの形態から獨立の民族管區に到る迄、本地方ソウェート化の複雜且困難なる道程を辿つたのである。『民族的管區並びに區の形成は、ロシヤ社會主義聯邦ソウェート共和國の爾餘の諸地方に民族州並びに同共和國を創立せしめるべき政策の北方ソ聯に於ける實現である。』（全露中央執行委員會幹部會附屬北方委員會第八回擴大總會の決議より引用）

カムチャツカ地方に於ける民族管區の組織化に因つて、レーニンの民族政策の原則に正に妥當する諸小民族の行政的建設に對するソウェート政權の政策の凡てを完成しつゝある。この組織化に因つて、全ソ聯的意義を有する露領最北東地方に對する特種問題並びに該地方の主要住民たる北方諸小民族の利害に答へるべき經濟的開發並びに文化、社會的建設の基礎が置かれたのである。

カムチャツカ地方の經濟開發と並行して、北方諸民族勞働者に役立つ文化＝社會的施設に關する大事業が進捗していつた。現在五十三の民族學校に學ぶコリャーク人、チュクチ人、イテリメン人、アレウト人並びにラムート人は一五〇〇人を超える。遊牧民に對しては、遊牧地方の中心地又は彼等と共に移動する學校により便宜を圖られる。文化啓蒙作業の特殊的諸條件は、大陸地方に於て未知の全く新しい施設形態、即ち土民の集合地に組織される一種の宿合所、移動天幕圖書館、赤色天幕小屋及び映畫、ラヂオ、教師、看護卒、藥局の如き全面的に遊牧民に役立つ特殊の小政治啓蒙綜合機關を本地方に實現せしめた。

つい最近まで社會的勞働に全く權利を持たなかつた北方諸民族の婦人も覺醒して來た。定著土民のみならず、遊牧土民も亦出生兒の登錄の爲に戸籍登錄課に出頭した。代表會議を經て、婦人は自己の區の一般政治的並びに經濟的建設に參與した。遠隔なるチュコトカに於けるチュクチ婦人は、自己の協同組合の店舗委員會に於て働いてゐる。ペンジン、アナドゥイリ及びチュコトカに於ては、多數の婦人裁縫組合が作業してゐる。既にソウェート並びに區執行委員會に婦人を選擧してゐる。大陸方面に遊學に赴く女子の數は年々增加してゐる。

カムチャツカ文化部從業員の前に存する問題は、困難且責任あるものである。後れたる住民の全生活部門に定著すること、沈滯せる慣習の克服、地方土民を社會主義的勞働に引入れること、家族並びに財產關係の變改、何世紀にも亘る偏見及び有害なる傳統の破壞、シャマン教の影響の絕滅を必要とする。我が教師の勞働に至つては著しく困難である。全く野蠻にして決して體を洗つたり理髮せず、シャツも著けない子供を凍土帶から引連れて來て、之れに新らたに文化的教育を施さねばならず、その前に尙住民をして自分の子供を學校の寄宿舍へ入れる樣說得することが出來なければならない。

北方諸民族の特殊なる生活慣習は、八歳の少年をして既に未成年とする。彼は狩獵家、漁師にして、自分の犬橇の馭者且つ當該經濟に於ける換へ難い助手である。子供達の天賦及び著しき積極性に依つて、學校は生氣に滿ちてゐる音樂、コーラス、體操の諸小グループが組織され、指物、旋盤、錠前の仕事場が作業をしてゐる。

シヤマン教との闘爭の結果、青年は之れが影響下より漸次解放され、成年者の間にもシヤマン教僧の意義が毀損され始めてゐる。

映畫並びにラヂオはソ聯北地に於て大なる役割を演じてゐる。それは、遠隔の地にある後れた北方民族を我が一般文化的ソウヴィート生活に併合し、加之シヤマン教との闘爭に強力なる武器として役立つ。

民族的小學校、技術學校及び北方諸民族專門學校（在レーニングラード）は土民中より北方ソ聯勞働者の新幹部を養成してゐる。文學並びに民族自己の幹部の創始は、北方諸小民族の文化革改に强固なる土臺を据ゑるものである。

廣汎なる醫療施設網が創設され、醫療地點は五十六を數へ、その内九つの病院を含んでゐる。嘗て醫療救護を知らなかつた住民は、最も初歩的な衞生並びに撫生の諸規定を會得し始めた。保健省並びに赤十字協會の移動醫療隊が北方諸區に活躍してゐる。

北方諸民族のソウヴィート化の獨占的形態をなすは、全露中央執行委員會に屬する北方委員會に依り組織された文化根據地である。該根據地は、是等諸民族の全面的便宜を圖り、彼等の中から幹部を養成する。文化根據地とは、複雜なる綜合的文化設備である。即ち寄宿舍設備を有する學校、實習作業室、外來診療所及び入院病室、獸醫地點及び家畜病院、細菌研究室、地誌調査地點及び宿泊所之れである。最も遠隔なる諸地方及び地方住民が自然集合する地點に文化根據地が建設されつつある。カムチャツカ地方に於ては、一九二七年乃至三〇年に三つの文化根據地即ちラウレンチヤ灣に臨むチュコッカヤ、ペンジン河岸のコリャツカヤ及びナガーエウヴに在るエウェンスカヤが組織された。現在尙三つの文化根據即ちチュコッキイ管區内オモロン河岸のチャウンスカヤ及びユカギールスカヤ並びにウェンスキイ管區内のトゥグーロ・チュミカンスカヤが建設中である。

政治的、經濟的並びに社會＝文化的建設に於ける巨大なる成果の形で、カムチャツカ地方は全く黨組織の側からのレーニンの民族政策の堅實なる實施及びソ聯の前衞的諸地點のプロレタリアートの同胞的援助に負ふところが多い。

外國武力干涉後直ちに開始された該地方に於ける黨活動の初期に於てすら、『ボーリシェフ』黨は土着住民に大歡迎された。該黨は貢稅を廢止し、番兵、商人及び僧侶（後者は、屢々土民自身が移住せしめたのであるが）を追放し從來壓迫されてきた民族をソ聯諸民族族と同權者となし、彼等を國家統治に參與せしめたのであつた。チュクチ人の下に於て、共產黨は『最も才智ある』又は『古老の』なる言葉の意義を附せられ、之れによつて極東住民の黨に對する尊敬及び信賴を反映してゐることは特徴的である。（註）

（註）ウ・ゲ・ボゴラス著。蓁鹿民族チュクチ人に於ける階級分化並びに『ソウヴィート人種誌』誌一九三一年　一―二號、九五―九六頁。

彼等の間にあつて特に偉大なるは、レーニン――『偉大なるエレム』（强者）の大衆性にして、彼は憎むべきアクタン（醜惡なる者、敵）を追放し且つ『凍土帶の哀れなる小人』の永遠の搾取を廢止したのである。

本地方の黨組織は、最近六年内に五倍以上增大し、現在全ソ聯共產黨（ボリシェビイキ）の黨員並びにその候補者は一千を數へる、北方諸民族代表者は相當數――その内三〇％――を占めてゐる。オホーツク沿岸エウェンスキイ管區に於ては、共產主義者三七二人中、エウェン人は六四人を數へる。

共產青年同盟幹部も增大しつゝある。幾世紀にも亙る偏見より急速に脫し、進んで共產青年同盟に入りつゝあり且つ後れたる家庭に於てソウェートの文化、政治的影響の良き先導者たる北方諸民族青年間にあつては、共產青年同盟の役割は殊に著大なるものがある。之れと並んでピオネール運動も亦擴大されんとする。即ちウエレン、チャプリン、ナウカンの諸村落に住む土民の子供は殆んど全部ピオネール團體に參加してゐる。

第三章　自然的諸條件及び天然資源

カムチャツカ州はカムチャツカ半島南部の大半を占め、北緯五〇度四九分と五八度との間、ブルコフ起算、東經一二五度一〇分と一三二度五〇分との間に位する。本州は東方一八七粁を距て太平洋上に位置するコマンドルスキイ群島（ベーリング島及びメードヌイ島）をも含む。

カムチャツカ州の面積は二一萬平方粁で、その内コマンドルスキイ群島の面積は一千平方粁である。

本州は三方を太平洋、オホーツク海及びベーリング海に圍まれ、北方はコリャクスキイ民族管區と接す。

地質時代の大古、カムチャツカは主として各種の花崗岩より成る一島嶼を成してゐたが、其後、火山及び氷河の共同作用の結果、該島嶼はパラポーリスキイ谷と稱する地峽に依つて大陸と連絡した。

カムチャツカは火山作用の旺盛な地方である。此の火山脈は太平洋を東西より包圍する巨大なる火山脈の一部を成し、特に日本及び千島列島を經て、カムチャツカからアリューシャン群島に向ひ、後亞米利加大陸に到る火山脈の一環を成す。

地球上瓜哇島を除いて、火山の噴火力並びに活動の廣汎性に於てカムチャツカに勝る地方は絕無であらうと、ネイマイエルは記してゐる。（註）

（註）ネイマイエル著。地球史

カムチャツカに侵入せる初期の露人征服者は、既に大地震の目擊者であつた。ベーリング探險隊の一員であり、十八世紀の三十年代に科學々士院の依頼に依り、カムチャツカを研究した同地方最初の踏査者クラシェニンニコフ教授は、一七三七年殆んど全半島を襲つた物凄い地震の有樣を描寫してゐる。翌一七三八年、クラシェニンコフ教授は、クリュチェフスカヤ火山の猛烈な大噴火を目擊した。

九十年後の一八二八年には、ペトロパウロフスク區に於て地震が頻發し、その結果アワチンスカヤ火山が爆發し、その高さを殆んど半減した。ディトマールのカムチャツカ踏査當時、即ち一八五三年乃至一八五四年には、クリュチェフスカヤ火山が再び新活動を開始し、其際隣接のシェウ リューチ火山は崩壞した。即ち一般に推測されてゐた如く、同火山の火山脈はクリュチェフスカヤ火山のそれと連絡してゐたのである。巨大なるアワチンスカヤ灣、クリイリスコエ、クロノツコエ湖及びその他の湖沼並びに灣の形成は、之等火山の活動に負ふものである。現在カムチャツカ火山の大部分は既に死火山と化してゐるが、その一部は今尙ほ活動を續け、時々灰、石、砂、熔岩を放出してゐる。斯の如き活火山は全半島を通じて十座を算せられる。

火山の大部分は半島の南部に集中されてゐる。ペトロパウロフスクの北、程遠からざる地點にはコリャツカヤ及びアワチンスカヤ火山が位置する。前者は三四二〇米、後者は二五四八米を示し、兩火山とも時々火山活動を續けてゐる。同じくペトロパウロフスクの北方には一部分活火山、一部分休火山及び死火山より成る一群の火山群がある

クリュチェフスカヤ火山。世界最高の火山（4914米）

ジバノワ（二五八九米）クロノツカヤ（三〇三四米）トルバチク（二三七七米）及び世界に於ける最高の火山であるクリュチェフスカヤ火山（四九一四米）がある。此等火山のうちある火山は、クリュチェフスカヤ火山の如く正圓錐形を保存し、他の火山は半ば崩壞し、又は全く崩壞せる山頂を有す。ペトロパウロフスクの南方には、縱谷（流水作用の結果形成され斜面上を縱走する溝渠及び谿谷）に刻まれ、全山裸岩より成る圓錐形のウュリュチンスカヤ死火山群（二、〇六〇米）が聳立し、その南方には、アサチヤヤ、ボウォロートナヤ、オバーラ、ホドゥートカその他多くの死火山がある。

火山活動と關聯するカムチャツカの特徴としては、山岳地方到る處に散在する溫泉（地方にて『湧泉』と稱する）の豐富なことである。（圖表參照）

火山活動は氷河作用と相俟つてカムチャツカの地勢の主要輪廓を決定した。

カムチャツカの中央部を縱走する中央山脈は、花崗岩、片麻岩、結晶片岩、北部に於て斑岩の如き原生岩より成る該山脈は半島を自然的諸條件の全く異る東西兩部分に分つ。

本山脈は西方に向つて急傾斜を成し、深き谿谷及び峽谷に依つて刻まれてゐる。山脈から遠くオホーツク海沿岸眞際に到る間は、ツンドラ性の低地が延び、中央山脈の斜面を流れる幾多の河川に依つて切斷されてゐる。ツンドラ帶は諸處殊に河岸に於て森林を生じ、その典型的なツンドラの性狀を著しく喪失してゐる。ガンナリスカヤ・ツンドラ地方を、中央山脈より分離し、之れを直角をなして北東向する東部山脈が走つてゐる、該山脈と中央山脈との間には、半島最大のカムチャツカ河の河谷が存在する。東部山脈の延長は大ならずと雖も、著しく火山並びに高山に富み、その內クリュチェフスカヤ火山が顯著である。東部山脈とベーリング海沿岸との間の廣漠たる地域は群少山脈によつて滿たされ、それらの諸山脈は海に向ひ急傾斜を成し、許多の入江並びに大小の灣を擁する凹凸激しき海岸線を形成する。

此の點東海岸は低平で、オホーツク海に頻發する暴風雨の時、船舶の避難所となる大小の灣入を全く缺ける西海岸に比して有利である。

氷河活動の痕跡としては、黃砂及び餘り圓形ならざる石より成る多數の氷堆石が存在する。學士院會員コマロフの意見に依れば、カムチャツカ全調査區域中、最も明白に氷河の痕跡を殘す地方は、カムチャツカ中部、即ちナチンスコエ湖圍繞地及びボリシャヤ、ブィストラヤ及びカムチャツカ諸川の水源地方であるこ。

カムチャツカの河川は、之を明らかに異る二河系に分つことが出來る。一は中央山脈より西に流れオホーツク海に注ぎ、他は東山脈より東に流れベーリング海及び太平洋に注ぐ。前者の中最も大なるは、ボリシャヤ、オバーラ、オブルウコウィナ、イーチャ川其他にして、後者にはカムチャツカ、ジュバーノワ、アワチャ川がある。

西方河系の諸河川は、中央山脈地帶を流れるその上流に於て顯著なる山岳性河川の特徴を具へ、岩石性の河床上を、或ひは山間の狹谷又は急斜面の間を早瀨を成して流れる。河谷は通常狹く、屢々全く之れを缺くが、諸處に於て擴大して良好なる草刈地を呈する。草地の一部は障碍物無く利用に適し、その一部は主として叢林を清掃して土

地改良を要す。

中央山脈の隘路より流出する西方の河川は、苔原性の低地に出で開豁なる低き河岸を流れ、時として明瞭なる河谷としての形態を全く缺き、周圍の苔原帶と一致してゐる。當地方の土地を改良する時は、廣大なる草刈地を得るであらう。

東方河系の河川中最も意義大なるものは、カムチャツカ河である。河岸に存する緩斜面の階段地を合する時は、その河谷總面積は二百萬ヘクタールに及ぶ。本河谷は大小の湖沼に富み、小叢林又はサルヤナギの密林が生じ、乾燥した緩斜面は白樺林及び混淆林に蔽はれ、雜草に富む。西方河系の諸河岸と同じく、當地帶に於ても草刈地利用に適する平原は、排水及び清掃を要する利用可能草地と交錯してゐる。

カムチャツカに於ける大部分の河川は、山岳性河川の性狀を有し、激流であり、河床は岩石性で且つ水深淺きため、多くの場合航行不可能で、木材流送にも極めて不便である。

カムチャツカ半島の河川中航行可能なるは、唯カムチャツカ河のみであるが、それとて多くの缺陷を有してゐる。河幅二粁に達する河口は、水勢激しき爲巨大なる流出物が堆積し、吃水深き船舶の大洋より河川への遡行を困難ならしめる。又これら流出物の上に巨浪が押寄せるを以つて、大型汽船の貨物の積込み積下しに從事する小汽艇の海損を毎年招來する。河口より略ほクリュチヤ村(同村はカムチャツカ地方工業中心地の一に豫定されてゐる)に到るまでは、水深大なる個所と砂洲とが交錯してゐるが、後者は浚渫機によつて容易に除去することが出來る。更に南方ミリコウォ村に到るまでは、唯吃水一米以下の小船舶に限り航行可能である。カムチャツカ河は水路幹線として半島の内部深く入り込み著しく運輸の便を有するが、現在までは極く僅かしか利用されなかつた。

十八世紀には、小型汽船はボリシャヤ河を河口より程遠からざるボリシェレツクまで遡航したが、現在では吃水淺き小汽艇と平底の三羽艘のみが辛ふじて遡行し得る。

西海岸の爾餘の大河川もボリシャヤ河と同樣で、その上流及び中流に於ては小河と同じく唯地方民の通常利用する狹少なる獨木舟のみが航行し得る。

大部分の河川に於ける木材流送は、大なる困難を伴ふ。一九三〇年春、カムチャツカ株式會社は比較的大なるアワチャ河に於て木材流送を試みたが、失敗に終つた。木材は數多の支流に散佚し乾燥して了つた。河川を清掃し、網羽を設置せざる限り、斯かる試みを繰返へすことは合目的ではない。

更に小なる河川に於ては、僅かに春季增水時の短期間に亘り、短距離の極めて小規模の管流が出來る。唯カムチャツカ河のみ比較的有利なる流送條件を具へてゐる。之れに據つてクリュチ村地方に木材綜合工場が建設された。

水力源泉としてのカムチャツカの河川は研究される所更に少い。是等河川を表面的に瞥見したところに據れば、之れが水力包藏量は莫大なるものがある。河川の急流に因る巨大なる動力、水壓用堤防の構築を容易ならしめる『河川の嶮岸』の諸處に存在すること、貯水量を高める豐富なる降水量——是等の事態は地方經濟の必要とする水力利用が著しく有利なる將來の見透しを有することを約す。

カムチャツカの氣候は現在まで甚だしく研究が足りない。現有資料は諸探險隊並びに九觀測所の斷片的觀測に基くもので、觀測所中觀測を續行すること十年以上のもの――一、五年乃至十年のもの――二、三年乃至五年のもの――一、二年のもの――五を數へる。斯くの如き資料は、質的にも量的にもカムチャツカの氣候的諸條件の狀況に關する何等か確實なる資料として充分なるものと認め難い。該資料は只その概念を與へるに過ぎない。

カムチャツカの氣候は、太平洋及び北氷洋、オホーツク海及び山脈の如き諸要因の複雜なる影響に依つて形成されるを以つて極めて特殊的である。

カムチャツカ州は、三つの氣候地帶に分たれる。

東海岸地方は、太平洋の風、太平洋の冬季颱風、幾多の氷塊を伴つてベーリング海峽より流れ來る寒流の影響下にある。同時にその南部は沿岸附近を流れる暖流の影響を受け、八月の水溫は一二乃至一五度に上る。同暖流は冬季の氣溫を和げ、一月ペトロパウロフスクの氣溫は九乃至一〇度即ちモスクワの氣溫にまで達する。夏季はその影響比較的少く、五月、六月、七月の氣溫は低い。

西海岸地方は大陸の大シベリア高氣壓帶よりの寒風の影響、殊にオホーツク海の作用を受けて、水溫は夏季ですら零度に近く、之れが爲冬季は殆んど溫暖なることなく、夏季は沿岸地帶を著しく寒冷ならしめる。

特殊なる氣候條件を構成するのは、中央並びに東部兩山脈間の中部地方即ちカムチヤツカ河谷である。高峻な山脈は該地方を海洋の影響より孤立せしめ、從つてその氣候は典型的な大陸性を帶び冬季に於ける氣溫は極めて低い

1911年5月1日のペトロパウロフスク大逆。雪中の通路

略トゥーラ市と同緯度上に在るミリコウォに於ける一月平均溫度は二五度、冬季最低氣溫は五〇度即ち北極圈に屬するアナドゥイリより低溫である。同時に該地の夏季氣溫は全カムチャツカに於ける最高を示す。（次表參照）

月及び年平均氣溫表

觀測所名＼月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年平均氣溫
東海岸地方													
ペトロパウロフスク（無線電信局）	一九・一	一九・五	一五・八	〇・三	四・〇	九・一	一三・六	一四・〇	一〇・〇	四・五	一・三	六・四	二・二
同（燈臺）	一一〇・〇	一〇・三	六・八	一・七	二・五	六・九	一〇・八	一三・五	九・三	四・〇	二・五	七・四	〇・六
西海岸地方													
ポリシェレック	一三・六	一四・一	七・八	二・三	三・一	六・五	一一・九	一三・二	八・三	二	二・六	八・八	〇・四
ウスチ・ポリシェレック	一一・四	一〇・〇	六・二	二・〇	一・五	六・九	一一・四	一三・七	九・三	四・二	三・五	八・七	〇・四
オゼールナヤ	六・八	八・三	六・〇	〇・七	二・七	五・八	九・二	一〇・九	一〇・〇	五・八	〇・一	四・〇	一・二
中部地方													
クリュチエフスコエ	一六・二	一四・〇	九・二	二・四	四・五	一〇・九	一五・四	一三・八	八・七	一・六	七・〇	一四・三	〇・八
ウスチ・カムチャツク	一三・五	一三・二	一〇・三	二・七	二・六	七・九	一一・七	一三・三	八・九	二・五	四・一	一一・五	〇・六
ミリコーウォ	二五・〇	一七・九	一一・六	二・二	五・二	一二・〇	一五・〇	一四・一	七・二	〇・三	九・〇	一八・一	二・五
モスクワ	一〇・二	九・三	四・九(冰)	三・九(冰)	一三・一	一六・二(冰)	一八・三(冰)	一五(冰)	一〇・二(冰)	三・八	二・五	八・〇	三・七

右は極東地文觀測所長コロスコフ著『カムチャツカ半島の氣候概觀』より引用したものである。

前記三地方の氣溫諸條件は、一月と七月即ち最寒と最暖の月の相違を表示する數字に依つて極めて明白に特徴づけられる。即ち左の如し。

ペトロパウロフスク（燈臺）……一〇・八度
ポリシェレック……一五・五度
ミリコーウォ……四〇・〇度

降水量の統計は尙一層表示的である。年降水量左の如し。（單位粍）

東海岸地方
ペトロパウロフスク（無線電信局）……一〇六七
同（燈臺）……八二一
西海岸地方
ポリシェレック……三八九
ウスチ・ポリシェレック……六三九
オゼールナヤ……二七八
中部地方
クュチェフスコエ……四三五
ウスチ・カムチャツク……五一八
ミリコーウォ……三五七

カムチャツカ州の地理的延長は大きくないが、その降水量の條件は甚だ異る。最大量（ペトロパウロスク）と最小量（オゼールナヤ）との差異は七八九粍に達する。一九一八年、ペトロパウロフスクの年降水量は一八四五粍で、三月だけでも四一七粍に達した。冬季の降雪量は極めて著大で、犬橇に依る運輸を除けば本州の凡ゆる交通は杜絶する。附近に海洋が存在するため、曇天並びに霧の日が多く、一年間に於けるそれらの數は左表の如くである。

	曇天	霧の日
東海岸地方		
ペトロパウロフスク（無線電信局）	一四四・五	三四・七
同（燈臺）	一三一・五	六六・一
西海岸地方		
ポリシェレツク	一八九・一	九七・六
オゼールナヤ	一三九・〇	三八・〇
中部地方		
クリュチェフスコエ	一八九・五	一六・七
ウスチ・カムチャツク	一八三・二	三九・五
ミリコーウォ	九八・〇	一二・〇

唯コマンドルスキイ群島は特殊の條件を具へ、暖流が存在するため冬季は氣溫高く、夏季は著しく低い。次に中央地方觀測所の一九一七年度の觀測資料を引用しよう。

	ニコリスコエ村（ベーリング島）						プレオブラジェンスコエ村（メードヌイ島）					
	平均氣溫	最高氣溫	最低氣溫	降水量	曇天日數		平均氣溫	最高氣溫	最低氣溫	降水量	曇天日數	
冬												
一月	(-)五・〇	四・五	(-)一七・九	五〇・五	一一		(-)三・二	五・七	(-)一四・三	七二・七	一七	
二月	(-)二・五	二・〇	(-)一六・五	二九・八	一六		(-)二・二	三・八	(-)一二・三	五一・三	一七	
夏												
六月	五・三	一三・一	〇・四	一九・八	一九		五・三	一五・三	(-)〇・六	五八・八	二一	
七月	七・七	一五・〇	二・二	六一・〇	二四		七・三	一五・一	三・一	五八・〇	二五	
秋												
九月	八・六	一三・四	—	二九・八	一五		八・八	一四・四	一・一	五四・三	一四	
十月	四・四	二・一	—	五四・八	二五		四・九	二三・三	(-)四・一	二三・一	一六	
年平均	二・一	一七・二	—	五八・八	二一三		二・七	二〇・八	(-)一四・三	六一・四	二九	

一月と七月との氣溫の差違は、ベーリング島に於ては僅かに一二・七度、メードヌイ島に於ては一〇・五度に縮まる。同時に降水量及び霧の日は甚だ著大である。

最後に、カムチャツカの氣候の特徴は强風の日が多く、屢々暴風となる。

冬季、亞細亞大陸（レナ河岸、アルダン河口）には强力な高氣壓が形成され、之れと同時に暖流の一主要支流た

る黒潮の通過するアリューシャン群島方面には低氣壓が生する。從つて物凄い猛威を奮ふ颱風が發生する。特にオホーツク海及び凡ゆる風向に對して無防備なカムチャツカ西海岸地方は物凄い暴風の被害が多い。一年中の暴風の日數は左の如くである。

ペトロパウロフスク附近	五二・四
ウスチ・ボリシェレック附近	五九・〇
クリュチェフスク附近	二五・〇

暴風は大部分秋及び冬に多い。

カムチャツカの土壤も亦殆んど研究されてゐない。學士院會員コマロフの結論に據れば、該土壤は有機物に乏しく、僅かに構成されるか又は全然構成されてゐない。各種の噴出物は、一年の大部分積雪に蔽はれ、極めて徐々に植物の吸收し易き物質に變成して行く。加之その大部分は著しく硅酸に富んでゐる。概してカムチャツカの土壤はコマロフの意見に依れば、不毛で施肥を要するものと看做される。一九二八年にカムチャツカを調査した土壤學者クラシュク教授の結論に據れば、カムチャツカに於ける農業の發達は土壤方面よりの特別の障碍を發見しないと。

即ち同氏の言に依れば、『良好にして豐饒なる土地は多い』。勿論この言は、カムチャツカに豐饒なる土地が廣大なる地域に亙つて分布してゐるものと解すべきものでなく、該土壤の性質が何等抑制的要因となるものではなく、其他の有利なる條件――主として氣候條件――が伴ふ場合には、良好なる土壤が必要なだけ發見され得ると解すべきである。

カムチャツカの木本植物は三大別なし得る。諸河川の河谷は、サルヤナギ、ハンノキ及びエゾイチゴ、アカスグリ等より成る下草を伴ふポプラが繁茂してゐる。沖積土地帶を除く高地、沿岸の波狀地及び山脈斜面の下方は、カムチャツカ植物の最も代表的なエルマン樺、土地で云ふ石樺に掩はれてゐる。該樹は和やかな風景を呈するのであるが、カムチャツカの特殊なる氣候、深い積雪は、白樺固有の均齊を奪ひ、屈曲した樹幹と尙一層蛇の樣に灣曲した枝を有する醜惡なる樹木と化してしまつた。白樺林の上方、山脈の中腹地帶には、當地方の住民が這松、ハンノキ『矮林』と呼んでゐる暗綠色の灌木林が密生し、互ひに相絡り合つてゐる。更に上方の、高山植物地帶の上には、植物を全く缺く山頂が現はれる。森林を缺く廣大なる地域は、山脈の下部にも存在する。是等の地域は屢々北方の濕潤且つ起伏した苔原帶と何等の共通點を有してゐないが、住民は之れを一般に苔原帶と呼んでゐる。本地域の一部分は長期に亙る自然乾燥の結果、現在では乾燥した地域と化し雜草が密生してゐる。カムチャツカと同緯度のソ領に固有の檜、菩提樹その他の樹種は勿論、松、紅松さへもカムチャツカの植物中に全然缺いてゐることは特徵的である。

此の意味に於てカムチャツカ河谷は特殊の狀況にある。面積約二五萬ヘクタールに及ぶ流域には、流域には上述した樹種を有してゐる。即ちその六〇％は白樺及び氾濫原固有の林木に占められ、約一〇％は湖沼、殘餘の三〇％は草地で、疎林を有する乾燥したものも、亦濕潤なるヤマアハ屬を繁茂する個所もある。樹種中最も多きはエルマ

カムチヤツカに於ける植物、クマノネ(傘樹)は夏季、高さ四米に達す。

樹齢一五〇乃至二〇〇年である。カムチャツカ産落葉松は他地方のそれと著しく異る。落葉松の最大缺點である割れ易いことと乾燥すると龜裂を生ずる現象はカムチャツカ産の落葉松には見受けられない。何れにせよ紅松、松の如き他の針葉樹よりも此の現象は少い。落葉松は木目が緻密なので、加工が容易に出來、其際薔薇色の滑らかな表面となる。その品質上、落葉松は全く紅松の代用品となり、特に樽材としては良好である。落葉松は水中に沈まず

ン樺である。

河谷の中部には、白樺、ポプラ、白楊、白柳等の濶葉樹を混淆する針葉樹（落葉松及び蝦夷松）林が密生してゐる。落葉松は主として乾燥せる河岸の沖積層上に生じ、時として山地斜面の低所にも見受けられる。樹高は二五乃至三〇米で、胸高直徑三〇乃至五〇糎、

従つて流送が出來る。カムチヤツカに於ける落葉松林の面積は、オフシヤンニコフ教授に依れば、四〇萬ヘクタールと算定されてゐる。

蝦夷松は主として高地及び山脈の稍々急斜面に生じてゐるが、高所には見受けられない。蝦夷松は眞直な樹幹を有する均齊ある樹木で、樹高は二五米、胸高直徑は三〇乃至四五糎に達す。オフシヤンニコフ教授に依れば、蝦夷松林の占むる面積は一四萬八千ヘクタールである。

カムチャツカ河及びその諸支流の氾濫原に於ても亦ポプラ、白柳及びハンノキの良林相を見受けられる。

カムチャツカの草本植物は、乾燥せる河谷に於ては主として濶葉且叢狀のもので、禾本科及びスゲを混じ、河岸の氾濫原の大部分を占めるものは、ヤマアハ屬で、普通高さ二米乃至それ以上に達するバラモンジンの群落が混じてゐる。

カムチャツカの草地の量及び質に關しては、識者間に對立する評價が行はれてゐる。學士院會員コマロフは、自著のカムチャツカ植物に關する大著述中に、『著しく硅酸に富む火山灰より成る土壤の不毛性は、使用中の牧草地及び刈草地に於ける雜草をする急速に惡化し、住民は之れを非常に慨嘆してゐる』と。クラシュク教授は西海岸地方及びカムチャツカ河谷の草地を研究した結果、正反對の結論即ち『カムチャツカの河岸及森林内の草地は該地方の主要資源の一である』との認識に達した。同氏の資料に依れば、最も草地を有する地方は、カムチャツカの西海岸地方に集中し、その面積は一二萬五千ヘクタールに達し、その内一〇萬ヘクタール迄は乾燥草地にして改良を要せず

約二萬五千ヘクタールは森林草地を成す。クラシュク教授の計算に依れば、該面積の草地は約三八七千瓲の乾草を產し、大家畜一二萬乃至一三萬頭の飼養を許す。

一九〇八年乃至九年に西海岸地方を踏査した移民局探險隊は、反對に該地方の草地を極めて價値低く評價し『西海岸地方の畜產は斷じて繁榮する譯はなく、それは常に爾餘の產業部門に從屬する役割を演ずるであらう。』との結論に達した。

西海岸地方を踏査し且つ當局者の意見を聽すれば、改良を要しない草地面積に關するクラシュク教授の統計は過大評價の嫌ひがあることは疑ひない。西カムチャツカの草地の大部分は、開墾、乾燥等の改良方法を要することは無論である。併し斯くの如き點を留保すれば、西海岸地方の草地が大なる潛勢力を有するこのクラシュク教授の斷言は之れを正しいと認めねばならぬ。

カムチャツカ河谷の草地を、クラシュク教授は略ほ七萬五千ヘクタールと算定する。一九〇八年乃至九年の移民局探險隊は、之れを二〇萬乃至二二萬五千ヘクタールと算定した。

ペトロパウロフスク地方の草地に關しては何等確定した資料がない。

以上種々矛盾せる說よりして、先づ第一にカムチャツカの草地は特に眞摯な研究を要すてふ結論を爲さなければならない。乍併現在カムチャツカの草笘に一聯の否定的現象を發見しても、それは未だ該地方牧草の將來の見透しの問題を解決するものではないことを認めねばならない。斯かる現象は何れの未開且つ未開發な又は合理的に利用されてゐない草地に於ても當然見られるところである。カムチャツカの草地は正に斯かる範疇に屬する。それは到る處未開狀態に在り、如何なる栽培、技術的改良も試みられなかつたし、現在も試みられてゐない。而も最も非合理的に利用されてゐる。夏季、漁業に從事する住民は、通常草笘が過熟し、粗くなり營養少くなつた晩秋になつて草刈を行ふ。カムチャツカ草地の質と之れに關聯する當地方畜產業の將來の見透しを最少に評價した調査者達は、現代の牧草技術が、最良種の植物の選出、栽培草笘の播種、草地の改良、耕耘及び施肥等の方法に依つて野生植物を改良する凡ゆる手段に富んでゐることを見逸してゐる。

文化的、合理的、組織的なる畜產業の創始が問題となり、その見透しの評價に際して唯單に野生にして荒廢せる非培養地の狀態からのみ推論すべきではない。カムチャツカに於ける草笘の成長條件が、豐富なる降水量に依り極めて有利であり、草笘は到る處、より急速なる速力を以つて成長することを爭ふべからざる事實と認めねばならぬ培養經濟の課題は、是等の有利なる自然的生產力に據り、之れを利用且つ助長し以つて計畫經濟の要求及び必要に適應する形態を草地に附與すると云ふ點にある。

カムチャツカの草地經濟は尙一つの重要なる障碍に遭遇する。時として中秋に到る迄續く雨期が取入れを困難ならしめ且つ時としては之れを挫折せしめる。

斯かる現象と鬪ふに無力な地方民にとつては、此の雨期の長い年は大なる厄年である。合理的畜產經營は、人工灌漑並びに飼料貯藏の二方法に依つて該現象との鬪爭を發展せしめねばならぬ。上記の方法は飼料根據地を强固な

らしめる。

カムチャツカに於ける牧草栽培の將來の見透しは諸種の徴候に徴すると有利であると推定される。農學者エヌ・ウヴ・チュルヌイショフは、可成り昔カムチャツカ河谷内にアカウマゴヤシの種子が一探險隊に依つて齎らされマシュー ラ村附近に播種されたが、それはよく成長し、今日では、野生狀態のまゝ遠く諸方面に分布してゐる、と認めてゐる。此の事實は、カムチャツカに於ては、アハガヘリ及びその他の甘草類と並んでムラサキウマゴヤシも栽培可能であることを指摘するものである。

カムチャツカ州の動物界は、可成り複雜多種であつて、豐富なる資源をなしてゐる。カムチャツカの海洋は多種の魚類、海獸（鯨科動物、鰭脚動物）甲殼類、軟體動物に富む。カムチャツカの主要魚族資源は鮭屬で、鱒之助、紅鮭（又はニヤルカ）、鮭（又はハイコ）、銀鮭、鱒、シュムガ、オシロコマを產する。その內鱒之助及びシュムガは專らカムチャツカの魚類で餘のものは日本、アラスカ、西カナダを含む太平洋沿岸の北部全體に產する。鮭屬以外の海魚にて最近產業價値を獲得したものは、鱈、鰊、比良目、ナワーガ及びウグヒである。カムチャツカ沿海に於ける海獸は、鯨、海豹、海豚、海驢、海象、鰡脚獸及び獵虎で、甲殼類では蟹を產する。

陸上の動物界は各種の毛皮獸を以つて代表される。即ち、黑貂、狐（銀狐、十字狐及び赤狐）、北極狐、貂、貂、熊、鼬等及び食用鹿、山羊等である。越年鳥類及び渡鳥は十種に及ぶ。その中產業價値を有するものは、雞類〔鷓鴣、山鳥、エゾヤマドリ（terao urogallus）、雷鳥類（terao bonasia）〕、涉禽類〔山鷸、鷸（scolopax）、シギ屬（numenius arquatus）、千鳥屬等〕及び水禽類（鴨、鵝、鷲鳥、白鳥、鴨、コガモ、ケタワガモ、黑鴨、ウミガラス屬等）である。適當の捕獲組織を施せば、此等の野鳥類は國內及び國外市場に對し冷凍野禽罐詰肉、絨毛、羽毛及び毛皮を提供することが出來る。地方民は廣く野鳥の卵を利用してゐる。魚類を主食とする水禽類の肉は多く不味である。家禽は通常鷄、鷲鳥及び鴨である。

本地方の鑛物資源は、現在探鑛中に屬する。今日迄確められたものは、石油、泥炭、輕石、石炭、金、銅鑛及び鐵鑛等である。幾多のカムチャツカ探險隊の諸資料に基いて、油田試掘研究所はカムチャツカ油田を左の如く特徴づけてゐる。

一九二二年、當地方の獵人達が東海岸ボガチェーフカ河上流地帶に於て石油露出面を發見したことに依つて、初めてカムチャツカの含油性が確められた。右の石油露出面は長い間カムチャツカに於ける唯一のものであつた。乍併一聯の太平洋油田と關聯する一般地質的考察並びに推察はカムチャツカの含油性が單に一ボガチョフ油田にのみ限られないことを豫測せしめた。

而して實際一九三二年には重大なる發見が爲された。即ちカムチャツカの西海岸に於ても含油性が確められたのである。油田試掘研究所の地質學者ベ・エフ・ディヤーコフは、ティキーリスキイ地方に於て、明瞭なる含油徴候を有する地層を發見した。この徴候は强烈なる石油臭と、液狀の石油及び地蠟狀の物質によつて示されてゐる。此の含油層は約一〇〇粁に亘つて追跡された。故に、今日カムチャツカ全體は廣大なる新油田地方と見做すことが出來る。

現在までの地質調査の結果は、カムチャヤツカ油田の産業價値を確める目的を以つて今直ちに東海岸及び西海岸地方に於ても深度掘鑿を行ふことを許すものである。

ボガチェーフカ油田に於ける詳細なる地質探鑛作業は一九二七年より開始された。本作業は、如何なる深度より、又如何なる層位より採油すべきであるか、亦油田評價に必要なる幾多の資料を獲るためには、數個の深所鑿井を掘鑿することに因つてのみ、可能であることを立證した。（一九三一年は既に二鑿井の設置地點が豫定された）深所掘鑿に基く確定的結果は、嘗に最上質（石油成分七〇％）の石油を含有する油田の産業價値を解決するに止まらず、カムチャツカに於ける向後の石油探索に一定の方向を與へるものである。從つて、現在石油關係に於て、何等の興味を有しない東海岸諸地方も、後年深甚なる注意を惹くに至るであらう。

含油關係に於て特殊な興味を有するは、より有利なる地質構造と、より交通便利な西海岸地方である。一九三二年の地質踏査は當地方に於て油層、即ち油氣を有する漸新世に屬する暗色の頁岩、中新世砂岩の厚層中に含まるゝ良質なる石油の集積及び石油集積に好都合な地質構造を確定した。叙上の因子は、今直ちに該地方に於て地質探鑛作業を全面的に强化し、深所掘鑿を實行するに足る有利なる徵候をなすものである。深所掘鑿に有利なる對象としては、ティギリ村より北方九〇粁、海岸附近に在るワヤポーリスカヤ背斜が目指されてゐる。

ボガチェーフカ油田に對する野外地質調査は既に完了したものと認める時は、西海岸地方に對して、深所探鑛掘鑿地點を確定するため、地質掘鑿作業を行はねばならぬ。而して該作業は次の諸方面に對して進めらるべきである。

即ち、第一に有利なる地質構造を研究解明すること及び詳細なる地質測量に依つて豫備油田を具體的に調査すること、第二に凡ゆる角度よりする油層の全面的調査、第三に東西兩海岸地方に於ける地層と含油性を解明すること、之れである。

以上叙述する所に基いて、油田試掘研究所はカムチャツカは既に今日深所掘鑿を行ふに足る凡ゆる前提條件を具備してゐると結論してゐる。何故なら唯深所掘鑿のみが、此の廣大なる含油地方の有する産業的價値を解決するからである。

一九三三年に創立されたカムチャツカ石油産業局は、政府の指令に基き、同年末カムチャツカへ冬季地質調査隊を派遣した。本調査隊の目的は地下深所に於ける斷層と水成岩中に含まるゝ火山包裹物を解明することにあつた。翌一九三四年早春、本調査隊の應援隊として、地質調査隊三、地形調査隊三、磁力測量隊一を派遣した。七月五日には、是等全體の探鑛作業によつて二ケ所の深所試掘井設定地點が決定されなければならない。

ボガチェフスキイ地方に於ける最初の試掘井の深度は五〇〇乃至六〇〇米、ワヤムポーリスキイ地方のそれは、地質斷面に基いて二、〇〇〇米と豫定されてゐる。

リュバルスキイ教授の結論に據れば、ボガチェーフカ油田産の原油は、比重の高いベンジン、石油及び比重の低い黑色鑛油並びに石油分溜物質の引火點の高いことを特徵とする。

本原油の分析結果は次の如くであつた。即ち石油七六・三――七八・〇％、ベンジン四・四――七・五％、黑色鑛油一

六・二――一七・六%。

カムチャツカには石油以外に多くの炭坑が有る。石炭鑛床は半島の東海岸にも、西海岸地方にも存在する。今日まで行はれた探鑛作業の結果によると、現在最も著大なる意義を有するは、半島北部のコリャクスキイ民族管區に在るコルフォーフ炭坑である。その南方、カムチャツカ州境界内には、カムチャツカ河口附近の同河の河岸にも石炭鑛床が認められる。西海岸地方の各地に於ても、石炭が發見され、それは附圖に示してある。その中、現在最も著大なる意義を有するは、ハイリュゾワ河岸の鑛床である。同鑛床はハイリュゾウオ村より一二乃至一五粁、海岸より五〇粁を距て、ハイリュゾワ河に注ぐチーハヤ川とブイストラヤ川との間に在る。本鑛床に於ける石炭の埋藏量は約二〇萬瓲と推定される。

石炭は褐炭に屬し、長焰炭で、その分析結果は、左の如くである(%)。

灰分	二七・三二
揮發分	二三・五八
發熱量	六、六六八

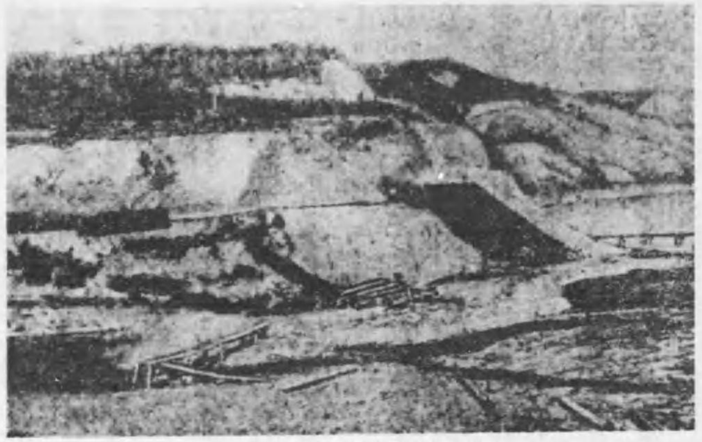
カムチャツカに於ける石炭は著大なる意義を有するにより、該石炭の有する產業的價値を確定する爲、引續き調査と眞摯なる探索を要する。

一九三〇年乃至三一年に行はれた西海岸諸區に於て行はれた調査に依れば、長さ數百粁、幅數粁に亙る廣大なる泥炭層が海岸に沿ふて延びてゐることが確定された。泥炭は主としてスゲ屬より成り燃料に適す。その分解程度は二〇%より五〇%乃至七〇%に及ぶ。層の厚さは一・五米より六乃至八米である。

豫め乾燥した泥炭の試驗は、カムチャツカ株式會社の魚類罐詰工場の汽罐室に於て行はれた。その際、泥炭は長焰を發して好く燃へた。而して灰分は一〇%以下で發熱量は三、五〇〇カロリーであつた。右に引用した諸資料に依ると、カムチャツカ產の泥炭は、現在大陸よりカムチャツカに移入しつつある、灰分一二%と、發熱量三、二〇〇乃至三、五〇〇カロリーを示すアルテーム炭より惡くないことを物語るものである。

カムチャヤツカ諸探險隊の結論を綜合すると、左の如くである。

一、カムチャツカ西海岸地方には、數千萬瓲を以つて算定される大泥炭々田が在り、その層厚は一・五乃至八米以上に達す。



コルフフ炭坑。上層に於ける探炭

二、泥炭々田は、之れが需要者たり得る魚類罐詰工場に直接隣接してゐる。

三、泥炭は燃料に適し、而も良質である。加之小規模ではあるが、良質の建築用泥炭も存在する。殊にキフチク河口に在る魚類罐詰工場に直接隣接する泥炭炭田は、該工場の需要を六十年間に亙り、ボリシャヤ河口の工場際のそれは百年を保證するに足る。

ペトロパウロフスク市區の調査に依つて、アワチンスカヤ灣の西南方ニコラエフスコエ村とアワチャ川との間に巨大なる泥炭層が發見された。その面積は略ほ八、〇〇〇ヘクタールで、此の燃料用泥炭層の厚さは平均二米に達する諸處に下敷用として使用に適する泥炭もある。當地方の氣乾泥炭の總埋藏量は大略二千百萬瓲と概算されてゐる。

斯の如き巨大なる泥炭資源を有する事は、著しき程度に於て本州の燃料問題の解決に與つて力あるものである。建築材料中第一位を占めるは輕石であらう。該鑛層は一九三〇年、極東建築材料合同の第一回探險隊に依つて、西海岸オゼールナヤ河口に於て發見された。一九三一年の再度踏査に依つて輕石の存在は確定され、その埋藏量は二千三百萬立方米と算定された。然し本層は、海岸より遠隔の地に在つて交通路を缺くため、その開發は困難である。最近の諸探鑛作業と同時に、東海岸アレウツカヤ灣地方に於ても輕石が發見された。本層の埋藏量は概略七百萬立方米と推定されてゐる。本層の開發は同年、即ち一九三一年に著手された。カムチャツカの建築用輕石の利用問題は運輸問題に係つてゐる。

カムチャツカ株式會社の資料に據れば、輕石一〇萬立方米の輸送に要する航行回數は約四十回である。故に航行可能期間を六ケ月とし一航海に要する日數を二十日とすれば、五隻以上の船舶を必要とする。

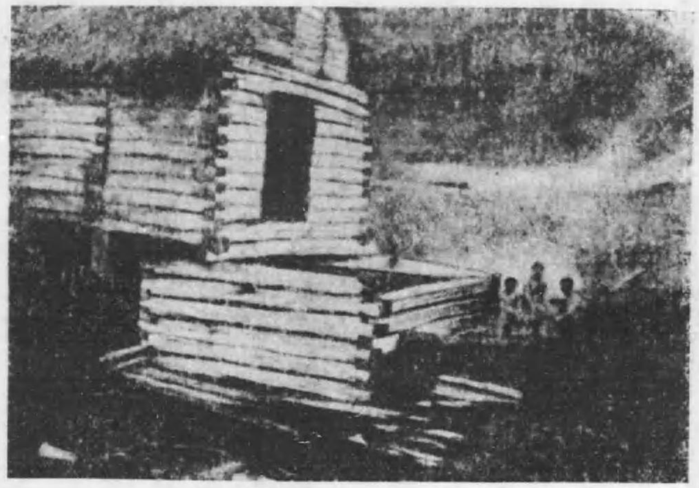
當地方の煉瓦生產用原料となる粘土及び砂の貯藏量問題も亦殆んど研究されてゐない。粘土の產地はタリインスカヤ灣沿岸、ペトロパウロフスク近傍に存在する。最初の家內工業的煉瓦工場は、一九三〇年移民組合に依り該地に建設された。良好なる建築用粘土並びに陶土の產地も亦西海岸に發見された。

人造纖維とバーカライト生產の際に生ずる凡ゆる種類の木材殘廢物も、又建築用材として廣汎に利用できる。人造纖維の生產に必要なる硅藻土はカムチャツカに存在してゐたが、之れを指摘したのはカムチャツカ調査の第一人者クラシニンニコフ教授であつた。

革命前の調査に依りボリシェレツク區並びにオブルコウィナ及びコルパコワ河岸に金鑛が發見されたが、含金量少き爲、該金產地は大なる產業價値を有しない。

一九二八年にボリシャヤ河の北方ミートガ、ウートカ及びホムーチナ河岸に砂金が發見された。或る個所の含金量は砂一立方米に付二乃至二・五瓦、他の個所に於ては〇・四乃至〇・六瓦、ホムーチナ河岸の砂地に於ては〇・四瓦であつた、以上の如くであるから是等砂金はカムチャツカの諸條件下に於ては產業價値を有し得ない。

コマンドルスキイ群島に石炭及び銅鑛が存在すると指示されてゐるが、詳細なる調査は現在行はれてゐない。幾多の調査者に依つて諸處に銀鉛鑛の存在が發見された。ウヅン火山、アワチンスカヤ及びクリュチェフスカヤ火山の



溫　泉

附近に於ては天然硫黄層が發見された。オウェデンコは氷洲石、亞鉛鑛、白金等の存在を報告してゐる。乍併凡て是等の指示は斷片的のもので、具體的性質を缺くを以つて更に綿密なる檢討を要す。

カムチャツカ山地の鑛泉は大なる實用的價値を有する。その數は著大である。カムチャツカ山地地方到る處に發見される。此等鑛泉を分析したところ左の如き成分を含有することが判明した。硅酸及び硫酸ナトリウム（ヤウィンスキイ泉バンナヤ河岸の泉及びナチンスキイ泉）、硫化石灰鹽及び硫化ナトリウム鹽（バラトウンスキー泉）、炭化石灰及び硫化石灰（ゴルイギンスキー及びウキンスキー泉）。

今より二〇〇年前にバンニナヤ河岸の溫泉を觀察したクラシエニンニコフ教授は、これらの溫泉が『異常なる音響をたてる』高さ二アルシンの噴泉であつたと記してゐる。現在では噴出せず或ひは地下深き漏斗狀の穴に沸騰してゐるか、或ひは小川の形を成して流出してゐる。或る溫泉の水溫は攝氏一〇〇度に達するも、他の溫泉に於ては漸く暖い位のものである。

若干の溫泉は、住民が治療用に利用してゐる。バラトンスキイ溫泉は既に美事なる療養地に化した。之等の溫泉は將來カムチャツカ住民の文化生活に大なる役割を演ずるであらう。

第四章　住民、その經濟及び階級構成

第一節　住民の構成及び人口

一九二六年乃至二七年の國勢調査の際、カムチャツカ州内の住民は九、六七七人を數へ、その内ペトロパウロフスク市は一、六九一人、農村人口は七、九八六人であつた。ペトロパウロフスク住民は主として露人である。民族別農村人口は左の如く分たれる。

露人	四、六八三人
カムチヤダール人	二、三六三人
ラムート人	四六九人
アレウト人	三二八人
コリャーク人	三九人
チュワネツ人	四人

移住露人は過去に於て左の如き構成を示した。勤務員即ちカムチャツカ征服及びその强化の爲派遣されたコサツク、兵士及び官吏、農業發展の爲帝政政府に依つて當地方に移住せしめられた農民及び勞働者並びに自由移民より成つてゐた。カムチャツカ、アナドゥイルスキイ、チュコツキイ地方の中で、移住民の最も多きはカムチャツカ州であつた。

カムチャツカの原住民中、露人の渡來前最も多數を占めたものはカムチヤダール人であつた。クラシェニンニコフ教授は、その人口を十八世初期に於て二萬乃至二萬五千人と算定した。露人侵略の策戰路に居住し且つ氣候最良にして自然資源に富む諸地方を占めたるカムチャツダール人に對し猛烈なる植民政策の重壓がおしかぶさつた。その結果カムチャダール人は啻に人口を激減せしのみならず、その民族性を著しく喪失し、國語を失ひ、結婚に依り混同せし露人の風習を習得した。一九二六年乃至二七年の國勢調査は『特種なる混合文化を有する特殊の雜種民』として彼等を特徴づけてゐる。純粹なカムチャダール人は、本州外のコリャーク民族管區チギリスキイ區に居住し、カムチャツカ語を話してゐるが、彼等は自らカムチャダール人と稱せず、イテリメン人と稱してゐる。その人口は凡そ八〇〇名である。カムチャダール人は露人と共に本州の三區即ちペトロパウロフスキイ、ボリシェレーツキイ及びウスチカムチヤツキー區を占める。

之れに次いで人口大なる二民族は、ラムート遊牧民及びアレウト人で、一九三二年の行政區劃に依り特殊行政區に、即ち前者はブイストリンスキイ、後者はアレ゛ツキイ區に分離された。その詳細は別章に讓る。

本州の住民移動は複雜なる跋行を呈示してゐる。革命前の境界(註)に依る舊ペトロパウロフスキイ郡に於ける三時期の人口調査を表示しよう。

（註）舊ペトロパウロフスキイ郡は、現カムチャツカ州の外に現コリャクスキイ民族管區の南方諸區を含み、全カムチャツカ半島を擁してゐた。

國勢調査年	全人口數	%
一八九七年……	八、三六六	一〇〇
一九〇八年……	七、二九六	八七
一九二六年……	一三、三一〇	一五九

引用せる諸資料は種々の方法に依り蒐集されたので、完全には比較され得ない。が併し甚だ表示的である。一八九七年乃至一九〇八年に到る一一年間に同郡の人口は一三％減少した。一九〇七年に人口調査を行つた移民局探險隊は、土民の死滅てふ事實を認めた。その資料に依れば、その當時に流行した痲疹のみで八〇〇人が減少した。之れに次ぐ一九〇八年乃至一九二六年の十八年間は逆の現象――即ち人口增加を見た。之れが原因は一九〇八年――一九一〇年に始つた漁業の大發展にありと云はねばならない。勞働者の大群がカムチャツカに押し寄せ、その一部は此處に定住した。

之れに次ぎ一九二六年以降の時代は、既に人口の大增加を示してゐる。北方委員會の資料に依れば、一九三一年度の人口は約二萬六千を數へ、即ち五年間に二倍以上增加したのである。此の增加は開始されたカムチャツカの經濟的發展及びその計畫的移民の結果である。同時に以前の地方土民の死滅過程は逆に出產率の增加過程に依り置き代へられた。セルゲーエフ氏の資料に依れば、カムチャツカの全民族は一九二六年――一九三一年間に年一乃至二・三％を上下する自然增加を見た。（註）この事は、ソウヱート政權に依りカムチャツカに實施された經濟的並びに文化的建設の結果、地方民の社會、經濟的諸條件が著しく變化したことを物語る。

（註）セルゲーエフ著、ソウヱート・カムチャツカ。

殊に猛烈に增加したのはペトロパウロフスクで、その一九三一年度人口は六〇〇〇人となつた（一九二六年に比して三五六％に增加した）。

州內に於ける定住民の外に、漁業、建築その他の產業部門に於ける勞働の爲め毎年季節勞働者が流れ込むのである。大陸より來り再び歸還する季節民人口は平均約二萬五千人を數へ、日本漁區に働く勞働者を合せれば約五萬人となる。

本州に於ける人口分布は左の如し。（註）

（註）『北方ソ聯』誌一九三二年第一號に揭載されたオルロフスキイの資料に依り、アレウト人に關してはソ聯毛皮調達業合同の資料に依り訂正を行つた。

行政區	面積（單位平方粁）	人口	一平方粁當り人口密度
ペトロパウロフスキイ區……	五二、四〇〇	一三、〇〇〇	〇・二五

ボリシェレツキイ區……	六三、〇〇〇	五、一〇〇	〇・〇八
ウスチカムチャツキイ區……	六一、〇〇〇	七、〇〇〇	〇・一二
ブイストリンスキイ民族區……	三三、〇〇〇	五五〇	〇・〇二
アレウツキイ民族區……	一、六〇〇	二四九	〇・一五
計	二一、〇〇〇	二五、八九九	〇・一二

人口密度最大なる區はペトロパウロフスキイ、アレウツキイ及びウスチカムチャツキイ區である。最小なるはブイストリンスキイ民族區である。

國勢調査の資料に依れば、住民中男は五六%、女は四四%、勞働人口（一八歳乃至五九歳の男、一六歳乃至五四歳の女）は五一%を占める。

本州住民の生活する地區は未だ組織されず且つ確定してゐない。一九三〇年までは、何等の土地割當も耕地整理も行はれなかつた。相互に遙かに離れて小村落に散在する少數の住民並びに廣大なる地域が存在する場合、土地利用統制の必要が存在しなかつたものゝ如き是認される。狩獵區は、實際の利用に於て之れに隣接し且つ之れを欲する村落に結合されてゐる。漁場は未だ嘗て分割も分配もされなかつたし、各村落は魚類の棲息する河川に於てその需要魚類を捕獲してゐる。唯一九三〇年に至り始めて、ソウェート機關が新移民の村落及びソフホーズの形成、産業企業の組織、木材調達の開始等に關聯して、カムチャツカの土地調査事業に著手した。

ペトロパウロフスク附近パラト。ウンカ村

カムチャツカ住民の經濟は殆んど調査されてゐない。最近の而して唯一の資料としては一九二六年乃至二七年の沿極地地方國勢調査の資料のみである。それは現在では既に古くなり最近の經濟狀態及び經濟的諸關係を特徴づけることは出來ない。該調査當時には、カムチャツカに於けるソウェート政權は地方經濟再建の第一歩を印したばかりであつた。地方生活の全部門に亘る巨大なる作業は、國勢調査後に展開された。新たなる國勢調査が現在行はれたならば、凡ゆる部門に於て異つた光景を見ることであらう。一九二六年乃至二七年の國勢調査の資料は、帝政政府の植民政策の影響下にあつた革命前に構成された經濟組織及び國内の社會經濟關係を反映するものと考へねばならない土民と移住民との間の經濟的相違、甚だしき經濟的分化並びに階級分化は、該政策に歸著すべきである。

それにも拘はらず一九二六年乃至二七年の國勢調査料は、當該時期にとつてその意義を有してゐた。定著民に於ける魚類及び毛皮類、遊牧民に於ける養鹿業は從前通り地方民の主要なる經濟的基底であつた。調査以來、地方民内部の社會、經濟的諸關係は、集團化並びに富農との鬪爭の結果、最も合理的に再建され始めた。調査資料の當該部分からは、最初にソヴェート權力の如何なる社會的基底がカムチャツカ國民經濟の社會的再建事業に與つて力があつたか、部分的には現在も尙力があるかといふ興味が惹起される。

半島の經濟は一聯の種々なる部門、漁業、狩獵業、農業、畜産業、養鹿業及び海獸捕獲業より成る。之れに出稼仕事運輸勤務を加へねばならない。原則として、住民は一經濟部門に限らず、多くの部門を自己の經濟に含む。カムチャツカ土民及び露人の經濟構成は、國勢調査資料に依れば左の如し。(註)

(註) 特別民族區に分割されたラムート人及びアレウト人の經濟の特質は別章に讓る。

左の諸産業が主要部門をなす世帶%

人種	世帶數	養鹿業	狩獵業	漁業	海獸捕獲業	農業	其他
カムチャツカ土人	六〇三	—	—	九・〇	六九・七	〇・九	一四・〇
露人	一、三八〇	—	—	三・〇	七・〇	—	八・四

カムチャツカ土人及び露人の經濟は相互に殆んど異らない。經濟の大部分を占める型は何れも漁業である。農業又は狩獵業が主要部内となる世帶數は甚だ少數である。各部内の總收入に對する比重、民族別左の如し。

人種	世帶數	總收入	内譯(總收入に對する%)					
			養鹿業	狩獵業	漁業	海獸捕獲業	其他	出稼仕事
カムチャツカ土人	六〇三	七三、〇四四	—	二一・一	四四・四	一・五	(註)二七・七	四・三
露人	一、三八〇	一、三六八、〇四四	—	一〇・一	四六・六	〇・九	(註)二〇・六	二一・八

(註) 主として農業より成る。

引用せる二表は、カムチャツカ經濟の綜合的特質を確認する最上のものである。後述する如くラムート人經濟に於いて此の特質は、より明確でない。經濟の綜合性は、決してカムチャツカのみの特徴ではない。それは概してソ聯北方地方の自然的諸條件の多樣性、一聯の部門の季節に依る拘束並びに市場との關係弱き爲、住民は自己の經濟に凡ゆる必要品を保障せねばならないことになる。斯かる型の經濟は、より完全に家族の勞働力を利用し、仕事のない期間を作らず、一年中に勞働力を平等に分配し、亦ある部門が災害を蒙つた場合、許多の再保險を住民に保有せしめる如き特權を有するものである。

第二節　民族區

ブイストリンスキイ特別民族區に分離されたラムート人は、遊牧、養鹿民であり、半島の中部、中央山脈の兩斜面に住居する。ラムート人中、ブイストリンスキイ民族區に編入された三七世帶、その數四六九人にして、内譯は、

男……一三九八、內勞働人口……一〇九八
女……一三〇人、內勞働人口……一二三人

以前はカムチャツカ州に於てコリャーク人も赤遊牧してゐた。養鹿者は畜群を率ゐて中央山脈を移動し、更に南方に向ひボリシャヤ河に赴く。夏季は西海岸の苔原帶に於て牧鹿し、冬季は、該時期に、より有利なる牧畜條件を具へる山間に入る。山脈及び河川上流地帶に生活するラムート人は、養鹿及び黑貂狩獵をも生業とする。是等諸地方の利用問題から、遊牧民と隣接する定著民との間に屢々紛爭が起り、殊に黑貂の價格騰貴（一九〇四年乃至一九〇五年）後その度數を增し且つ尖鋭化した

ラムート人

黑貂產地の獲得鬪爭に於て、定著民は遊牧民を壓迫し、苔原帶に於ける養鹿代を要求し、その畜群のボリシャヤ河への接近を許さず、且つ之れは實現しなかつたが、遊牧民の山間から苔原帶への完全なる後退をさへ要求した。他方、魚類の缺乏に因る定著民の飢饉當時には、行政官廳は遊牧民をして鹿群を驅つて村落に到り飢餓民を養ふ樣命令を發した。同樣の命令は日露戰爭當時、國民軍の兵站用に充つるの爲にも發せられた。

以上の事態の結果、養鹿者は大部分北方養鹿地方、現在のコリャーク民族管區へ後退することとなつた。現在、是等の紛爭は全く淸算された。

一九二六年乃至二七年の國勢調査は、養鹿・狩獵業としてラムート經濟を特徵づけてゐるが、その內八〇％は主生業として養鹿業、二〇％は狩獵業である。補助部門として、殆んど全部のラムート人（九五％）は漁業に、極く稀れに出稼仕事に從事してゐる。ラムート人經濟各部門の總收入に對する比重は、左の國勢調査資料より見る事を得。

總收入	四七、一一四留
內譯	
養鹿業	六二・六％
狩獵業	二五・二％
漁業	一一・〇％
出稼仕事	一・二％

農業は海獸捕獲業と同じく全く存在しない。その技術的裝備は原始的である。輸送具は犬及び馴鹿の橇である。捕魚用としては堤防及び魚築、狩獵用として艮及び銃を用ふ。役畜類頭數左の如し。

馬……一〇二頭
犬……三三二頭
馴鹿……一九、二七三頭

住宅は――移動性の鹿皮天幕である。木造の假小屋すら存在しない。作業用建物は――倉庫及び作業小屋より成る。

國勢調査當時に於けるラムート人の文化水準は、文字を解する人員數に依つて特徴づけられる。即ち全人口四六九人の内、文字を解するものは三〇人で、六・四%を構成する。一九三二年、ブイストリンスキイ民族區を調査した州中央執行委員會の特別探險隊の資料に依れば、ラムート人の文化狀態は現在著しく變化した。遊牧經濟の條件下に於ける學習の凡ゆる困難にも拘はらず、一九三一年乃至三二年に於ては住民の五〇%が既に學習を行つてゐた。

該探險隊の資料に依れば、ラムート婦人は生活狀態の再建に志して大活動を開始してゐる。

一九三二年に組織された地方全體會議は、菜園建設を試み意義ある結果を見た。探險隊に依つて、同地方には亦畜産組織の爲、多數の草地及び牧場が設定された。即ち遊牧狀態から定著形態へ移行に要する根據地が該地方に出來た譯である。

コマンドルスキイ群島に住むアレウト人の狀態は全く異る。アレウト人は一八二六年米露商會に依り膃肭獸及び獵虎を捕獲する爲、特別にコマンドルスキイ群島に移住せしめられた。コマンドルスキイ群島は、現在國立島嶼毛皮業を營むを以つて全アレウト人は該經濟の勤務員であり、從つてその生活手段の主要源泉は勞賃である。

國勢調査に登錄されてゐるアレウト人家族は一〇三世帶にして、總數三三四人、内譯は

男……一七六人、内勞働人口……一〇〇人
女……一五二人、〃……九一人

上述の諸條件下に於て、アレウト經濟は全く特殊の性質を有する。一〇三世帶中、一〇〇世帶の主要生産は勞賃にして、二世帶が漁業、一世帶が海獸捕獲業を營む。アレウト經濟各部門の總收入に對する割合は左の如し。

總收入	一一二、八五二留
内譯	
勞賃	六九・〇%
狩獵業	七・五%
漁業	一〇・九%
海獸捕獲業	六・三%
其他	六・三%

『其他』欄は畜産業及び菜園業より成る農業を意味する。

アレウト經濟に方ける要具

陸上輸送具(犬橇)……四三臺
海上輸送具(小舟)……二五隻

第四章　住民、その經濟及び階級構成

漁具
建網……四
手網……六八（五八九一平方米）
池……一
魚蘂……一
狩獵貝
銃……一七三
罠……六二七
役畜
馬……ナシ
大有角獸……四七頭
小畜（山羊）……八頭
（豚）……七五頭
犬……二一五頭

從つて主要生業――勤務生活の內職となるアレウト人の家內經濟は、ラムート人に於けるよりも著しく多樣である。規模は小さいが、菜園業の存在を認めることは特に重要である。菜園を有する六世帶の擁する播種總面積は〇・二一ヘクターを占める。

經營用建物は倉庫、納屋及び作業小屋である。

アレウト人の文化水準は、國勢調査資料に依つても、ラムート人に比べて著しく高い。一九二六年乃至二七年に於ける文字を解する者の數は六一％である。

アレウト人の住居
家屋……八五
冬舍及び土舍……八五
木造小屋……三

アレウト人は少數で地理的に孤立してゐるため、必然的に所謂血族結婚を行ひ、從つて有害なる結果を齎らしてゐる。

現在、ソウェート政權に依り一聯の施設が實施され、それに依つてアレウト人の生活條件は改良されねばならない。是等の諸施設は、居住條件の改良、更に合理的な成分（生肉、野菜、果實）を加味する榮養食殊に兒童の榮養の强化、アレウト人に依るその製乳業の擴張、酒精中毒に對する鬪爭、日用必需品の配給改善、醫療施設（殊に產院、托兒所）の强化を導く。この外、協同組合合同網は强化擴大し、學校、子供の家が組織される。殊に重要なことは、コマンドルスキイ群島の住民が、コリャーク人及びカムチャダール人の五十家族に依り補充されることである。之れは當に勞働力を增加するのみならず、亦地方民の衞生施設に良き影響を與へるであらう。

第三節　經濟的分化

一九二六年乃至二七年の國勢調査は、カムチャツカ州の激しい階級文化の進行中に行はれた。該調査に反映したる分化過程に關する正しき概念を得んとせば、州全體として一般的にでなく、本州に於て構成される主要なる經濟型に從つて觀察するを主要する。該調査は左の三つの型を表示する。(一)土民遊牧經濟　(二)土民定著經濟　(三)非土民定著經濟(註)之れである。

(註)　該調査の發表資料は、カムチャツカ州を特に分離することを許さない。從つて經濟的分化は、カムチャツカ州の外、コリヤークスキイ民族管區の南方の二區を含む南部カムチャツカ地方全體の資料に基いて爲された。是等諸區を含む爲、世帯數は一、六三二より二二九に增加する。是等兩區の遊牧並びに定著經濟は本質的に云へば、殆んどカムチャツカ州經濟と異るところなきを以つて、此兩區の編入は結論に影響を及ぼすところ殆んど認められない。

カムチャツカ州に於て(二)及び(三)の間の差異は著しくない爲、此の三經濟は遊牧並びに定著の二つの型に簡略せしめ得る。その分類の基底には、國勢調査と同じく總收入額が採用されてゐるが、唯異るところは該調査に於て設定された六つの經濟集團に代つて茲では三類別を採用した。

一、貧農經濟（年收入五〇〇留未滿）

二、中農經濟（年收入五〇〇留乃至二五〇〇留）

三、富農經濟（年收入二五〇〇留以上）

遊牧經濟に於ては、此の外に農業勞働者の集團が區別される。この分化過程は、左の經濟的要素に依り考察される。家族及び勞働員數、農具及び役畜、總生産物及び商品生産物並びに商品購買の諸要素に依る。

家族並びに勞働員數の統計は、各經濟型間及び夫々の經濟集團間に於て甚だしき相違を表示してゐる。

各經濟の家族構成

遊牧民の家族は、家族數及び勞働員數に於て、定著經濟の何れの集團の家族よりも二乃至三倍大きい。之れと同時に、その各集團間の分化が著しく鋭く現はれてゐる。

富農經濟は、大量の勞働力を有して著しく强力な家族を構成する。定著經濟に於ける家族は、遊牧民のそれに比べて甚だ細分されてゐるが、經濟的分化は可成り明瞭である。

こは云ふものゝ、勞働力が比較的高度に保障されてゐるにも拘はらず、未だ不充分なるを以つて、住民の上層群は外部よりの雇傭に依存する。雇傭に依存する世帯數は左の如し。

集團名	各集團に於ける世帯數	雇傭主世帯數	雇傭主世帯數の%
遊牧經濟			
貧農……	三一	二	六

中農	七一	二一	三〇
富農	六	五	八三
定著經濟			
貧農	四〇九	二	〇・五
中農	一、七六九	六八	五・〇
富農	一二一	一三	一一・〇

遊牧經濟の富農群に於ける雇傭勞動の利用は、定著經濟のそれに於けるよるも廣く實行されてゐるが、その代り後者の一年間の雇傭勞動者數は前者遊牧經濟に於けるよりも著しく多數である。その一雇傭主世帶當り雇傭人數左の如し。

	遊牧經濟	定著經濟
中農群	二・四人	八・七人
富農群	二・八人	九・三人

斯かる事態は各集團間に於ける用具所有數に本質的差違を豫定してゐる。

要具の分化

集團名	要具 陸上輸送具 要具所有世帶の%（一世帶當り總數）	水上輸送具 要具所有世帶の%（一世帶當り平底船）	水上輸送具 一世帶當り發動船	漁具 用具所有世帶の%（漁網（單位平方米））	漁具 一世帶當り漁網及び魚鑵	狩獵具 用具所有世帶の%（一世帶當り鐵數）	農具所有世帶の%
遊牧經濟							
農業勞働者	五〇（二二・〇）	—	—	五五（五）	一・〇	八〇（一・三）	—
貧農	一〇〇（一〇・〇）	—	—	七四（一〇）	二・〇	一〇〇（一・六）	—
中農	七〇（三一・〇）	四	一・〇	八四（二三）	四・〇	一〇〇（三・五）	五・〇
富農	八三（二五・〇）	—	—	八三（二八）	二・〇	一〇〇（五・五）	—
定著經濟							
貧農	六〇（一・〇）	五八	一・〇	—	〇・一	六五	一・二
中農	八三（一・五）	七二	一・一	七五（一二六）	〇・六	九七（一・六）	五三・〇
富農	八三（三四・〇）	八一	一・六（〇・二七）	八四（一七七）	一・六	九二（三・一）	七九・〇

農具は遊牧民が之れを缺くに反して定著經濟は之れを確保してゐる。

二經營型に於ける各集團間の相違は、要具所有世帶數の割合に於ても、亦要具數に於ても著しい。遊牧經濟に於て此の差違の最も著大なるは、狩獵具（腔棧銃——ウィンチスター式連發銃）にして、富農群は農業勞働者群より四倍餘も强力である。定著經濟に於て甚だ重大なりと認められることは、（一）上層群が、主要產業部門——漁業に於て下層群に對して著しき優越を與へる發動船を所有すること。（二）上層群が農業に對して附與する著大なる意

義を表示する農具所有世帯數の率に於ける各集團間の著しき差違、これらの上層群の農業に對する評價大なることを示す。

遊牧經濟の農業勞働者群の特質は、之れも亦凡ゆる種類の要具を要することである。この事は、富農、養鹿者の雇傭勞働と竝んで、農業勞働者は自己の零細農經營を有することを物語つてゐる。

役畜の分化

集團名	役畜 馬 所有世帯の%	馬 一世帯當り頭數	乳牛 所有世帯の%	乳牛 一世帯當り頭數	馴鹿 所有世帯の%	馴鹿 一世帯當り頭數	犬 所有世帯の%	犬 一世帯當り頭數
遊牧經濟								
農業勞働者……	八	一・一					四六	二七・〇
貧農……	二六	一・四			五四	五三	八七	四・一
中農……	七〇	三・二			一〇〇	一〇九	九五	九・一
富農……	一〇〇	三・三			一〇〇	一、八三二	一〇〇	一九・〇
定著經濟								
貧農……	七	一・〇	一〇	一・〇			五〇	六・三
中農……	二七	一・二	五五	一・三			七五	一一・〇
富農……	五三	一・三	八二	二・七			八二	二〇・〇

兩經濟型間の相違は、明瞭にして、即ち遊牧經濟に於て第一位を占めるのは養鹿業にして、定著經濟に於ては之れを缺く。馴鹿は大有角獸に代る。各集團の分化に關しては、役畜の凡ゆる種類に亙りて遊牧經濟は定著經濟よりも著しく鋭く現はれてゐる。兩經濟型の貧農群の有する各種の役畜を夫々單位とすれば、爾餘の集團の保有する家畜は左表の如き割合となる。

集團名	馬 遊牧經濟	馬 定著經濟	乳牛 遊牧經濟	乳牛 定著經濟	馴鹿 遊牧經濟	馴鹿 定著經濟	犬 遊牧經濟	犬 定著經濟
貧農……	一・〇	一・〇			一・〇	一・〇	一・〇	一・〇
中農……	二・三	一・二			五・八	一・三	二・二	一・七
富農……	二・四	一・三			一六・八	二・七	四・六	三・二

大有角獸の問題は特に說明を要する。上層群の有する牛頭數は比較的少い。但しその場合大量統計は甚だ特徵的且つ著しき個人的差違を隱蔽する。クラシュク教授の探險隊の（註）生活費に關する資料に記載されて富農經濟は乳牛一六頭以下の所有者を含み、總收入四、〇〇〇留以上の最上層群の所有する乳牛の平均頭數は七・四頭である。上層群の所有する犬の數は著大であつて、尙遊牧經濟にあつては運輸作業を廣汎に發展せしむべき意義ある馴鹿を有する協同組合が廣範圍に亙つて配給作業を發展せしめる迄は、交通機關に依據する上層群が、主要地點及び海外代理店より奥地への商品輸送手段を悉く自己の掌中におさめ、斯くして商業組織と下層民との間にあつて各種商品配

給の仲介者となつてゐる。この仲介業は富農群にとつて貧農經濟隷屬化の甚だ強力なる武器となるものである。

（註）クラシュク教授の探險隊は一九二八年極東移民局の依頼に依りカムチャツカ南部を調査した。

生産額の分化

集團名	各經濟生産額（單位留） 養鹿業 總額	養鹿業 販賣額	毛皮業 總額	毛皮業 販賣額	漁業 總額	漁業 販賣額	海獸捕獲業 總額	海獸捕獲業 販賣額	農業勞賃	總計
遊牧經濟										
農業勞働者……	七	一	七	一	七	一	二	一	一五	一六五
貧農……	一〇	一	八	一	一〇三	六	二	一	一	三四
中農……	八二九	〇・四	八四	二九	一八五	二	二三	一	一	三六六
富農……	三、〇四四	二・五	五五	四七	三五五	八	一八	一	三〇	四、六六六
定著經濟										
貧農……	一	一	五	三	三三	三	三	一	一五	五〇
中農……	一	一	五	九	七六	一五	一五	〇・三	四五一	二九一
富農……	一	一	一六五	二七	一、六五五	二七	二七	一	九八六	三、二四五

兩經營型の各貧農群を諸集團の單位に採れば、その關係左の如し。

集團人	收入總額 遊牧經濟	收入總額 定著經濟	養鹿收入 遊牧經濟	養鹿收入 定著經濟	毛皮收入 遊牧經濟	毛皮收入 定著經濟	漁撈收入 遊牧經濟	漁撈收入 定著經濟	農耕收入 遊牧經濟	農耕收入 定著經濟
貧農……	一	一・〇	一	一	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一	一・〇
中農……	四	三・四	五	一	三	二・六	一・八	二・四	一	四・三
富農……	一四	九・三	一九	一	五	六・五	三・五	五・一	一	九・〇

收入總額に於て、遊牧經濟の分化は定著經濟よりも遙かに著しく即ちその分化過程に於て前者は後者よりも集約的にして進歩してゐるのである。斯かる事態は、主として遊牧經濟に於て經濟的分化の主要基底を成す養鹿業に負ふところが多い。爾今の經濟部門に於ける分化は遊牧經濟より定著經濟の方が著しく、農業に於て最も甚だしく、定著經濟の主要部門たる漁業に於て最も微弱に表示せらる。

前記の事態は、河川捕獲の現體制下にある漁業は大資本投資を要求せず、同時に啻に住民の糧食及び犬の飼料のみならず、個人及び生産に於ける需要品獲得の貨幣手段を附與するを以て甚だ有利なるに依り、之れに制約される從つて貧農經濟は最も好んで自己の勞働を該經濟部門に投ずる。加之農業は漁撈と同時期に於て最大限の勞働力を要求する。自己の勞働力の大豫備軍を擁し且つ外部よりの雇傭勞働力利用の可能なる上層群は、斯かる兩部門の牴觸を避けること容易であるが、貧農群にとつては不可能である爲、漁撈を選ばざるを得ない。農業を發展せしめんとする富農群の意向は全く明瞭である。クラシュク教授探險隊に依り編成された一富農世帶の生計費は、明らかにカ

便著の りよ方地

ムチャツカ州に於て畜産業を興し且つ生産手段の確保の下に該部門が全經濟に與へる希望ある將來への見透しを指示してゐる。該生計費に依れば、乳牛八頭を所有する一世帶の總生産額は一年間に乳――七七三二瓩、純商品生産物――四四五四瓩、金額にして一二四二留を構成する。該經濟の總收入の內記左の如し(留單位)

狩獵收入	—
漁撈收入	一三七
森林收入	二五二
農耕收入	一、五九六

斯くの如く富農經濟は漁業及び狩獵業を最小限まで縮少し、殆んど完全に商品畜産業の型に再建されたのである。換言すれば國勢調査時、上層群の經濟は農場經營へ轉化せんとする傾向を暴露した。この傾向は、若しも國內市場の薄弱なる收容力並びに交通機關の殆んど全き缺除が障碍とならなかつたとすれば、遙かに大規模に實現されたであらう。

前記統計表は諸部門の商品性の順序を示してゐる。遊牧經濟に於て商品性の最大なるは狩獵業にして、その生産物の九〇%乃至それ以上が市場に進出する。養鹿業に關しては、前記の調査欄にその商品化が明示されてゐないがそれは明らかに鹿群移動に關する欄に含まれ、生畜のまゝの鹿の賣買が行はれてゐる。その販賣の規模は各集團に依り甚だ表示的である。

集團名	販賣された馴鹿(頭數)	同上金額(留)
農業勞働者	〇・六	四
貧農	四・〇	三一
中農	三三・〇	二四〇
富農	二二四・〇	一五七一

是等の數字が自らその性質を語つてゐる。それは遊牧經濟に於ける養鹿業の實際の役割を現はしてゐる。

漁業に關しては、遊牧經濟に於ては、それは市場への生産物を殆んど全然見ない。何故ならその生産物は悉く當該經濟內に於て需要されるからである。

定著經濟の各集團を通じて、商品化に於て第一位を占むるは漁業にして、第二位は狩獵業である。

商品化に表はれた經濟的分化は相當著しき程度の差違を以つて到る處に見られる。遊牧經濟に於ける上層群、定著經濟に於ては中層群も、亦その勞賃收入の著大なるは注目に値する。

この事は、國勢調査の勞賃の概念中に、上層群に於て極めて樞要なる地位を占める勤務部門が含まれてゐることで以つて說明される。富農經濟の諸成員は、國勢調査當時カムチャツカに於て大なる役割を演じてゐた個人商業並びに產業企業に於ける勤務員を獨占し、之れに依つて尙一層地方經濟に於ける自己の影響力を强化し、斯くの如き體制のまゝカムチャツカのソウヱート化に到るまでの時代を經過した。

生產手段の充分なる保障、良好且つより能力大なる生產具、他人の勞働の利用に依つて、上層群は勞働者一人當りの收入總額を激增せしめた。

集團名	遊牧經濟	定著經濟
農業勞働者	六四	—
貧農	一〇〇	三一八
中農	一九六	五四五
富農	五〇〇	九〇〇

貯蓄額に關しては、國勢調査に資料を缺くが、クラシック敎授探險隊の生計費調査に記載されてゐる。該調査に依れば、總收入四、〇〇〇留以上を有する最大富最群は經濟年度末に一世帶當り一、二六三留の資本を增加せしめたが收入五〇〇留以下の小富農群は單に七二留を增加せしめたに過ぎなかつた。

上記統計は、ソウヱート化以前のカムチャツカ經濟が經濟的分化及び階級分化の集約的過程にあつたことを示してゐる。經濟的基底が如何なるものであらうとも——遊牧經濟に於ける養鹿業、定著經濟に於ける漁業にしても——經濟的基底に於ては、一方に農業勞働者、貧農成員、他方搾取經濟の集中化が行はれていつた。斯くの如き分化は經濟の基本的部門並びに第二義的部門に於て同程度に見られるのであつて、この現象は地方經濟に於て例外なく凡ての經濟的地位の上層群への確保に導いた。

富農群は、自己の經濟の商品性を强化し、個人並びに經營の需要商品の購買を增大し以つて地方市場を自己の有利に轉回せしめた。

ソウヱート化に到るまでの富農上層の經濟的支配は、諸富農が同時に原料資源を搾取する目的を以つてカムチャツカに侵入した露國並びに外國の掠奪的商業資本の重要なる助手及び手先であつた事實に依り補足される。自己の先手としての富農上層を富まし、貧農層抑壓の可能性を自己の手中に移讓した巨大なる商業資本の壓迫は、貧農を二重に搾取し之れに依つて經濟的分化の過程を尙一層强めた。

以上はカムチャツカに於てソウヱート政權が關心を拂はねばならなかつた社會的基底に關する概念を與へるものであらう。

カムチャツカに於ける經濟的並びに文化的建設の發展に着手したソウヱート政權は、社會、經濟的生活に著大なる決定的變化を齎した。カムチャツカに於ては地方民の經濟的基底を擴大する新經濟部門が發達してゐる。現在の

經濟部門――漁業、狩獵業、農業――は技術的竝びに組織的關係に於て根本的に再建される。其際地方經濟の凡ゆる再建及び組織は、勞働の社會主義的組織化に基き實現される。主要經濟部門の發達は漁業、魚類罐詰工場、ソフホーズ、產業綜業企業、木材調達及び林產企業の如き巨大な國家產業の形態を以つて進行してゐる。是等諸企業の周圍には基幹部員豫備軍として他方民茲びに新移民の大部が集合してゐる。勞働力の季節的移入は根絶した。今迄缺けてゐた地方ソウヴィート化の支柱としてのプロレタリアの强固なる中核がカムチャツカに組織された。

之れと同時に住民の集團化及び之れに基く階級としての富農の淸算がカムチャツカに開始され且つ急テンポを以つて實現されつゝある。

第五章　漁　業

第一節　原料根據地とその利用

多種多樣なるカムチャツカ魚族資源中、產業價値の上で第一位を占めるのは鮭屬である。鮭屬は海洋に棲息し春機發動期に至ると河川を溯り產卵し、其處で產卵後死滅する特殊性を持つてゐる。但し鱒之助のみは數回產卵する第一回產卵後に於ける大量的斃死、魚卵の僅少、(鱒の魚卵は一、三三五四であるが、鮭は七萬四、鱈は五百萬四である)及び鮭屬の成長段階に於ける殘酷なる淘汰(產卵後の卵の死滅、幼魚の死滅等)に依つて鮭屬繁殖の程度が決定されるティヒー(註)の斷言する所に據れば、鱒――カムチャツカに於て鮭屬中最も普及せる魚種――の殘存率は一乃至二%以上である。故に鮭屬漁獲組織に對しては特殊の考慮を拂ひ、以つてその主要資源の涸渴を避けねばならぬ。

(註)　ティヒー著。西部カムチャツカの鱒及びその年齡「實用魚類學及び科學的營業情報部通報」一四卷　一九二六年

カムチャツカに於て大規模に鮭屬の漁獲が開始されたのは、一九〇七年に日本と漁業條約を締結した後、一九〇九年以降のことに屬する。一九〇九年より一九二二年、即ちカムチャツカにソウヴィート政權が樹立された年に至る一四

年間に、露西亞及び日本漁場に於ける鮭族の總漁獲高は八億六千二百七十萬尾で、該期間極東に於ける鮭屬の總漁獲高の七五%を構成する。即ちカムチャツカは忽ちにして極東の鮭業に於て支配的な意義を占めたのである。又該期間の年平均漁獲高は六二〇萬尾であつた。尤も右の數字は年によつて變動し、その初期に於いては三〇百萬乃至八〇百萬尾、末期に於いては三二百萬乃至一億尾に達した。

一九一三年以來、極東に於ける鱒の漁獲高は著しき變動を示し初めた。奇數年は破局的激減を示し、年々增大していつた。一九一七年よりは、カムチャツカに於ても同一現象が觀察され、特に一九二年より、それが極めて激しくなつた。即ち同年以降のカムチャツカ西海岸に於ける鱒の漁獲高は左の如くであつた。

年次	
一九一七年	二二百萬尾
一九二八年	一一
一九二九年	一五

調査者の大部分は、この現象を、鱒は生後二年目に一回產卵するが、亂獲の結果、當歲魚は全部絕滅し、從つてその繁殖過程が破壞されたものと說明してゐる。從つて茲からカムチャツカ漁業の愼重なる展開及び漁獲高の制限問題さへ叫ばれるに至つた。

一見、如何にも妥當の樣に思はるゝ右の說は、何等の科學的根據を有せず且つ幾多の事實に反するものである。漁獲減が初まつた奇數年度に於ける（ニコラーエフスク地方に於ては一九一三年、オホーツク地方に於ては一九一五年、カムチャツカ西河岸地方に於ては一九一七年）漁獲高は、その量から云へば何等特別の現象でなく且つ之れに接する偶數年度と異ることなく、而も偶數年度に於ける鱒の減收は見られなかつた。

カムチャツカに於ける鮭屬の大減收は以前にも見られた。クラシュニンニコフ教授の資料に據れば、十八世紀の第一・四半世紀即ち濫獲が問題とならなかつた時代にも起つた。この漁獲減は後に至つて消滅し、魚類回游狀態は復活した。鮭屬が繁殖し棲息する所の水文・生物學的條件に關する各調査者の指摘は、濫獲に比べることの出來ぬ程の大なる意義を有してゐるが、斯かる一般的な指摘は說明するところが殆んどなかつた。

偶數年度に關しては、各年毎に擴大する漁獲高にも拘はらず、カムチャツカ漁業が鮭屬の主要部門の利用極限にまで達してゐると云ふ結論には尙更根據を有しない。

カムチャツカを洗ふ海洋に於ける海魚に關しては、その平常の繁殖過程に就いては何等の危險も存じない。反つて、漁獲は甚だ不充分にして巨大なる天然資源に對應しないのである。併し、實際にはその推定資源量及び漁業の可能擴大限界は未だ嘗て何人に依つても確定されなかつた。重要なる漁獲對象の一つである——鰊に關しても諸調査者の意見は矛盾してゐる。コロボフは（註一）その資源を巨大なりと考へてゐる。ルサノフは、最も鰊の豐富なるカムチャツカ西海岸に於て、一九三六年——三七年には年四〇萬ツェントネルの漁獲を目標とする鰊業を發展せしめることが來るると斷言する。（註二）ブラウヂンは同誌に於て、カムチャツカ西海岸の鰊業は大なる將來性を約束するも

のではないと斷定し、その理由として每年鰊の大群が回游するものではないと指摘してゐる。是等の矛盾せる指摘は、何れも折に觸れた個々の觀察に基いてなされたもので、信憑すべき資料は唯科學的調査の結果に於てのみ得られるのである。鰊漁業は急テンポで進展しつつあるが、今日まで何等の障碍にも遭遇しない。

（註一）『極東の魚類並びに毛皮資源』集

（註二）『極東漁業』誌一九三〇年第二號

鱈に關しても類似の現象が發見される。カムチャツカは鱈の巨大なる資源を有してゐる。カムチャツカ南部に存在する所謂『ヤウィンスキイ鱈場』は面積七、七〇〇平方哩にして、その大きさは九二〇平方哩の面積を有する北米のものに次いで世界第二位に在る。豐富なる鱈場はコマンドルスキイ群島及びカムチャツカ南岸にも存在する。

カムチャツカに於ける爾餘の海魚業は發達甚だ不充分である。併しその故に資源量及び將來に於ける利用の見透しは巨大なものである。ウグヒ、ナワーガ、ヒラメ屬は漸く利用される樣になつた。所謂ウイカ（小魚の地方的變種）は西海岸に極めて豐富に棲息し、籠で捕獲することを得。暴風雨の度每に無數のウイカは海岸へ打上げられ、山の樣に堆積する。

最近益々意義を擴大し始めたのは蟹漁業である。最も蟹を豐富に產する地方はカムチャツカ西海岸の北部、ハイリュゾワ川地方であるが、亦東西兩海岸地方にも棲息す。

各地方別に主要漁獲物の漁獲高を檢討すると、カムチャツカ全體は、之を同一の生產力を有すると見做すことは出來ない。ソウヴィート政權樹立前に於ける東西兩海岸の漁獲高の割合は左の如くであつた。（%）

	鮭鱒屬	鰊	鱈
西海岸地方	八七・〇	三三・八	一四
東海岸地方	一三・〇	六六・二	八六

西海岸地方は唯鰊漁業に於て東海岸地方に第一位を讓るのみで、鮭屬漁獲總額の九〇%迄を占めてゐる。乍併一九二九年の資料に依れば、此の東海岸地方の優越性も消失し兩地方の關係は左の如きものとなる（%）

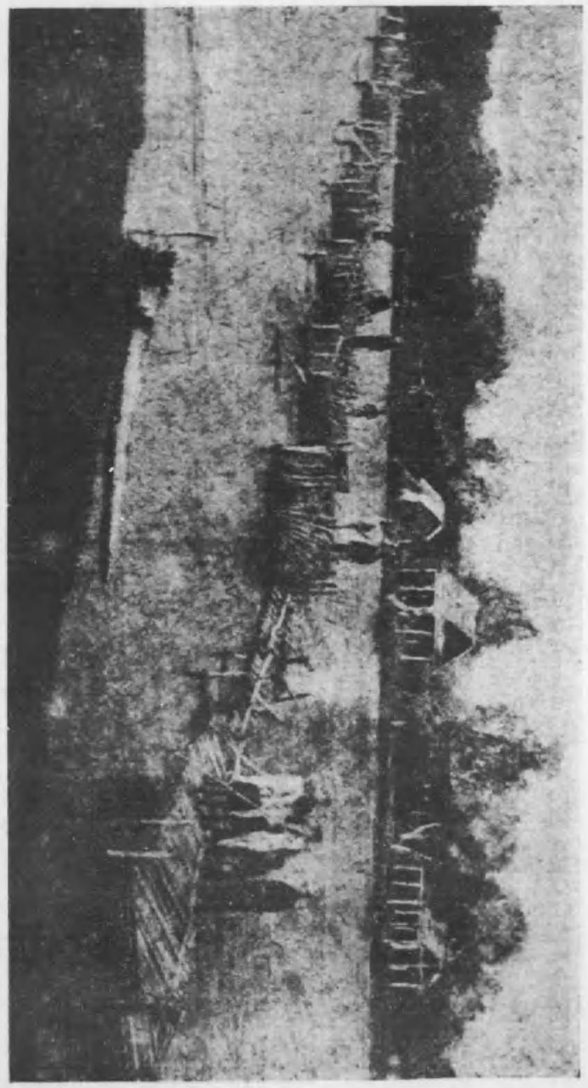
	鮭鱒	鰊	鱈
西海岸地方	七〇	九六	一四
東海岸地方	三〇	四	八六

斯くの如く東海岸地方は鱈の漁獲高に於てのみ第一位を保持してゐるが、恐らく之は一時的に過ぎないであらう。蓋し基本的な鱈資源は西海岸地方に集中されてゐるからである。西海岸地方に於ては、漁業價値上大なる地位を占めるはその南半である。勞力、物資、漁業根據地、交通路等の如き諸施設の計畫化の際には、各地方別の漁獲高割合を參酌せねばならない。

カムチャツカに於ける魚族資源は、地方民、協同組合聯合、ソウヴィート及び日本の國營並びに個人企業に依つて利用されてゐる。

住民は殆んど專ら魚類が產卵する爲河川へ溯行する時に之を漁獲する。海上漁撈は高價なる特別の施設（大型船

船及び漁網）を要するを以つて、住民は殆んど之に從事してゐない。唯最近に到つて河川漁撈が衰微したため、沿岸漁撈が住民及び協同組合聯合の注意を惹き始めた。



ヨリャツコエ村、アワチャ湾に於ける鮭捕獲の魚網

地方民が使用してゐる漁業の技術的施設は極めて原始的である。漁船の基幹をなすものは、國勢調査報告書中に於て小型船舶の範疇に入る磯舟、バイダールカ、端艇及び大型船舶に属する三羽船、バルカス艇、長艇より成る。

カムチャツカ州住民の所有船舶總類は左の如くである。

小型船舶	一五五一隻
大型船舶	四六隻

本州住民の所有に属する汽船並びに發動船は、國勢調査に依れば總計僅かに一九隻であつた。漁具は、建網、引網、堰止網及び魚簗でその數量は左の如くである。

建網	三一、〇一〇平方米
引網	一六五、三九五〃
堰止網	五三七個
魚簗	五〇三〃

最も普及せるは堰止網即ち河川を區切り魚類の通路に罠を設ける方法で、最も原始的な漁撈方法である。此の方法は濫獲のきらひありとして地方執行委員會の特別規定に依つて禁止されたが、監督不行屆の爲現在に到るまで、住民はこの方法を實施してゐる。

本州地方民に依る漁獲高は、國勢調査の資料に依れば左の如くである。

地方別	河川漁獲高（單位千尾）							海上漁獲高		
	鱒之助及シヨムガ鮭	鮭	紅鮭	銀鮭	鱒	オシヨロコマ	計	千鱈	鰊ツェント ネル	その他ツェント ネル
ボリシェレツキイ	一八・九	二四六・九	一五五・〇	四〇七・一	一五、〇六二・二	四三三・八	一六、三三三・九	一・〇	一・五五	—
ペトロパウロフスキイ	二・四四	二三・七	五四三・七	一五二・六	一、三二一・九	二六・三	二、一〇一・五五	一一・三	二三・三	二四四・三
ウスチカムチャツキイ	二四・六	一六六・四四	一、四四一・〇	六五五・四四	三・三	四九・三	二、〇九九・九	—	—	—
計	四五五・九	五七〇・〇	二、二六七・七	九六六・一	一六、二八七・四四	五九九・三	二〇、五四五・三	三・三	二四四・八	二四四・三

即ち、河川漁業が斷然壓倒的である。漁獲の對象は鮭屬にして、その內鱒（價値最小なる魚種類）が殆んど八〇%を占める。海上漁業は規模小にして顯著なる役割を演じない。

各地方の有する漁業的意義は全く一樣でない。本州に於ける漁獲總高の約八〇%はボリシェレツキイ區が占め、そのうち鱈は總高の九二%を占める。ペトロパウロフスキイ及びウスチカムチャツキイ區は殆んど等しく各々本州漁獲總高の一〇%を占め、且つ第一位を占めるは同じく鱒、第二位は紅鮭（鮭屬中最高價の一種）である。海上漁業は殆んど一〇〇%がペトロパウロフスキイ區に集中される。漁場はアワチンスカヤ灣で魚種は鰊及び鱈である。

住民一人當りの漁獲高は左の如くである。

ボリシェレツキイ區……三二六五尾
ペトロパウロフスキイ區……一六一尾
ウスチカムチャツキイ區……二九七尾

右の數字を見れば、ボリシェレツキイ區の有する漁業價値が明白に窺はれる。住民は當に自家用として漁撈に從事する漁獲物のみならず、販賣可能なる地方に於ては、營業用としても漁撈を行ふ。國勢調査資料に基いては、各地方別の魚類販賣數量を確定する事は出來ないが、その賣上總額は分明する。即ち全カムチャツカ南部地方は五一三、四〇〇留を示し、そのうち四六%は國營及び協同組合企業に賣却したものである。漁業に於て商品性最大なるはボリシェレツキイ區及び一般に西海岸地方である。

適當な資料を缺くため、現在地方民の漁撈狀態を確かめることは困難である。然し、現に豫定されてゐる北方諸地方に於ける第二回國勢調査は、最近年度に於けるカムチ ツカに於けるソウェート建設の一聯の本質的進歩を示すものと信じて疑はない。今日でも既に若干の傾向は認め得る。

右の傾向とは、當地方の住民が、漁業重心を河川より海洋に移行せしめんと努力しつゝあることである。既に西海岸の許多の村落に於ては、河川は主として魚族の產卵所として海岸地帶に集中せしめんとする目的を以つて、河岸から海岸への移住を問題視し始めた。斯かる傾向は全面的な支持を要するが、之れが實現には政府側より左の如き支持を要する。（一）海上漁撈の諸條件に適應する浮送機關及び漁具並びに條約水域中の海面漁區を住民に保證すること。（二）現在の諸小村落は勞働力の量よりして海面漁撈の如き一層複雜なる作業を成就すること。不可能なるを以つて住民の勞働人口を强化すること。

カムチャツカ州の漁業に巨大なる役割を演じ始めたのは、協同組合聯合である。その漁獲高は一九三一年には一九五、〇〇〇ツェントネル、一九三二年には二〇二、〇〇〇ツェントネルを示した。該部門に於て大部を占めるは鮭屬（一九三一年度七〇％、一九三二年度八〇％）であるが、それと竝んで鰊、鱈、チャスチク（雜魚）、ヒラメ屬、ナワーが等の爾餘の魚種も意義を確保した。斯くして協同組合聯合は、カムチャツカ魚類資源の、より廣汎にして全面的なる利用の途を辿りつゝある。而して魚獲物の大部分は之を加工の爲國營企業に讓渡する。一九三二年度に於ける魚獲高の內、協同組合聯合自體にて加工したるは一二％で、爾餘はカムチャツカ株式會社に移讓した。

協同組合聯合の浮送機關所有數

區名	カッター	カハサキ	三羽船	漁獵船 河川用	漁獵船 海上用	平底船	總計
ボリシェレツキイ	三	三	五六	一五	一	一六五	二四二
ペトロパウロフスキイ	一	四	一四	三	八	三二	六二
ウスチカムチヤツキイ	二	一	四	一	二	二一七	二二六
計	六	八	七四	一八	一〇	四一四	五三〇

各地方別の漁業船舶所有數は、協同組合聯合の部門に於てもボリシェレツキイ區が第一位を占め、ペトロパフロフスキイ區が最後に位する。

中央官廳の諸資料に依つて、カムチャツカ州に於ける國營機關の漁獲高を分離することは困難である。下記の統計は、カムチャツカ州のみならず、チュコツキイ及びコリャクスキイ民族管區をも含む。乍併該二管區のカムチャツカ漁業に於て演ずる役割は著大でないことを考へておかねばならぬ。カムチェツカ州は該地方全體の漁獲高の八〇％以上を占める。

全ソ聯並び極東地方の漁獲高に對するカムチャツカ漁業の占める割合は左の如くである。

年次	カムチャツカ漁業の比重％	
	ソ聯に對する	極東地方に對する
一九三〇年	六・二	二三・六
一九三一年	三・九	一七・〇
一九三二年	五・五	一八・五

前記統計を見れば、カムチャツカ漁業の割合は比較にならぬ程小さい。その海岸線の著大なる延長及び莫大なる魚族資源はカムチャツカの比重を著大ならしめるものである。

カムチャツカ株式會社の資料に依れば、第一次五ヶ年計畫年度內に於けるソウェート側經營漁區に於ける漁獲高は左の如し（單位千ツェントネル）

魚種	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	總計
一、川に溯る鮭屬……内譯	一九九・四	一八九・七	四四二・九	三五五・四	六三三・七	一、八二一・一
鮭……五八・五		九七・五	一三六・七	一二五・九	一一二・五	五三一・一
紅鮭……七八・五		五〇・六	六七・六	五九・七	五〇・四	三〇六・八
鱒……四八・〇		二四・一	二〇七・四	一四四・七	四五五・〇	八七九・二
其他……一四・四		一七・五	三一・二	二五・一	一五・四	一〇四・〇
二、海魚……三〇・三		七七・四	一八四・九	二二五・二	二四七・五	七六五・八
内譯						
鰊……一		一五・六	三八・〇	七三・〇	九三・二	二一九・八
鱈……九・九		二八・六	一一〇・四	七九・八	九二・七	三二一・四
蟹（註）……二〇・四		三三・二	一四・六	三〇・六	二五・八	一二四・六
其他……一		一	二一・九	四二・三	三五・八	一〇〇・〇
總計……二二九・七		二六七・八	六二七・八	五八一・一	八八一・二	二、五八六・九

註　此の數字は唯カムチャツカ株式會社の海岸魚獲高のみにして海洋に於ける捕蟹網による魚獲高を含まず。

漁獲高中には、カムチャツカ株式會社の國營諸企業による漁獲及び漁業を營む協同組合並びに住民より買上げたものを含む。右の數字を觀察すれば、漁獲高の急速なる増大が見られる。今、五ヶ年計畫の第一年度の漁獲高を一〇〇とすれば、各年度の漁獲高は左の如し。

年次	
一九二九年	一二〇
一九三〇年	二八二
一九三一年	二六一
一九三二年	三九八
一九三三年	三九三

即ち五ヶ年計畫最終年度に於ける漁獲高は初年度に比して四倍に増大した。例外は、上述の諸原因の結果、その漁獲高が偶數の前年に比べて僅かに二〇％しか増加しなかつた奇數の一九二九年及び減收を見た一九三一年のみである。乍併、之れに次ぐ偶數年は忽ちにして此の漁獲減を挽回し、奇數年の減收を塡補して餘りある程巨大なる増加を見た。乍併尙奇數年は減收を見るとは雖も、一九一三年乃至一九二五年に亙り極東に於て見られた樣な破局は存在しない。第二次五ヶ年計畫の第一年である奇數年の一九三三年は偶數の前年と同額の漁獲高を示し、而も一九三三年に於ては、奇數年に共通の減收に加ふるに、カムチャツカ西海岸の漁獲を激減せしめた繼續的な猛烈なる暴風雨が否定的契機となつた。

魚類漁獲高の年々の増大は、カムチャツカに於ける魚族資源の狀況が、悲觀的結論の根據を成すものでないと云ふ

良き證據となる。先行する永年の濫獲にも拘はらず、ソウヱート政權は魚類漁獲高の鞏固なる增收を獲得したのであつた。

漁業地方としてのカムチャツカの實際的價値は個々の魚類の漁獲高を檢討した曉に於てのみ始めて會得される。前表の示す如く、カムチャツカ漁業の中心は河川を溯行する鮭屬に在る。海魚は漁獲高から云へば二義的である。漁獲總高に對する此等魚類の漁獲高の比率は左の如し（%）

魚種	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	平均
鮭屬……	八四	七一	七一	六一	七一	七〇
海魚……	一六	二九	二九	三九	二九	三〇

鮭屬の不漁であつた一九三一年を除けば、各年に於ける漁獲高の三分の二以上は鮭屬で、蟹を含む爾餘の全魚種は三分の一以下を占める。斯かる現象は、極東一般が、ソ聯に於ける鮭漁の獨占者（ソ聯漁獲總高の九五%）である限り明瞭なことである。カムチャツカ漁業の全ソ聯邦鮭業に對する割合を引用しよう。（%）

年次	カムチャツカの割合%	
	ソ聯に對する	極東地方に對する
一九三〇年……	二九	二五
一九三一年……	二一	二三
一九三二年……	三〇	三一

更に以前に於ては、全漁獲高に對する鮭屬の優勢は更に鋭い形で現はれてゐた。一九三二年、全ソ聯狩獵中央部の資料に依れば、漁撈協同組合に於る鮭屬は現在に於いても尙總漁獲高の八〇%を占め、地方民の漁業にあつては一〇〇%近くを占めてゐる。

依然として鮭屬の壓倒的支配にも拘らず、カムチャツカ漁業は過去の五ヶ年計畫に於て重要なる移行を見た。その性質は鮭屬及び海魚の各漁獲高の增加のテンポを示す次表に依つて明瞭である。

魚類	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年
鮭屬……	一〇〇	九五	二二四	一七八	三一七
海魚……	一〇〇	二五〇	六〇〇	七五二	八四二

斯くして海上漁業の增大のテンポは五ヶ年計畫末に到り鮭業の增大のテンポの殆んど三倍に達した。海上漁業はカムチャツカ漁業に於て益々大なる部分を獲得し始めた。

鮭屬の總漁獲高（五ヶ年計畫の合計）中、鮭、紅鮭及び鱒の漁獲高は合せて九二%を占める（爾餘の魚種は即ち銀鮭、鱈之助及びシュムガは著大なる意義を有せず）。併し是等の主要なる三魚種も亦全然一樣なる比重ではない。

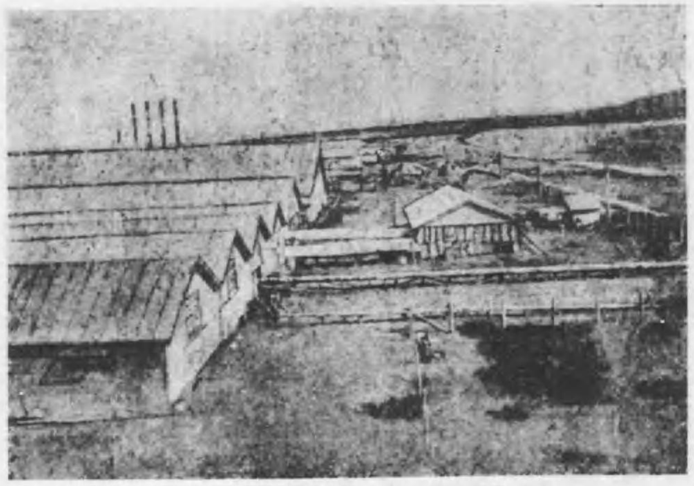
鱒は四八%、紅鮭は一七%、鮭は二九%を占める。年次別漁獲高の増加テンポは尙更特徴的である。

魚類	一九二八年の漁獲高	一九二八年に對する漁獲高に對する增加%			
		一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年
鮭	一〇〇	一六五	二三六	二二一	一九四
紅鮭	一〇〇	六五	八六	七六	六四
鱒	一〇〇	五〇	四四三	三〇一	九四八

即ち鮭の漁獲高は、五ヶ年計畫末に倍加した。紅鮭は著しく減少し、唯鱒のみがその固有の奇數年に於ける亂脈を示しつゝ殆んど十倍に增加した。斯してカムチャツカに於ける鮭業の增大は主として鱒即ち鮭屬中最低級なる魚種に依存するものである。紅鮭に關しては現在までに何等か重大にして一定の減收は見られない。從つて紅鮭を大量に漁獲するウスチカムチャツキイ區に於て觀察される紅鮭の漁獲減は、第一に前述した如き巨大なる障碍物の助を借りて建網を以つて濫獲する結果に外ならない。何故なら右の魚類は嘗に魚類の河川への溯行を碍げるのみならず、その群來系統に重大なる害を及ぼすから。

カムチャツカに於ける海上漁業の主要對象は鰊、鱈及び蟹である。

一九二七年度に於ける鰊の漁獲高は總計一五、六〇〇ツェントネルに過ぎなかつた。一九二九年より、その漁獲高は急增し始め、一九三二年には九三二〇〇ツェントネル即ち六倍に增加した。第一次五ヶ年計畫年度中に於ける鱈



海上より見たウスチカムチャツキイ第1魚類纏詰工場

業は更に大なる進展を示し、その漁獲高は十倍に達した。極東に於ける鰊の漁獲高は最近年間に於て著しく巨額に達した（一九三二年度には全ソ聯漁獲高の五二・六%）が、カムチャツカの占める分は極めて小さかつた。

年次	カムチャツカの比重	
	ソ聯に對する	極東地方に對する
一九三〇年	二・八	六・五
一九三一年	一・八	三・九
一九三二年	二・二	四・三

鰊の漁撈は殆んど全部極東地方の南方海面に於て行はれる。全極東地方の鰊漁業に對してカムチャツカの演ずる役割は極めて貧弱なものである。このことは、カムチャツカがその巨大なる魚類資源を全然利用してゐないことを物語るものである。

鱈に關しては事態が異る。

年次	カムチャツカの比重	
	全ソ聯に對する	極東地方に對する
一九三〇年	一五・五	六四・一
一九三一年	一四・二	六四・八
一九三二年	一五・一	五八・七

即ち鱈の漁獲高に於ては、カムチャツカは全極東地方漁獲高の約六〇%、全ソ聯に對する一五%を占め、巨大なる意義を有する。にも拘はらずカムチャツカの有する鱈の莫大なる資源は殆んど利用されてゐない。

カムチャツカに於ける蟹漁業は極東地方總漁獲高の一〇〇%を獨占してゐる。蟹漁業の發展テンポは(露人及び日本人)左の數字に依つて推測出來る。一九二〇年度に於ける蟹の漁獲高は(罐詰として)五千箱であつたが、一九二九年には五七萬六千箱、即ち一一五倍の增加を示した。

現有の蟹資源は將來に於ける漁獲高の增加を可能ならしむ。乍併ソヴェート側の漁業機關はその漁撈作業を全面、的に發展せしめ得ず、現在は單に資源のほんの小部分を利用するのみで、大部分は日本人に依つて開發されてゐる。

一九三〇年よりカムチャツカに於て開始された爾餘の海上漁業は、カムチャツカ株式會社の資料に依れば、三年間に一〇萬ツェントネル、漁業本部の資料に依れば、八萬八千ツェントネルを漁獲した。此の漁獲中には、大小の雜魚及びヒラメ屬が含まれてゐる。本漁業の比重は極めて小さく、一九三二年度のそれは僅かに全ソ聯漁獲高の〇・八%を占めるに過ぎない。例外はヒラメ屬で、その比重は全ソ聯漁獲高の六%、全極東地方の七%を占める。

カムチャツカに於ける漁業は過去、部分的には第一次五ヶ年計畫に於て決定された限りでは、その總漁獲高及び漁獲物の組成に關しては、充分の發展を示したものゝ、考へることは全然不可能である。

カムチャツカ漁業につて、第一次五ヶ年計畫はその根本的改造期であつた。左表に示す如く該期間には巨大なる數字的發展がなされた。

區名	一九二八年	一九三二年
漁區	四	一五
鮭鱒海面條約漁區	一五	六五
鮭鱒海面條約外漁區	ナシ	一七
鮭鱒河川漁區	一〇	一三
蟹漁區	ナシ	一一
鱈場	ナシ	五
鰊場	ナシ	三

カムチャツカに於ける漁業は最近許多の新漁區を獲得した。條約水域に於ける沿岸漁撈に關して、國營漁業は一九

三二年には、日本との漁業條約に依り定められた二〇%の漁獲標準高を完全に遂行した。深海漁業發展の目的に添ふため數ヶ所の鱈及び鰊漁場が創設された。海上漁撈の魚類は漁撈協同組合及び地方民の生産計畫中に含まれてゐる。

五ヶ年計畫は、河川及び沿岸漁撈から深海漁撈への、單一なる鮭漁業から巨大なる海洋資源の全面的利用への、漁撈對象の最大限の增大への移行の意味で、漁業の質的改造を豫定した。この方向は全く正しいと見做さねばならぬ。何故ならカムチャツカに於ける漁業生産物を量的にも質的にも增大する可能性を約束するからである。併し是等の企圖は完全には實行されなかつた。

將來に於けるカムチャツカ漁業の發展性を評價する場合には、魚類資源は、ソウヱート側漁業機關と竝んで日本の漁業企業象に依つても、亦利用されると云ふことを考慮しなければならない。

現在、日本との關係は一九二八年の漁業條約及び其後締結された諸協約に依つて統制されてゐる。極東沿岸は河口及び港灣を除けば條約水域に包含され、全沿岸は漁區に細分される。條約水域に對して確定された、總漁獲高の二〇%以内の漁獲高を有する漁區の一部は入札なくしてソウヱート國營企業の利用に委ねられる。現に當該地方に住居しある者のみならず向後居住すべき漁撈和方民を保證する爲、ソ聯政府は一定期間を限り日本人の利用に委せない漁區を入札なしに之れを讓渡すべき權利を保留してゐる。爾餘の大部分の漁區は入札を行ひ、協同組合、ソウヱート側個人漁業家、日本漁業家及び上述の制度に依つて入札なくして漁區を獲得しない地方民が競買者となり得る。ソウヱート國營機關は特別の秩序に依り漁區を保障されてゐる限り入札に參加せず、亦入札に依り個人及び企業の獲得したる漁區の利用を行はない。

條約締結當時及びその直後に於ける極東地方の魚類資源の利用に於ける各部門の相對關係は左の如し（各年の總額に對する%）

部門名	一九二八年	一九二九年
國營	六・七	一七・九
協同組合	—	〇・九
個人經營者	一〇・〇	一二・九
ソウヱート側總計	一七・〇	三一・七
日本側統計	八三・〇	六八・三

一九二九年度には、極東地方の魚族資源利用に於けるソウヱート側の參加に一大飛躍が生じた。このことは該年度に於けるソウヱート國營機關の著しき活動の結果に外ならない。現在該機關は既にカムチャツカ協定水域内に於ては完全に標準高の二〇%を利用してゐる。加之協同組合も亦同地方向に向けその作業を開始した。

協定水域内に於けるソウヱート漁業將來の發展には、漁業條約の範圍内に於いて若干の進路が存在してゐる。

第一に、總漁獲高の二〇％の利用に關しては條約の最終議定書第二項に基いて、標準漁獲高及び入札を經ずして國營漁業機關の經營に依托さるべき漁區數の增加を計ることである。即ち第二項には、ソ聯政府の要求によつて條約締結者は前述の件に就き交渉するものと、規定してある。

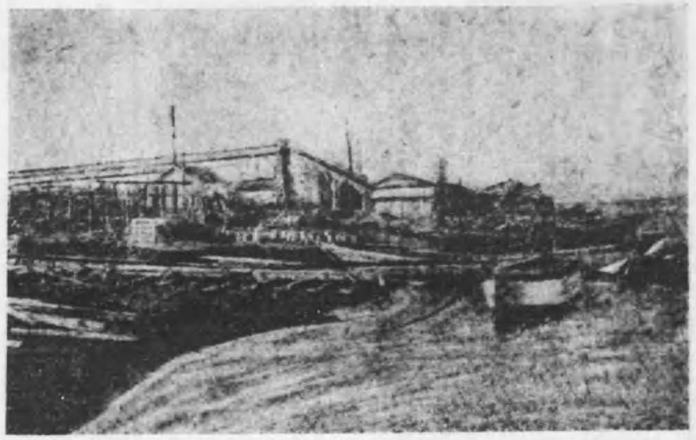
第二に、議定書Aの第十九條には、『地方農民及び漁撈民は一般手續による入札に依つて自由に漁區を賃借することを得る』と規定してある。然るに、地方民は河川漁區に於て漁撈に從事して居るため、今日までこの權利を殆んど利用しなかつた。乍併現在、河川を產卵所として保有し、漁撈を海上に移行せしめんとする計畫に關聯して該權利の利用は合目的にして必然のことゝなつた。

第三に、カムチャツカへの移民は當地方に新らたなる漁撈人口を加へ、此等の移民は將來大規模なる漁業コルホーズに包含せられ、既存農漁民と共に一般規定に依つて協定水域內の一定部分の漁區を取得し得る。

蟹漁業の現狀は特に注目しなければならない。ソヴェート側の蟹漁獲高は前表の如く明らかに微少である。日本の蟹罐詰製造業が創設以來二年に亙る歷史を有するに反して、ソヴェート側は始めたばかりである。併し現段階に於ても、該部門は日本の蟹罐製造業者同盟の注目と不滿とを大いに惹起してゐる。カムチャツカ株式會社が、陸岸の蟹罐製造工場に對して、蟹工船の有する著しき合目的性と優越性を考慮して、一九三〇年度內に十二隻の蟹工船建造を計畫した時、日本漁業家は一九二九年に既に十八隻の工船を擁して居たにも拘らず、このカムチャツカ株式會社の計畫は彼等の間及びこれに奉仕する新聞紙上に大なる不安を惹起し、日本政府當局に對し許多の抗議を申込んだ。日本の魚業家は、競爭者たるソヴェート蟹漁業を許可することなく、極東地方の蟹資源利用權の獨占を保有するため、政府に對しては種々の對策を採用する樣主張した。斯かる對策の一方策として、例へばソヴェート側蟹工船に必要とする日本人漁夫の雇傭を禁示する樣勸告したのであつた。ソヴェート蟹漁業に反對行動を採る動因として、彼等はソヴェート蟹工業の發達に伴ひ極東地方の蟹資源が絕滅する脅ありとの議論を進めたのである。

（註）該問題に關する興味ある資料は『極東の經濟生活』誌一九三〇年第一、二、三號のカ・エフの論文參照。

蟹漁業を日本漁業家の獨占的利用に放置して置くことが、極東地方の蟹資源を保有するに最良なる保證であることは云ひ難い。之れが根據ある一例として、地方漁業史殊に內亂と外國武力干涉の時代に於ける諸事實が之れを物語つてゐる。



ウスチカムチャツキイ第1魚類罐詰製造工場、河川側より臨む。

第二節　魚類加工業

カムチャツカに於ける魚類罐詰製造業の發達は一九一〇年以降に屬し、爾後左表に見る如く急テンポに發展した。

年次	罐詰工場の生産總額	内譯 露人	内譯 日本人
一九一〇年	一〇	九・三	〇・七
一九一七年	五一〇	二三九・〇	二七一・〇

前表の如く、革命當時には罐詰業は五〇倍に增大し、總額に對する露人罐詰業の割合は四六・九%、日本人側の合計は五三・一%であつた。(註)爾後魚類罐詰製造業の生産總額は益々增加したが、各部門の關係は著しく變化した。

(註)『極東の經濟生活』誌一九三〇年一、二、三號

年次	生産總額	内譯 露人	内譯 日本人
一九一九年	七四三・九	八二・二	六六一・七
一九二〇年	五八〇・四	四五・九	五三四・五
一九二一年	七一〇・九	七・五	七〇三・四

一九二二年、即ち極東にソウヱート政權が樹立された當時は、露人罐詰製造業は事實上清算されたと考へねばならない。ソウヱート政權は新たに罐詰製造業を創設せねばならなかつた。一九二七年、カムチャツカ河々口に最初の國營魚類罐詰工場が建設された。爾後工場數は急增し始めた。現在國營漁業はカムチャツカ州に十八工場を有しその內容は左の如し。

工場所在地	工場の性質	工場所在地	工場の性質
西海岸地方		(九) オゼールノイ	魚罐
(一) プティチイ・オーストロフ	蟹罐	(一〇) ゴルイギンスキイ	魚
(二) イーチャ	蟹、魚罐	(一一) コルパコフスキイ	同
(三) クルトゴーロウヱ	魚罐	東海岸地方	
(四) 同	蟹罐	(一二) ジュパノフスキイ	魚、蟹罐
(五) キフチク	蟹、魚罐	(一三) ウスチカムチャツキイ	魚罐
(六) ウスチボリシェレツキイ	魚罐	(一四) 同	同
(七) 同	同	(一五) 同	同
(八) ミトグスキイ	魚、蟹罐		

是等の工場の一部分は、廢物利用設備を有し、それは事實上獨立工場の型態を具備してゐる。此の外に五隻の蟹工船が在る。

魚類罐詰製造業の發達と竝びソウェート漁業は爾餘の方面にも、その活動を發展せしめた。第一次五ヶ年計畫に於ける實績は左表の如くである。

生産物	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	計
魚類罐詰(千箱)	一七三・五	一八〇・六	三六〇・〇	三〇三・六	三一七・九	二三四・六
蟹罐詰(千箱)	二三・八	二六・〇	四三・五	一七・七	二三・五	一二三・五
鹽鮭(千ツェントネル)	六三・九	七七・四	一九一・一	一四八・九	三〇七・六	七八・九
生鮭(同　　)	四四・〇	二八・〇	一四・〇	一七・四	一〇・三	一二・七
鱒(同　　)	—	一四・四	三六・〇	四九・三	六五・〇	一六四・七
鯉(同　　)	二・七	三・九	四四・三	三七・九	三一・七	二三〇・五
魚卵(同　　)	二・三	四・〇	八・七	七・四	一・〇	三三・四
技術油(ツェントネル)	〇・六	〇・九	二・〇	一・三	一・一	五・八
醫療油(同　　)	—	〇・〇四	〇・四	〇・一	〇・七	一・三
魚糟及び魚粉	一・三	二・〇	八・三	七・四	六・六	二五・六
其他	一・九	〇・三	六・七	三〇・九	二〇・三	六〇・一
ツェントネルに換算せる生産總額(千ツェントネル)	一五九・四	一八四・三	四一・八	三六二・六	五三〇・九	一、六六〇・〇
工場原價に據る生産品價格(千圓)	五、四二四・五	八、四四八・二	一九、六六二・四	二〇、七一七・四	五一、九四三・二	一〇、六一九五・七

カムチャツカに於けるソウェート鮭業の生産總額は五年間に十倍に増加し、現在極東地方竝びに全ソ聯經濟に於て極めて重大な貢献を爲してゐる。

この極めて巨額の増加は、全生産品に亙る。技術用竝びに醫療用魚油、魚糟及び魚粉の如き魚類廢物の利用の一聯の新企業が發展した。罐詰業の増大は注目すべき殊に重大なものである。紅鮭の罐詰を竝んでカムチャツカに殊に重大なる資源を有する鱒が罐詰に加工されるに到つた。鱒詰製造業は左の如し。(千ツェントネル單位)

年次	
一九二八年	〇・一
一九二九年	一六・〇
一九三〇年	九五・〇
一九三一年	九四・〇
一九三二年	一七五・〇

鮭屬中最も高價なる鱒之助も亦罐詰に加工し始めた。但し現在は小額にして一九三二年度は三、七〇〇ツェントネルである。

斯かる急増にも拘はらず、生魚の加工は、尙その巨大なる捕獲高の増加に相應しないことを認めぬばならぬ。先づ第一に鮭屬に關してさう言へる。その罐詰加工は魚類の價格を數倍騰貴せしめた。之れと逆に、魚類の風味及び價値を著もく低下せしめた所の最も不良なる利用形態は鹽藏法殊に所謂日本式鹽藏法である。(註) 然るに表に見る

ウスチカムチャツキイ第1魚類罐詰工場。コンウェイヤー

如く、明らかに鮭屬の鹽藏罐詰加工より遙かに大なる絶對的增加を示してゐる。即ち罐詰業が八三%を增加する內に鹽藏法は五倍に增大した。

（註）露西亞式鹽藏法とは、生魚を叮寧に洗淨し、魚體の內外に鹽を充分散布し、鹽を揩き樽に詰め密閉すること。日本式鹽藏法とは粗雜に洗淨し、鹽を散布し、直接地上に積上げる。

鮭族の極めて有利なる利用方法たる冷凍魚の比重は尙更低下した。即ち一九二八年には全魚漁高の二六%、一九二九年には一六%、一九三〇年には四%、一九三一年には六%、一九三二年には二%に低下した。露西亞式鹽藏法と日本式鹽藏法との比率も亦不利に陷つた。露西亞式鹽藏法は最も良く、夫々獨特の風味を保有し、價値ある生產品を作つてゐたが、一九三二年に於いては僅かに一九%に過ぎず、然るに日本式鹽藏法は八一%を占めてゐた。

カムチャツカに於けるソヴェート政權の眼前には——漁獲魚類の最大限有利且つ合理的なる利用を保障する水準に、魚類加工業を引上げるべき課題が存在してゐる。この點に關して第一次五ケ年計畫年度內にカムチャツカに於て爲されたる事は、革命前に比べて巨步を進めた。魚類罐詰製造業は本質的に新らたに組織された。魚類罐詰製造工場網は基本的漁業地帶全部を網羅し、而も質的に即ち工場設備及び生產技術に於て工場は極めて高度の發達を遂げた。工場は、魚類の海岸より工場への運搬時より始めて汽船に積載さる爲生產品を逆に工場より海岸へ運搬する過程に到る同過程に於て、技術化された高度の產業企業を成してゐる。

全生產は最新技術の下に組織されてゐる。所謂『鐵の支那人』は魚類の洗淨並びに切開の作業を機械化し、電氣運搬車は工場內部の運搬に役立ち、廢物利用工場は以前には土中に埋めた魚罐製造業の廢物を魚槽及び魚油の如き價値ある生產品に轉化した。ソヴェート魚罐製造工場は、老朽せる技術裝置を有する隣接の日本側諸工場と著しき對照を爲してゐる。

第六章　海獸捕獲業

ベーリング海及びオホーツク海に於ける海獸は、革命前に於て商工業資本の殘酷なる强奪的搾取の對象であつた企業家の注意は主として高價なる生産品を齎らす鯨及び海獸の如き巨大なる海獸の捕獲に向けられた。ひとり米國企業家のみにても、一八四七年乃至一八六一年間に一億三千萬弗による鯨鬚及び鯨油をオホーツク海から捕獲したにも拘はらず捕鯨業は現在も尙その意義を全く失つてはゐない。極東漁業海獸狩獵廳は、基本資源に觸れる危險を冒さずして、一九三一年度に於ける極東地方海洋に於ける捕鯨可能頭數を三〇〇頭と決定した。カムチャツカ株式會社の意見に依れば之れを五〇〇頭まで高めることが出來る。捕鯨業の發展を計るため、第一次五ケ年計畫には東海岸に特殊の捕鯨根據地並びに特別捕鯨船隊を組織する案が包含された。之れを同時に鯨肉の罐詰を準備する捕鯨利用方法の擴大が提起された。日本が有利なる時期に支那市場に對して二百萬箱に上る該罐詰の販路を求め得たことを考へると、上述の提議は全く現實的な根據を有してゐる。

他の高價なる海獸――海象――は、以前はカムチャツカ東海岸一帶に亙り豐富に棲息して居たが、現在は前項と同樣なる米人の海獸探險隊による濫獲の結果、該部分のカムチャツカの海洋では殆んど全く絶滅に歸した。大量の海獸は唯チュコツキイ・アナドゥイルスキイ地方に存續するのみで、地方民に依る年捕獲高は三千頭に上る。北氷洋に於ける海象資源は開發の手が全く及んでゐない。

爾餘の海獸は殆んど全く開發されてゐない。その内第一位にあるは鰭脚動物である。一九二九年乃至三〇年に亙りフレイマン教授の指導下にカムチャツカ、チュコツキイ地方の海洋を調査した科學的産業探險隊は、オホーツク海に左の鰭脚動物を確かめた。小動物では――アキバ（褐色又は環狀海豹）ラルガ（斑海豹）クルイラトカ（縞海豹）、大動物ではラフタク（大海豹）、海驢。フレイマン教授の意見に依れば、オホーツク海の膳脚動物は明らかに未だ利用し盡されてゐない。數千頭を以つて數へる大群の海獸が、探險隊に依り氷塊及び海面上に見られたが、之れは明らかに該地方に於ける海獸捕獲業の見透しが極めて詳々たることを表示してゐる。

極東地方海獸捕獲業の狀況を全ソ聯と對比すれば左表の如し。

年次	全ソ聯チツェントネル	極東地方 千ツェントネル	極東地方 全ソ聯に對する%
一九三〇年……	四一・八	一三・一	三一・六
一九三一年……	一〇一・二	二九・六	二九・二

前統計に含まれるのは、國營企業及び協同組合機關の捕獲高のみである。カムチャツカの極東地方捕獲高に對する割合は、現存資料に依りて何等か信ずべき統計を算出することは極めて困難である。ドヴロウォリスキイの資料（註）に依れば、一九二八年の極東地方生産總額八六五、〇〇〇留の内、オホーツキイ、カムチャツカ地方の分は、六九一、

四八〇留、即ち七五%を占める。カムチャツカ、チュコツキイ、アナドゥイルスキイ地方全體に於ける國營企業に依る捕獲高は一九三一年に三、七四九ツェントネルであれた。同年、協同組合聯合會に依る海獸捕獲高は、ソ聯狩獵中央部の資料に依れば一、二一九ツェントネルであつた。地方民の捕獲高に關しては、一九二六年乃至二七年の國勢調査の外に資料を缺く。それに依れば捕獲高左の如し。

區名	頭數	%
チュコツキイ管區	二五、八〇五	六七・一
コリュクスキイ管區	一一、四二四	二九・七
カムチャツカ州	一、二二一	三・二
計	三八、四五〇	一〇〇

（註）『極東の經濟生活』一九三〇年

カムチャツカ州の海獸捕獲高は、最後に位する。住民の章節に於て述べた如く、海獸捕獲業に從事するは、本洲人口の僅かに一九・七%を占めるに過ぎない。

海獸捕獲の根據地を有する現狀は、カムチャツカ州に於ける海獸業主として巨大にして今日迄殆んど利用されなかつた鰭脚動物資源の發展の可能性を剝奪するものでは斷じてないが、それは唯加工業の再建的秩序及びその最大限の發達の一聯の方策を實施するを條件としてのみ可能である。

第七章　毛皮業

既述の如き毛皮資源の著しき濫獲は、その消長に反響せずには措かなかつた。その資源は激減し、殊に獺虎、膃肭獸及び海豹の如き最高價なる毛皮獸に於て激しかつた。

現在極東海洋に於ける獺虎は、唯コマンドルスキイ群島及びカムチャツカ半島の南端ロバトカ岬の二地點にのみ存續してゐる。コマンドルスキイ群島に於けるその數は、一資料に依れば一〇四〇頭、又他の資料に依れば六〇〇頭、ロバトカ岬に於ては約二五〇頭とされる。是等二地方の外に獺虎の存續するは、唯日本及び米國にして、兩者を合すれば略々同數に達する。全世界の獺虎資源は約二〇〇〇頭を算する。現在カムチャツカに於ける獵業は全く斷絶してゐる。一九二三年（當時は諸產業が未だ存續してゐた）に於ける資料に依れば、同年度に於ける獺虎の年捕獲高は三五頭であつた。十八世紀及び十九世紀初頭に於けるカムチャツカに於ては、年一、〇〇〇乃至一、二〇〇頭を捕獲したことを比較指摘しておかねばならない。

より甚だしき減少を來したのは膃肭獸であつた。過去に於ける捕獲高は極めて莫大で、その毛皮を輸送出來ず放棄して仕舞つた程であつた。十九世紀の初頭、プリブイロフ諸島に於て七〇萬頭の膃肭獸毛皮が燒却され、海中へ放棄された。ウナラシュカに於ては膃肭獸毛皮を以て殘燼を焚いた。膃肭獸の禁獵は既に一八〇五年より適用され

てゐたが、それは尙一層著しい濫獲期と交代し、從つて殆んどその目的を達することが出來なかつた。一八八三年にはコマンドルスキイ群島には未だ二百萬頭の膃肭獸が棲息してゐたが、一八八四年——百二十萬頭、一九〇六年——六萬五千頭、一九一一年——九千六百頭に減少した。がしかし新保護政策に依つて將來の減少は防止することを得、膃肭獸群は增大し始めさへした。一九一四年——一七、六五〇頭、一九一五年——二四、七五〇頭、一九一六年——三、一〇〇頭、一九一七年——四、〇〇〇頭となつた。併し外國武力干涉時代、膃肭獸の該保護政策はその活動を停止し、その頭數は再び激減した。一九二八年に於ける膃肭獸群は、カムチャツカ株式會社の資料に依れば一四、八四三頭であつた。一九三二年に於ける資料は二種あつて、カムチャツカ株式會社の資料に依れば、二、六九二八頭、コマンドルスキイ群島の島嶼經濟局の資料に依れば、二〇、〇〇〇頭であつた。極東毛皮調達局の見解に依れば後者の方が最も信ずべきものである。コマンドルスキイ群島は全ソ聯に於て唯一の膃肭獸產地である。

カムチャツカに於ける黑貂の濫獲は膃肭獸より以前に始つた。該地方への露人の渡來自體が、該地方に極めて豐富なる黑貂を產するこの噂によつて喚起されたものである。事實亦黑貂は多數棲息してゐた。それは一頭を以つてではなく、四十頭を一把として計算してゐた。スリューニン博士の報告に依れば、十九世紀の四十年代にあつてはチニコツキイ、アナドゥイルスキイ地方を含めたカムチャツカに於ける年捕獲高は十萬頭であつた。前記資料に依れば、大戰前十五年間の年捕獲高は平均三千乃至五千頭であつた。ドブロウゥリスキイの一九二三年に於ける計算も同額である。一九二三年即ち極東地方ソウヴィート化の直後に於けるソ聯各地方の黑貂捕獲高年額左の如し。

カムチャツカ	五、〇〇〇頭
ヤクート自治ソウヴィート社會主義共和國	二、九〇〇〃
極東地方(大陸)	三、四〇〇〃
西部シベリア及びウラル	三、〇〇〇〃
獸露	一〇〇〃
計	一四、五〇〇〃

カムチャツカの全ソ聯に對する黑貂業の比重は三〇%、全極東地方に對する比重は約六〇%を占める。爾後捕獲高は減少した。一九二四年及び一九二五年に於ける捕獲高は約三、〇〇〇頭、二年間の禁獵期の後（一九二八年）再び四、一九七頭に上つた。一九三〇年再び禁獵が布告された。禁獵年をも含めてソウヴィート期に於ける黑貂業は年約二、〇〇〇頭を捕獲する。その內カムチャツカ州に屬する數量を、中央官廳の統計に於て、分離することは不可能である。一九二六年乃至二七年の國勢調査は禁獵期に當つてゐた爲、黑貂業の眞狀を反映しなかつた。

一九二六年乃至二七年の國勢調査に依る爾余の獸類のカムチャツカ州に於ける捕獲高左の如し。

動物名	頭數	全カムチャツカ、チヴツキイ、アナドゥイスキイ地方捕獲高に比する割合
鼬	一、三八七	八〇・〇
狐	九、五六九	六〇・〇

註、該調査は、狩獵に從事する全人口を網羅したものではなく、その約八〇%を計上するを以つて、該數字は訂正を要する。

カムチャツカ州獣類

白狐	二	〇・一	
銀狐	三	一・一	
貂	三、五九七	四三・〇	
山地羊	七五九	六三・三	
馴鹿	五五六	六六・二	
類	三二四	七一・〇	

カムチャツカ州は白熊及び栗鼠を全く產しない。北極狐の捕獲は偶然に屬する。貂を除いて爾餘の動物に關してはカムチャツカ州は全捕獲高の五〇％以上を占める。

住民の使用する狩獵器具は銃、網及び罠より成る。その數量及び性質は一九二六年乃至二七年の國勢調査に依れば左の如し。

區名	狩獵具を有する世帶數	獵銃 平滑銃	獵銃 腔綫銃	網	罠
ポリシェレツキイ	五七五	五二八	五八六	二一四	三、二九〇
ペトロパウロフスキイ	四七一	五一二	五四六	二四九	三、三七四
ウスチカムチャツキイ	六二二	五九二	五一二	一四三	三、七二二

獵銃の所有數は甚だ多いものと認めねばならないが、にも拘はらず罠は斷然優勢を示してゐる。生業要具に關しては、各區間に甚だしき差違を認めない。

一九三二年度のカムチャツカ州に於ける調達計畫は六五六、〇〇〇留と豫定された。即ち第一次五ヶ年計畫に於ける毛皮調達は、價格に於て嘗に減少しなかつたのみならず反つて增大した。乍併之れよりして毛皮調達の原料根據地が良好なる條件下にあるこの結論は出來ない。反つてカムチャツカ株式會社の資料は、「毛皮獸捕獲高の組織的減少は、オホーツク・カムチャツカ地方に於ては毛皮獸の基本資源が利用され且つ絕滅されつつあると考へる根據をなす」と確認してゐる。この巨大なる會社の認識は、住民自身の證言及び愁訴に依つても證明される。

全チュコツキイ、カムチャツカ地方に於ける第一次五ヶ年計畫の毛皮調達額（單位千留）左の如し。

毛皮類獸類及び毛皮	一九二八年（註）	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年
豫定	一、〇九八・四	八七七・八	九七三・二	一、〇一八・四	九九五・二
實績	一、一三三・三	一、〇五九・九	一、〇九七・六	一、二四六・八	一、四五八・〇

（註）カムチャツカ株式會社の報告資料

從つて毛皮調達の年々の增大は、獸類捕獲高の增加に非ずして調達の良好なる組織化及び國外密輸に依る毛皮の逸脫との一層精力的なる鬪爭の結果に歸すべきである。近年カムチャツカ株式會社は商品交換資金を補給されたその調達機關を通じて本地方奧深く侵入し、住民の大分の調達を包含した。一九三〇年の毛皮調達に關して、カム

チャツカ株式會社は、それが「一つの尾と雖も個人經營者に渡すな」と云ふスローガンの下に捲起されたカンパに轉化したと報告してゐる。最初カムチャツカに於ける毛皮調達は狩獵貧農大衆と富農との闘爭であつた。調達に於ける社會主義競爭は、少年團體に到るまでの全黨並びに社會的機關を包含した。この道を進めば、將來毛皮調達の增大が達成されるのであるが、之れは資源問題を變化するものではない。獸類は消滅してゆく。最も高價なる獸類北極狐及び銀狐は僅かに數へる程しか捕獲されない。一九二六年乃至二七年の國勢調査は、總計十三頭の青色北極狐の捕獲高を計上してゐるに過ぎない。漸次頻繁になつた黑貂の禁獵並びにその捕獲高の漸減は、黑貂業が危機に立至つてゐる事を示してゐる。開始された地方移民、木材調達、道路構築――これら凡ては獸類破滅の過程を速進した。乍併この事はカムチャツカの毛皮業を斷念すべきことを決して意味してゐない。反つて毛皮業の現狀は、過去の如何なる時期に比べても比較にならぬ程著大なる見透しを有つてをり、毛皮收入はソヴィート政權樹立以來の最も豐獵なる年が到達しなかつた規模に發展し得る。乍併之の見透しは毛皮業の完全なる再組織と關聯してゐる

此の關係に於て最も意義の少いものは、禁獵期及び禁獵區の設定であらう。當地方當局者の意見に依れば、カムチャツカ地方の諸條件下に於ては毛皮獸の保護及び監督は――至難事である。殊に禁獵區の設定は該地區に於て有用動物と共に有害動物の繁殖をも助長すると云ふ否定面を有する。禁獵及禁獵區設定の條件付であるとは云へ、カムチャツカ毛皮調達の主要源泉として原始的な狩獵業に期待すべき何等か特別の根據は存在しない。無論、該方法は將來にも存續するであらうが、その中に將來最大の役割を果すべき文化的養獸業への移行形態としての新らたなる形態が既に胚胎してゐる。

カムチャツカに比し遙かに惡條件下に在る諸外國に於て、現在如何に養獸業が進展しつつあるかは、左表を見れば分る。「ソ聯北方」誌一九三一年第一號の資料に依れば、一九三〇年度に於ける養獸場の數左の如し。

加奈陀	七五〇〇
北米合衆國	五〇〇〇
諾威	一四〇〇
獨逸	五〇〇
瑞典	五〇〇
佛蘭西	一五〇
英吉利	一七五

「二十五年前」――と「ソ聯北方」誌は記載する――「合衆國に於ける毛皮業は二千五百萬弗の收入をあげてゐたが、現在は養獸場の發展に依り七千萬弗に增加した。最近十年間に北米合衆國に於て養獸場へ投資された額は五千萬弗に達した。

カムチャツカは養獸業を大規模に進展せしむるに足る最も有利なる自然的狀況に惠まれてゐる。現在養獸業は次の二方法に依つて實行されてゐる。即ち一つは一定の圍い內に於て、他は或る一定の島嶼全體を養獸場とし、其所で獸類は自由に繁殖し成長し得る方法である。カムチャツカに於ける毛皮獸の養殖は、コマンドルスキイ群島、ボ

リシヨイ・シャンタルスキイ、フェクリストフ、カラギンスキイ、ウランゲリ及びオリスキイ島に集中されてゐる。此等島嶼中、カムチャツカ州の領域内にあるものは、唯一つコマンドルスキイ群島に基本的養獸業が存在する。最近までペトロパウロフスク附近に存續してゐた圍式養獸場は、その位置不良にして毎年積雪に埋はれるを以つて廢止された。

コマンドルスキイ群島は銀狐、鹽腐獸及び鐵虎の大量的養殖根據地である。一九二九年乃至一九三〇年よりは柵内に於ける銀狐の飼養も亦開始された。コマンドルスキイ島嶼經濟の現狀に就いては、矛盾せる報告がなされてゐるが、この事が既にコマンドルスキイ群島に於ける鹽腐獸經濟の全く平常なる條件下にないことを示してゐる。若し鹽腐獸經濟を順調に發展せしめる曉には、その頭數は急テンポで增大するであらう。その好例として北米合衆國領ブリブイロフ島に於ける鹽腐獸頭數を例證しよう（單位千頭）

一九一二年	二一五
一九一九年	四一七
一九二三年	六三五
一九三〇年	八〇〇

現在（一九三二年）「ブリブイロフ諸島に於ける鹽腐獸群は百萬頭を數へ、その年產額はソ聯側の鹽腐獸群より稍大にして、而もブリブイロフ諸島の面積はコマンドルスキイ諸島より著しく小さい」（全ソ聯毛皮業本部の資料より）。コマンドルスキイ群島の鹽腐獸群は毎年六ケ月間は日本海岸へ群來し、其所で日本側漁業家に依つて濫獲される事實を忘れてはならない。現在コマンドルスキイ群島に於て屠殺される鹽腐獸は七五〇乃至八五〇頭である

鐵虎は、コマンドルスキイ群島に於ける數年間に亘る禁獵の結果、その頭數は增加を來した。カムチャツカ株式會社は、一九三二年の鐵虎數を一、〇四〇頭と算してゐるが、島嶼經濟當局は右の數字を低下し、六〇〇頭と見做してゐる。（一九二八年に於ける總計は四〇〇頭であつた。）コマンドルスキイ群島に於ては小區域の柵内に於て鐵虎の人工養殖が試みられたが、人工養殖に必須なる諸條件を具備しなかつたため、失敗に終つた。鐵虎（一對）は死滅した。乍併この事は決して鐵虎を一定個所に於て飼養することの可能性を否定するものではない。將來は良好なる諸條件下に再度實驗する必要がある。

コマンドルスキイ群島に於ける銀狐の頭數は、島嶼經濟當局の資料に依れば、一九二八年には三、三五七頭、一九三二年には二、六五〇頭で、五ケ年計畫年度内に七〇七頭を減少した。併しカムチャツカ株式會社の計算に依ると一九三二年度の棲息頭數は三、六六五頭、一九二八年に比し二八八頭の增加を示してゐる。コマンドルスキイ群島の動物飼養部長マリコーウイチは、一九三三年捕獲期間（一月——二月）に限に依つて捕獲された北極狐の數を二、六三四頭と計算し、捕獵されなかつたものを合すれば五、八二五頭と算定してゐる。

是等の報告の矛盾は、北極狐經濟が未だ必須なる高度にまで達してゐないことを立證するものである。全ソ聯毛皮業本部の調査は、高率なる斃死率を明白に指摘した。然し北極狐毛皮の高價なることは、その販路の有利なることこと等の諸條件は、地方產業の最有利なる諸部門の一つとして北極狐の飼養を發展せしめるものである。

第八章　農　業

カムチャツカに於ける農業の將來の發展に關する問題は、著しく實際的意義を有してゐる。之れが解決は地方的生産の食料品に依る住民の配給問題を解決することを意味し且つ之れに依り高價に値するその大陸よりの移入を免れしめる。該問題は現在殊に著しく尖鋭的に感じられる。何となればカムチャツカは强化せられた移民期に入り、その爲之れが食料品配給は巨額の費用を要する複雜なる大問題に發展するものであるから。

農業の主要要因である氣候と土壤は上述の如く一見カムチャツカ河谷の若干部分を除けば農業に關し殆んど不利なる光景を呈してゐる。農業發展に有利なる耕地の狀態に關しては、特殊の障碍は存在しない。移民地調査隊の調査は、農業に有利なる耕地が全地方に存在することを指示してゐる。

種々なる時期にカムチャツカ地方農業發展の可能性を研究した調査者の達した結論は、啻に著しく相違するのみならず亦正反對を爲すのである。

本問題研究の爲、政府より一八四五年にカムチャツカへ特派されたブルイチェフは全然否定的な結論を與へた。彼の意見に依れば、「百年以上も實施せられて來た農業の諸體驗は……カムチャツカに於て農業に從業することの全然不可能なることを證明した。降雪極めて早く融雪遲く、霧多く早期の降霜ありて冷寒なる露、嚴寒すらが半島の最も氣候穏和なる部分に於てすらその穀物開花期に襲來する。

是等の事實は、少くとも穀物播種に惡影響を與へる自然的諸原因が變化しない限り、カムチャツカに於ける正常且つ廣汎なる農業の創設の確定的な不可能性を立證するものである。」

學士院會員コマロフ（一九〇八年乃至九年調査）は、カムチャツカを農業地方に變化せんとするには、カムチャツカの夏を、自己の勢力範圍に包含する大なる冷藏庫たるオホーツク海を乾燥すること以外にないと考へてゐる。

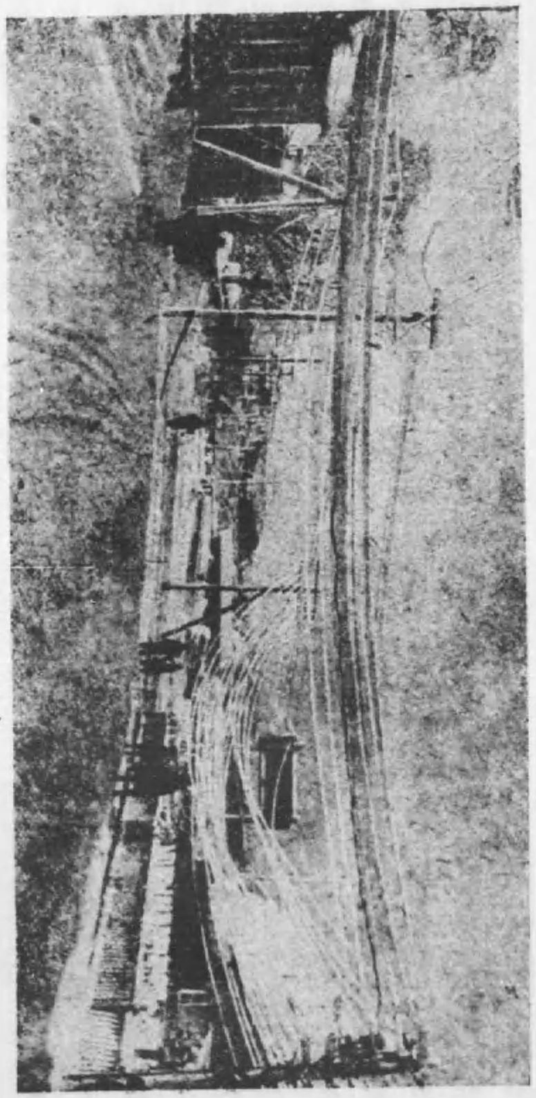
クラシュク教授（一九二八年調査）は、農業に關してカムチャツカを區分した。彼の意見に依れば、西海岸地方は少數の小地區、主として海風より遮蔽された河内谷にのみ農業が可能である。但し中部地方の若干部分では農耕條件甚だ有利で、該地方に於ては、啻に當地方の需要を充足するのみならず、移出するに足る過剩を産出する程大規模に小麥を播種することが出來る。

極東地文觀測所長コロスコフ（一九二八年調査）は、カムチャツカに於ける農業發展の可能性が依據する決定的契機となるのは、氣溫及び植物成長期の持續性即ち溫暖であつて、爾餘の氣候的諸條件例へば降水量、積雪量、溫度、日照は――カムチャツカ農業にとつて打克ち難い障碍を成さず、反つて其等の諸條件は大部分可成り有利なることを發見したと云ふ。この決定的な要因たる溫暖性の狀況を分析してコロスコフは、唯カムチャツカ河谷及びチギリスキイ區（註）に於てのみ秋蒔ライ麥及び若干の需要少き春蒔穀物の播種の試みが可能であるとの結論に達した。彼は爾餘の諸地方に就いては、唯菜園に於ける野菜の栽培のみを可能と考へてゐる。

（註）西海岸地方、ボリシエレツクの北方――ウャトカと同緯度

之れと同じく綿密にカムチャツカ農業の可能性を述べたものは、その試驗的穀物播種に基く移民局の探險隊（一九〇八年）の豫備報告である。

斯くの如き結論の複雜性及び矛盾性は、嘗てカムチャツカがその農業の有利性如何と云ふ意味で繼續的、體系的調査の對象となつたことがなかつた結果に依る。上述の事態は通常探險隊がその短日月の調査期間に爲し得た早卒なる觀察に過ぎない。而も斯かる觀察は試驗的播種を伴ふ場合に於てすらも殆んど信賴するに足りない。僅か一乃至二年を費すのみにて、該觀察は地方的諸條件の複雜性、多樣性及び變易性を反映し得ない。播種の結果は、根本的でない偶然的な氣候現象又は當該地區或ひは當該年度の特殊性が影響し得るのである。カムチャツカの地勢が複雜性を帶びてゐること、山脈及びその間の河谷の豐富なること、地下の諸處に存在する溫泉――是等の諸要因は、カムチャツカに恰も一氣候地帶に屬する如く見えても、實は諸種の農業的性質を有する所謂微小區を創設する原因となつてゐる。從つて一微小區に見られる植物發育の現象が、之れと竝ぶ他の微小區に存在しない。農業の運命及び發展性に對する興味ある影響は、例へば火山活動の如き全く特殊の地方的要因に依ることがある。デイトマル及び彼に次ぐ幾多のカムチャツカ調査者は、「雨と降る火山灰なくして收穫を待つことは不可能である」との明らかに同一根據の地方民に依る意見を傳へてゐる。眞黑な灰の層に蔽はれた雪は、より多く日光を吸收し、より急速に融け、土地はより早く積雪から解放され、その爲より早く播種を爲し、穀物は嚴寒の襲來前に成熟することが可能である。積雪の早期融解の意義大なる事を理解する爲には、通常カムチャツカに於ける積雪は甚だ永く存續する事を考へねばならぬ。カムチャツカの南端部に於てすら、積雪は五月末に至つて始めて融解し、個々の地方に於ては六月に至る迄堆積してゐる。この事は遲い播種を制約し從つて穀物の成熟も遲れる。一九〇八年の移民局探險隊の試



（1929年5月1日のペトロパヴロフスク）

驗的播種に於て、その播種穀物は全部成熟したが、その内若干は十一月一日頃成熟したのだつた。

地方農業の凡ゆる實驗は、これが既に二百年に亙つて行はれたにも拘はらず、之れも亦結論となるべき確實な資料を與へない。カムチャツカに於て初めて農業を創設せんとした最初の試みは、露人のカムチャツカ征服直後の十八世紀末葉に屬する。政府は此の目的を以つて該地方に移住した農民に種子及び農具を配給し、之れに專門家を配屬し、農民指導の目的で官營の農事試驗場をさへ創設した。乍然これも無效に終り、農業は發達しなかつた。地方政權の最重な看視の眼が住民に注がれてゐる間は、結果の善惡に係はらず播種は續行されたが、その手が弛められ農民の自由になるや、彼等は直ちに農業を捨てゝ獵人、漁夫に轉向した。

叙上の試みを檢討してみるに、同一の結論に達する。即ち粒穀栽培物に關する收穫は不安定であつた。稀れに粒穀農作物（大麥及び裸麥）が成熟し、豐年の年も有つたが、之れに次ぐ數年は穀物が遲い春季及び早い秋季の嚴寒襲來のため枯死し或ひは暖氣の不足及び降雨の爲に成熟しなかつた。而も之は氣候の最も溫和なるカムチャツカ河谷及び一部分ペトロパウロフスク近傍に於てゞある。西海岸地方に於いては、原則として穀物は成熟しない。既にクラシュニシコフの記せし如く「大麥は……高さ及び濃さに於てどうやら見られる程のものでその他には何の益も與へない。」

菜園に關しては全く異つた景況を呈する。馬鈴薯、人蔘、大根、赤大根、蕪青の如き農作物は到る處に成功してゐる。嚴寒より防備された地區の馬鈴薯及び人蔘の收穫は二〇〇ツェントネル、大根及び蕪青は二五〇ツェントネルに達する。大部の地區に於てはキャベツ及び葱が成熟する。當地方の諸條件に最も適しない野菜は胡瓜で、その試植は大部分失敗に終つた。

播種面積は樣々に計上されてゐる。スリューニンの資料に依れば、カムチャツカに於ける大麥の播種面積だけでも一八九〇年には六五〇ヘクタールを算した。プロゾロフ（註）は九十年代の全播種面積は六六〇ヘクタールで、その内六二六ヘクタールは菜園に屬し、唯三四ヘクタールが粒穀農作物に屬すと斷言した。プロゾロフの資料は、それが「一八九五年沿海州概觀」なる官廳刊行物に據る限り一層確實であると考へぬばならない。若しそれが確實だとすれば、地方民は該面積を以つて自己の野菜に對する需要を殆んど完全に充足し、穀物は購入すべく餘儀なくされたのであらう。

（註）オホーツク、カムチャツカ地方の經濟的概觀

乍然、一九二六年乃至二七年の國勢調査當時には、スリューニン及びプロゾロフの統計の痕跡すら殘存しなかつた。同調査報告に依れば、一九二五年度に於ける播種總面積は、僅かに七三ヘクタールに等しく、その内〇・〇八ヘクタールは燕麥及び大麥で爾餘は菜園に屬する。この事は、カムチャツカ調査者の側から說明され得ず、斯くの如き播種面積の破局的減少の原因は今尙ほ不明のまゝである。事實二十世紀の初頭には大事件がカムチャツカに生じた。即ち上述の如く企業的漁業の廣汎なる發展が開始された。露西亞及び日本漁業家の支拂ふ高率な賃銀に惹かれた地方民が、農耕に從事することを不利とし之れを放棄したことは極めて當然である。乍併斯かる說明は當該時期

にカムチャツカを調査した調査者側より論駁されたものであるが、これは最も滿足すべき說明であらう。

概してカムチャツカの住民は漁撈及び狩獵に從事することを好んだ。何ごなれば前者は人間及び犬の食料を無限に提供し、後者は高價なる毛皮類を獲得することが出來、之れと交換に商人より必要量の穀物を受取り、特別の勞働なくして一年間の生活を保證し得るからである。カムチャツカに於ける農業發展を目的とする帝政政府の行政上の諸强制策は、それ自體、大陸より必要量穀物移入を回避する――と云ふ賢明なる目的をその根底に有してゐたがそれは地方民に他の經濟部門及び他の勞働利用を强制する地方經濟と衝突した。

斯かる條件下に於ては、農業發達に對する地方民の凡ゆる試みは、カムチャツカの自然的諸條件が該地に强固なる穀物經濟の創設を許すや否やの問題解決に充分なる、希望すべき支柱とは成り得ない。

是等の試みに基く唯一の結論、即ちソ聯爾餘の諸地方に固有の通常の方法に依つては、農業を創設することは不可能であると云ふことに歸着する。

カムチャツカに於ける畜產業の發達も之に劣らない意義を有してゐる。何故なら畜產業は住民に對し、肉類、脂肪、皮革、獸毛及び牽引力を提供するからである。當地方に移住して來た露人移民は菜園業と殆んど同時に畜產業に從事し始めた。一七三一年には、初めてカムチャツカへ一對の馬匹が移入され、有角獸はそれ以前に移入された。爾來畜產業は當地方經濟の牢固たる一部門となり、農業の破局的低下時にも維持されたのみならず、數量の增加を來しさへした。當地方の家畜數は左の如くである。

	一八九一年	一九一二年	一九二六年
馬	六二四	三、四七七	二、〇二四
大有角獸	一、八五六	一、五三六	四、四五三
小家畜	—	—	一六三

上記の數字は家畜の不斷の增加を表示してゐる。（註）

（註）該數字は、カムチャツカ州のみなこず。チュコツキイ及びコリヤクスキイ管區をも含む。尤も該二管區に屬する數字は極小と考へるべきものであらう。從つて上述の數字を以つて一カムチャツカ州を特徵づけるものと見做しても大過ないであらう。

前記自然資源の章に於いて述べた如く、カムチャツカ州內の畜產業は相當程度に草地に惠まれてゐる。多汁の飼料に關しても全く好適である。蕪靑、大根、馬鈴薯は二〇〇乃至二五〇ツェントネルに達する全く安定した收穫を齎らし、若干の地方に於てはタウチサ飼料の栽培も出來る。唯濃厚飼料、即ち粒穀飼料に關する事態が悪い。從つてソフホーズ及び科學的試驗所の焦眉の問題の一は、大麥及び燕麥の安定せる成熟と大量播種を奏功せしめることである。

當地方畜產業は自己の家畜種を作り上げなかつた。從つて、當地方に於てはホルモゴール種、ヤクート種、和蘭種、シメンタールカ種及びその他が存在する。ペトロパウロフスク市近在のセログラスカ村の經濟を描寫しつゝ、農學者クリウツォフは「ホルモゴールカ種の家畜は熱心な世話と飼料を得、その代り良質の乳を與へてゐる」と書

いてゐる。爾餘の諸村落に於ては異つた光景が見られる。例へばエリゾウ村に於ては、同じくクリウッ・プの言葉に依れば「家畜は原始的諸條件下に在る。夏は放牧され、冬は野外でなければ柱に屋根の付いた壁なしの欄の中に乾草の上に横たはる。牝牛は全く搾乳される（之れが爲犢は飢ゑ、屢々死滅する）にも拘はらず、良好なる飼料に依つて良種を存し種族を絶やさない。

農學者チュルヌイシェフは、カムチャツカ河岸に於ける家畜を特徴づけて曰く「搾乳量少く、搾乳皆無なる期間長く、その重量は約四ツェントネルである。河谷内の家畜は純種を含めて乾草の外、何の飼料もないのに拘はらず、發育優秀で、若干の例外を除けば一年間野外に生存する。家畜の良好なる發育を助長するは、專ら森林及び凍土帶に存在し、豐富にして多汁の牧草を提供する豐潤なる牧場である」と。

總て是等の批評は、カムチャツカ畜産が廣汎なる見透しを有してゐることを確認するものである。今日に至る迄のその缺陷は無能なる世話、不良なる種牛、獸疫、獸醫監督及び一般に指導方法の缺除に基因した。此點に關して住民は自ら自分勝手に行動した。にも拘らず畜産業は嘗に死滅しなかつたのみならず、毎年發展して行つた。若し凡ゆる方面より畜産業進展に對する助成案を採用する曉には、ペトロパウロフスク農事試驗所に於ける小規模の實驗が示した如く、大有角獸飼養殖は地方經濟の最大部門の一となるであろう。

養馬業問題は更に鋭き意見の相違を喚起してゐる。馬匹の飼料資源問題に就いては上述した事で充分說明出來る如何に飼料問題が好條件に惠まれてゐるかは、つい最近までカムチャツカ河谷に一年中牧草によつて生存してゐた野性の馬群が棲息してゐた事實が雄辯に立證す。現在、住民は該馬群が彼等の飼養する馬を連去ると云ふ口實の下に之れを絶滅して仕舞つた。乍併、是等の意見の相違の根底には飼料問題ではなく、異つた問題が横はつてゐた。即ち積雪深き當地方の冬季の諸條件下に於て果して有効に馬匹の利用が出來るか否やと云ふ疑問に就いてである。

カムチャツカ地方に於ける小家畜の畜産業は、牧羊業と養豚業で、前者の爲には山間の牧場が利用される。ラムート及びアレウト民族管區の農業問題は特に調査せねばならない。

既述した如く、ラムート民族管區に於て主位を占めるものは養鹿業である。假へ遊牧經濟より定著經濟へ移行しても――斯る課題はラムート人の前に横はつてゐる――養鹿業は保存されねばならない。（註）その馴鹿群は比較的少數であるが、住民に對する肉類供給上に確かに顯著なる役割を演じ得るからである。併しその際原始的養鹿業より文化的形態へ移行せしむべく根本的再建を必要とする。馴鹿の合理的飼養及び世話、獸醫施設に依る助力、販路の組織、燻製品（舌、ハム）製造の爲の加工企業の組織、皮革、毛、角の加工其他に就きラムート人に對して廣汎なる援助を要する。是等の諸條件下に置かれ且つ集團化の曉に於てのみ、ラムート人養鹿業は、その馴鹿群を增大せしむる事が出來る。がしかし、馴鹿群增大の限界は、飼料根據地が全く未調査に屬するので、現在之れを確定することは不可能である。

（註）一九二六年乃至二七年の國勢調査に依りチュコッキー、アナドイスルスキイ、カムチャツカ地方に算定せられる家畜總數七二五、〇〇〇頭中一九、二九四頭を占める。

カムチャツカ州要塞

牧畜に於ける個人

上述の諸基底に基く養鹿業の再建は、ラムート人中の貧農中農――大衆にとつては、啻にその經濟狀態を改善するのみならず亦社會――政治的に即ち多數の馴鹿を有する富農經濟のラムート人大衆に對する影響を清算する意味に於ても決定的意義を有する。それは文化的助力に於ける爾餘の諸政策と共に、レーニンの民族政策の精神に於ける小民族發展の問題を解決する。

養鹿業と竝んでラムート民族區に於ては、農業として菜園業を組織することが出來る。それは住民の食料狀態を改善するであろう。

アレウツキイ民族區に於ても亦、その自然的諸條件は副業部門として菜園業及び畜産業を組織することが出來る。此の意味に於ては既に極東地方執行委員會附屬北方委員會は、ソ聯毛皮業本部に對し、コマンドルスキイ群島に於ける菜園業發展の試驗を行ひ且つ住民間に農業勞働、家畜及び濃厚飼料の移入を實施することに依つて畜産業合理化への諸對策を採用すべく命令した。

第九章　ソフホーズ・コルホーズの建設

食料配給問題を短日月に解決すべき必要に迫られて、ソウヱート・カムチャツカは急速に農業發展過程を辿ることゝなつた。この發展は同時に二方策、即ちソフホーズとコルホーズの方向形態下に於て行はれた。

最初のソフホーズは一九三〇年に、標式的な自然的諸條件を有する次の地方に組織された。その一つはペトロパウロフスク附近に、他はカムチャツカ河谷に、第三は西海岸ボリシェレツク附近に設立された。是等の諸地點は人口最も稠密なる地方に位置し、漁業の中心地である。從つて亦ソフホーズ生産品の主要需要者でもある。此等ソフホーズの外に漁場に附屬する八つの農場が、イチヤ、クルトゴロウヤ、キフチク、ボリシェレツク、オバーラ、オセールナヤ、アワチヤ及びウスチ・カムチャツカに組織された。農場に於ては、乳牛を飼養し菜園を造る。その直接の課題は、乳製品及び野菜を漁夫へ供給することである。

最初ソフホーズは三方面即ち菜園業、畜産業及び小麥、裸麥、燕麥、大麥、蕎麥の播種を含む粒穀農作物の栽培に自己の生産力を注いだ。一九三〇年及び一九三一年の粒穀農作物栽培の失敗に鑑み、粒穀の播種を中止し、爾後は專ら菜園畜産方面にソフホーズ作業を再建すべく餘儀なくされた。

上述の根據に基くソフホーズの組織的＝生産計畫の再建は、將來の農業發展に有利となつた。各區別の播種面積及び播種者の狀況は左表の如し。（單位ヘクタール）

區名	ソフホーズ				コルホーズ				個人經營者				計			
	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
ウスチカムチャツキイ	二六・七九	四一・八六	二〇四・三	三・八	二六・〇	二二五・〇	四一・三	二七・〇	四〇・〇	七一・九七	九四・八六	四九九・三
ボリシェレツキイ	二〇・〇	一五一・八	一五二・〇	二〇・〇	二五二・五	一五五・〇	二四・〇	三七・〇	〇五・〇	六四・〇	二二四・三	三五五・〇
ペトロパウロフスキイ	一四九・六三	六八・七	四八四・〇	三八・八	一八〇・〇	三二〇・〇	一七・五	四七・〇	六五・〇	二〇六・九一	九二三・七四	九一九・〇
ペトロパウロフスク市及カムチャツカの諸企業株式會社	—	—	一〇〇・〇	—	—	—	五・六	三	三〇	五・六	一三・〇	一三〇・〇
計	一九六・四	八〇・四	九三・三	六三・六	二四一・五	七五〇・〇	八八・三	二四・〇	二〇〇・〇	三四八・三	一、二四五・九	一、八三三・三

一九三二年の總計を國勢調査當時（一九二六年）に於ける本州播種面積六九・二ヘクタールに比較すれば、增加率は二、七〇〇％で、一九二八年即ち第一次五ケ年計畫の第一年に比べると二、二〇〇％の增加である。換言すればカムチャツカは、現在に至つて始めて、ソウヱート政權下に於て自己の農業を組織し、之れに依つて二〇〇年に亘り帝政政府が空しく戰つて來た最も困難なる問題の一を解決したのである。

各部門の播種者は、播種面積の極めて急速なる增加を計つた。それは啻に組織方法の正しさのみならず、亦カムチャツカに於ける農業發展の高度なる經濟的合目的性及び活動力をも證明する。殊に集約的なる增加は社會主義部門（ソフホーズ及びコルホーズ）に於て見られる。一九三〇年の播種面積を一〇〇とすれば兩部門に於ける動態左

の如し。

年次	社會主義部門	個人經營部門
一九三〇年	一〇〇	一〇〇
一九三一年	四三一	一四一
一九三二年	六四四	三九五

農作物別播種面積增加の動き及び收穫高並びに各部門別播種者合計並びに各部門別收穫總高左表の如し。（註）

註、左表の資料はカムチャツカ株式會社及び「北方ソ聯」誌一九三二年第一——二號より引用せり

年次		ソフホーズ		コルホーズ		個人經營者		全部門總計	
		一九三〇年	一九三一年	一九三〇年	一九三一年	一九三〇年	一九三一年	一九三〇年	一九三一年
馬鈴薯	面積（ヘクタール）	三六・六	三三・三	二〇四・七	一三一・一	七三・〇	八六・八	一八九・三	西一・三
	收穫高（瓲）	一・八	〇・八	五九・五	五・三	三・八	四・八	三・一	二・五
	收穫總額（瓲）	八・六	二六六・〇	一三一・〇	六八・〇	二七七・〇	四三一・一	五六六・六	一、三五五・一
甘藍	面積（ヘクタール）	一〇・二八	二四・四九	六九・九	一・〇	三・一	六・九	一四・三八	四八・五九
	收穫高（瓲）	二・〇	三・六	五・四	二・七	三・六	七・一	二・四	四・三
其他の蔬菜（註）	面積（ヘクタール）	一四・八五	八八〇六	二四四・九	三・一	三・五	六・五	二九・五	二九・五
	收穫高（瓲）	二・二	〇・八	資料缺	一・九	六・九	三・〇	二四・一	一九・五
	收穫總額（瓲）	三一・五	七五・六		五・六	二四・一	一九・五	三・〇	五三・八
穀粒並びに播種草笨	面積（ヘクタール）	二四・七二	四四・〇	一四四・〇	—	—	—	〇・六	二四・四五
	收穫高（瓲）	唯穀のみが採取された。穀粒草笨は根を家畜飼料に供した。			—	—	資料ナシ	五・〇	二・二
	收穫總額（瓲）	穀粒は收穫なし			—	—	上同	三・〇	五三・八三
					—	—	—	二〇・七	九二・七

（註）コルホーズ及び個人經營者に於いては唯根果のみを計上した。

ソフホーズは、各種農作物の播種面積に於てコルホーズ及び個人經營者に追ひついたが、收穫高に關してはソフホーズは遙かに低位に止つてゐる。明らかにコルホーズは、組織時代の若干の缺陷を未だ根絶しない。地方民は諸種（土壤的、地形的等）の關係に於て特別に選擇した小地區に於いて播種を行ふに反して、ソフホーズにあつては大面積を問題とせねばならぬ限りに於て、地方民の諸經驗を常に全部的にソフホーズの實踐に移し得ないことは明らかである。ソフホーズがその作業に於て據るところの農業の科學的＝審査的實驗に關しては、カムチャツカにはそれは全然存在してゐない。

全く具體的な課題——農業生產品に於ける缺損を清算すべきことが、カムチ ツカに存在する限り、即ちこの觀點

よりその達成せる成果を評價することは重大である。統計に據れば現在この課題は未解決である。大ロシヤ社會主義聯邦ソウヴェート共和國農務人民委員部の標準量に依れば、北地地方住民一人當りの標準量は、馬鈴薯一四五瓩、甘藍三〇瓩、其他の野菜三〇瓩となつてゐる。然るにソフホーズは、僅かに左の數量しか供給する事が出來ない。即ち一九三一年度の收穫狀態では馬鈴薯一二・五瓩、甘藍六瓩、其他の野菜三・五瓩、一九三二年度は馬鈴薯六瓩、甘藍一六瓩である。この生產品中には種子としての馬鈴薯も含まれてゐる。

住民自身の播種に依るその需要充足の問題は良好に解決されてゐる。住民の一九三一年に於ける收穫高一人當り馬鈴薯七五瓩、甘藍五〇瓩、其他の野菜二瓩を確保した。從つてカムチャツカのソウヴェート機關の前には、播種面積殊に收穫高の增加に關して將來の農業發展の課題が存在する。

類似の課題がカムチャツカ畜產業にも存在する。ソフホーズの組織的生產計畫を作製せるカムチャツカ株式會社はこれが爲左の諸項を認めた。

（イ）乳製品の集約的牧畜

（ロ）生肉に對する地方的需要充足及び將來に於ける移出用ベーコン、卵製品及び毛皮獲得の爲の營業的養豚業飼鳥業、養兎業

（ハ）諸企業並びに漁業用の羊肉、羊毛及び羊皮獲得の爲最有利なる自然牧場の利用に依る集約的牧羊業、菜園業と並んで之れに適應して、カムチャツカのソフホーズには亦極めて顯著なる畜產業の方向が賦與される。

住民に關しては前章より明らかなる如く、自己の努力を專ら大有角獸の飼養に限定してゐる。カムチャツカ州に於ける畜產業狀態は左表に依つて明らかである。

地方別	家畜群	一九二六年	一九二八年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年（計畫）
ウスチカムチャツキイ	馬	三八六	四一三	三五六	六一七	八〇一
	大有角獸	八三五	一、一二三	一、三四〇	一、七五〇	三、〇三七
	豚	四〇	資料ナシ			
ボリシェレツキイ	馬	二八九	二五三	四三六	四六七	五七四
	大有角獸	一、二七九	七六九	一、三四三	一、四五五	一、六九二
	豚	六	資料ナシ			
ペトロパウロフスキイ並びにペトロパウロフスク市	馬	六四八	六七二	七二七	一、〇三八	一、九〇九
	大有角獸	一、三五五	一、三二四	一、五三〇	一、九五九	三、二六四
	豚	八	資料ナシ			
アレウツキイ	馬	—	—	—	—	—
	大有角獸	五七	本欄の數字はペトロパウロフスキイ區に含まる			
	豚	八九	—	—	—	—

ブイストリンスキイ	馬	一三四	本欄數字はウスチカムチヤツキイ區に含まる			
計	馬	一、四五七	一、三三八	一、五二一	二、一三二	三、〇八四
	大有角獸	三、五二六	三、二一六	四、二一三	五、一六四	七、九九三
	豚	一四三	資料ナシ		九六一	二、六七〇

一九三〇年、ソフホーズの組織に際し浦潮より移入された家畜は、大有角獸——三六九頭、小有角獸——四一二頭、豚——二九八頭並びに鳥類——三二一四であつた。一九三二年にヤロスラフスク種の幼畜一五〇頭が移入された。該家畜並びに舊ペトロパウロフスク農場より得たる家畜は、以後のソフホーズ發展の根據となつた。

各種家畜の増加は、農業に於ける播種面積の増加よりも更に緩慢なるテムポを示してゐる。

左表は部門別、一九三一年及び一九三二年の家畜數の分類表である。（註）

註、左表は、前誌中の農學者コパチェリの資料に依る。カムチャツカ株式會社の資料中にソフホーズに屬する富畜が分類されてゐない爲、諸部門も同一資料に依る。

地方別	家畜名	ソフホーズ 一九三一年	ソフホーズ 一九三二年	ソフホーズ 一九三三年（計畫）	コルホーズ 一九三一年	コルホーズ 一九三二年（計畫）	個人經營者 一九三一年	個人經營者 一九三二年（計畫）
ウスチカムチヤツキイ	馬	五〇	一二〇	—	二六	二一〇	五五一	四七〇
	大有角獸	一二〇	一、一八二	—	五九	三八四	一、五七二	一、四七二
	豚	二〇〇	三三八	—	三六	二二八	—	—
	鳥類	一〇〇	三二〇	—	—	—	二五〇	五〇〇
ボリシェレツキイ	馬	五〇	七四	—	六〇	二〇〇	三五七	三〇〇
	大有角獸	七二	一二六	—	一八五	四四二	一、一九八	一、一二四
	豚	一〇一	二〇八	—	一七	一五四	—	—
	鳥類	—	—	—	—	—	—	—
ペトロパウロフスキイ	馬	八五	二〇二	—	一三一	三〇〇	六二四	五六五
	大有角獸	二二四	四三六	—	二六八	五四六	一、三三三	一、二三三
	豚	三五〇	一、二二六	—	六四	三三三	—	—
	鳥類	二、一二五	四、八〇〇	—	—	二〇〇	七〇〇	一、〇〇〇
本州總計	馬	一八五	三九七	—	二一七	七一〇	一、五三二	一、三三五
	大有角獸	四一六	一、七四四	—	五一二	一、三七二	四、一〇一	三、八二七
	豚	六五一	一、七七二	—	一一七	七〇四	—	—
	鳥類	二、二二五	四、八〇〇	—	—	二〇〇	九五〇	一、五〇〇
	馬	二一三	二三八	二六二	—	—	—	—

カムチャツカ株式會社の資料に依るソフホーズ部門の總計（註）	大有角畜	豚	鳥類
	四三三	五七一	五八一
	五四八	一、三二七	二、二〇七
	四一六	八三〇	二、二五〇
	—	—	—
	—	—	—
	—	—	—
	—	—	—

（註）一九三二年の數字は、年末に遂行豫定されるものである。鳥類に關する資料は、一九三二年十二月一日附である。農學者コバチリ及びカムチャツカ株式會社の資料に於けるソフホーズ總計の相違に注意せよ。

各部門統計の比較に依れば、農業に於ける社會主義部門はその發展の三年間に個人經營者を遙か後方に取り殘したが、畜産に關しては事態は異る。

家畜名	一九三一年 社會主義部門	一九三一年 個人經營部門	一九三二年（計畫） 社會主義部門	一九三二年（計畫） 個人經營部門
馬	四〇二	一、五三二	一、一〇七	一、三三五
大有角獸	二八	四、一〇一	三、一一六	三、八二七
豚	七六八	—	二、四七六	—
鳥類	二、二二五	九五〇	五、〇〇〇	一、五〇〇

馬及び大有角獸に關する一九三一年度の個人經營部門の優勢は、未だ甚だ著しきものがある。該部門は一九三二年に低下したけれど依然たる數字を示してゐる。第二次五ケ年計畫の第一年に於て、それが全く清算され而して社會主義部門が其處に支配的な情勢を占めるであらうと考へねばならない。その代り養豚業及び養鳥業にあつては社會主義部門は忽ちにして確固たる地位を占める。

畜産業生産品總額（廻單位）は左表の如し。（註）

（註）左表はカムチャツカ株式會社の資料を引用せるものにして、左の說明が附ぜられてゐる。「畜産業のコルホーズ及び個人經營部門の資料は純粹に經驗的方法に依り算定した、何となれば地方民に依る實際の屠畜に關する資料は存在せず且つ之れが地方統制機關に依る統計は存在しなかつたし、今日に於ても存在しない。

部門名	一九三〇年 肉	一九三〇年 乳	一九三一年 肉	一九三一年 乳	一九三二年（計畫） 肉	一九三二年（計畫） 乳	一九三三年（計畫） 肉	一九三三年（計畫） 乳
ソフホーズ	—	—	一九・七	三〇六・五	三七・一	三五五・〇	四八・〇	四七〇・〇
コルホーズ	—	一六〇・〇	一三・八	一六九・〇	一七五・〇	一、二三〇・〇	一二〇・〇	六〇〇
個人經營者	一三四・四	二、四八七・〇	一五二・〇	二、七〇〇・〇	九〇・〇	一、九三〇・〇	七五・〇	一、九〇〇・〇
計	一三四・四	二、六四七・〇	一八五・五	三、一七五・五	三〇二・一	二、六一五・〇	二四七・〇	二九七・〇

一九三二年の個人經營部門に於ける搾乳量の減少は、一方個人經營者の集團化、他方住民の富農部分の有害なる屠畜に依る家畜總數の低下に依つて大體說明がつく。

今のところソフホーズの商品性は甚だ微少である。條件付であつても、市並びに生業部門に對する人口に對する

配給にその總額を向けるとすれば、配給標準は、一九三一年に於て一人當り一年間の乳一五瓩、肉一三・瓩、一九三二年に於ては、乳一七瓩肉、一・八瓩である。上述の如く諸部門に於けるソフホーズに課せられた課題題即ち最短日月に市及び生業部門の人口に對して畜産品を完全に保障することは未だ遠い將來に屬する。

ソフホーズに於ける畜産業の生長は、主として家畜小屋の不足並びに大陸よりの移入による家畜補充の不足にかつてゐる。

畜産業發展に少からざる意義を有するは、現在大陸より搬入される強力なる飼料の體系的な不足である。この點ソフホーズは、自己の畜料による可及的急速なるソフホーズ經濟の保障の方向に向はねばならぬ。

最近まで養鶏業は、それが養犬業と兩立しないかの如き考から、カムチャッカには存在しなかつた。乍併ソフホーズの三年間に亘る實驗に依つて、養鶏業の營業的發展が全く可能であることが判明し、それは地方民經濟に侵透し始めた。

革命に到る迄長い間保持してゐた地位から、地方民經濟を移行せしめた力强い衝擊は、住民の集團化であつた。地方民の集團化に就いては、その特質を認めねばならぬ。カムチャッカの特種的諸條件の爲、該地方に於ても亦ソ聯の他地方に於ても、集團化の過程は生産組合のみならず、消費組合の集中する協同組合聯合の枠内に發生した生産組合の理想は、過去に於いても地方民の無關心ではなかつたが、唯その實際的適用は、その諸條件に依つて常に勞動の組合組織を要求される漁業で於てのみ行はれた。從つて漁業勞動組合は廣汎なる普及を見たが、原則としてそれは季節間の一時的の統一を成すに過ぎなかつた。組合は自己の漁撈施設を有せず、作業期間に限り漁業機關より之れを借用してゐた。斯かる組合は、短期間の營業季節に於ける經濟に限り、その個人的性質を維持し續けるから、原則的に新らなるものを地方生活に齎さらない。

ペトロパウロフスキイ・ソフホーズ内の鶏舎

現在は、量的並びに質的關係に於て事態は一變した。集團化の過程は、地方民の廣汎なる大衆を益々多く獲得しつゝある。僅か一年（一九三〇年乃至三一年）間に集團經營數は八六八（經營總數の三一・五％）より一、四四五（同じく五二・四％）に增加した。一九三一年のコルホーズ總數は、一九二八年の三一より七三に增加した。それは一時的結合から、全體又は個々の主要統濟部門を包含する强固なる集團經濟に轉化しつゝある。

上述の如き地方經濟の綜合的傾向に際し、コルホーズも亦必然綜合的性質を帶びるであらう。基本經濟部門、多くの場合、漁業を含めてコルホーズは農業、手工業及び出稼作業を自己の手中に

おさめ、斯くして複雜にして多面的なる協同組合に轉化する。一九三〇年、カムチャツカに移された最初の巨大なる赤軍コルホーズは、この特徴的挿圖を成す。純粹に農業組合として組織された該コルホーズは、その經濟活動の當初に於て、既に農業並びに漁業の組織化に着手した。乍併同時に移民に依つて煉瓦の生産、木材乾溜、製靴、錠前、林業等の如き、一聯の狹義の生産組合が組織されつゝある。カムチャツカに於けるコルホーズ建設の組織形態は、斯くしてソ聯中央地方に於けるより更に複雜となつた。

コルホーズの社會的構成は、一九三一年組合聯合の爲せる特別調査に依り明らかにせられ、それに依れば經營總數一、一五七中コルホーズ數は五七であつた。コルホーズの成員左の如し。（%）

小作人	三・八
貧農	四二・〇
中農	三八・四
勞働者	六・二
動務費	二・〇
家内工業者	七・六

乍作階級としての富農の清算に關する一聯の對策が講ぜられたのにも拘はらず、富農分子は假裝してコルホーズに入り込み、爲に之が廓清問題が持上つてゐると組合聯合は辯明してゐる。

地方民集團化の過程に於て極めて重大なる役割を果すものは、自己の經驗殊に技術的農具及び專門家を有するソフホーズであらう。現在この役割は比較的微弱である。之れが基因は、ソフホーズが未だ組織期を出でず、且つその技術的基礎が未だ小規模であるからである。加之カムチャツカに交通路を殆んど全く缺くことが大障碍となつてゐる。にも拘はらず、ソフホーズに近接する諸地點の住民は、既にソフホーブの良影響を受けてゐる。ペトロパウロフスキイ地方住民の播種面積增大の如きは、その好例をなすもので、それは住民に對しトラクターを提供したペトロパウロフスキイ・ソフホーズの活動に待つところが殆んど全部である。